

千葉市荒屋敷北貝塚・谷津上・須摩堀遺跡

一般国道51号(北千葉バイパス)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 8 6

建設省関東地方建設局千葉国道工事事務所
財団法人 千葉県文化財センター

千葉市荒屋敷北貝塚・谷津上・須摩堀遺跡

一般国道51号(北千葉バイパス)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 8 6

建設省関東地方建設局千葉国道工事事務所
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉市の北部を東西に流れる都川の周囲は、数多くの遺跡が所在するところとして知られ、中でも南北に2か所の大貝塚が連なる加曾利貝塚をはじめ、荒屋敷貝塚、草刈場貝塚、台門貝塚を中心とする貝塚町貝塚群などは、全国的にみても、極めて重要な遺跡であります。一方、現在の千葉市周辺は近年、人口の増加や産業の発展に伴い、交通事情が年々悪化していることも、また周知の事実であります。

そこで建設省は、事態の緩和を計るため、一般国道51号（北千葉バイパス）の改築工事に着手することになりました。千葉県教育委員会では、同事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、建設省をはじめ関係機関と協議を重ねた結果、路線の変更等で、できるだけ保存の方向をとりましたが、一部の遺跡については、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置をとることで協議が整い、昭和59年7月から12月まで、当文化財センターが、荒屋敷北貝塚、谷津上、須摩堀の3遺跡について、調査を実施することとなりました。

調査の成果は本書に詳しく記述されているとおりでありますが、先土器時代の礫群をはじめ、縄文、奈良、平安各時代の住居跡等が検出され、また、荒屋敷北貝塚から発見された多量の貝類は、縄文時代の食生活を明らかにするうえで貴重な資料となりました。このたび、整理作業も終了し、その成果を調査報告書として刊行する運びとなりました。

本報告書が学術的な資料としてはもとより、多くの方々に文化財についての知識と理解を深めるために広く活用されることを望む次第です。

最後に酷暑、酷寒の中で調査に従事された多くの調査補助員の皆様に対して心からの謝意を表わすとともに、建設省、千葉県教育委員会の御協力、御指導に厚く御礼申しあげます。

昭和61年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 山本孝也

例 言

1. 本書は、千葉県千葉市貝塚町に所在する荒屋敷北貝塚（201-026）、谷津上遺跡（201-027）、須摩堀遺跡（201-028）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、建設省の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、昭和59年7月1日から昭和59年12月20日まで実施した。
4. 発掘調査および報告書作成作業の担当職員は、以下のとおりである。
 - (1) 発掘調査（昭和59年度）
調査部長 鈴木道之助 部長補佐 根本弘 班長 矢戸三男 調査研究員 萩原恭一，
服部哲則
 - (2) 整理作業（昭和60年度）
調査部長 鈴木道之助 部長補佐兼班長 古内茂 調査研究員 田井知二
5. 本書の執筆は、田井知二が担当し、鈴木道之助の助言のもとに古内茂が加筆補正した。なお、荒屋敷北貝塚出土の縄文時代の貝層サンプルの分析については、主任調査研究員 小宮孟の教示を得て、田井が行なった。また、各遺跡の石質鑑定については、調査研究員 澤野弘から教示を得た。
6. 写真撮影は、現場を萩原、服部が担当し、整理に伴う遺物撮影は田井が担当した。なお、図版1、2に使用した航空写真は京葉測量株式会社の撮影によるものである。

本文目次

序文

例言

序章

1. 調査の方法と経過..... 3

2. 立地と周辺の遺跡..... 3

I章 荒屋敷北貝塚

1. 縄文時代..... 7

2. 奈良・平安時代.....18

3. その他.....34

4. 貝層サンプルの分析.....36

5. まとめ.....44

II章 谷津上遺跡

1. 先土器時代.....49

2. 縄文時代.....51

3. 奈良・平安時代.....61

4. その他.....69

5. まとめ.....73

III章 須摩堀遺跡

1. 先土器時代.....77

2. 縄文時代.....90

3. 奈良・平安時代.....90

4. その他.....93

5. まとめ.....94

挿 図 目 次

第1図	遺跡周辺の状況	4
——荒屋敷北貝塚——		
第2図	1(006)号跡・2(204)号跡実測図	7
第3図	1(006)号跡出土遺物	8
第4図	3(009)号跡実測図	9
第5図	3(009)号跡出土遺物	10
第6図	4(201)号跡実測図	11
第7図	4(201)号跡出土遺物(1)	12
第8図	4(201)号跡出土遺物(2)	13
第9図	5(202)号跡実測図	14
第10図	5(202)号跡出土遺物	14
第11図	6(203)号跡実測図	15
第12図	7(206)号跡実測図	16
第13図	グリッド出土の遺物(1)	17
第14図	グリッド出土の遺物(2)	18
第15図	8(001)号跡実測図	19
第16図	8(001)号跡出土遺物	20
第17図	9(002)号跡実測図	21
第18図	9(002)号跡出土遺物	21
第19図	10(003)号跡実測図	22
第20図	10(003)号跡出土遺物	23
第21図	11(004)号跡実測図(1)	25
第22図	11(004)号跡実測図(2)	26
第23図	11(004)号跡出土遺物	26
第24図	12(005)号跡実測図	27
第25図	12(005)号跡出土遺物	28
第26図	13(007)号跡実測図(1)	29
第27図	13(007)号跡実測図(2)	30
第28図	13(007)号跡出土遺物	31

第29図	14(008)号跡実測図(1)	32
第30図	14(008)号跡実測図(2)	33
第31図	14(008)号跡出土遺物	34
第32図	15(101)・16(102)号跡実測図	35
第33図	17(205)号跡実測図	36
第34図	主な貝の大きさ	43
第35図	遺構配置図	45

——谷津上遺跡——

第36図	Aブロック遺物分布図	49
第37図	1(008)号跡実測図(1)	52
第38図	1(008)号跡実測図(2)	53
第39図	1(008)号跡出土遺物	53
第40図	2(013)号跡実測図及び出土遺物	54
第41図	3(014)号跡実測図	55
第42図	3(014)号跡出土遺物(1)	56
第43図	3(014)号跡出土遺物(2)	57
第44図	4(011)号跡実測図	58
第45図	5(015)号跡実測図及び出土遺物	59
第46図	グリッド出土の遺物	60
第47図	6(001)号跡実測図	61
第48図	7(002)号跡実測図	62
第49図	8(003)号跡実測図	63
第50図	9(004)号跡実測図	66
第51図	10(005)号跡実測図	67
第52図	11(009)号跡実測図	68
第53図	12(006)号跡実測図	69
第54図	13(007)号跡実測図	70
第55図	13(007)号跡出土遺物	71
第56図	14(010)号跡実測図	72
第57図	14(010)号跡出土遺物	73
第58図	遺構配置図	74

——須摩堀遺跡——

第59図	Aブロック遺物分布図	77
------	------------	----

第60図	Bブロック遺物分布図	78
第61図	Cブロック遺物分布図	79
第62図	Dブロック遺物分布図	80
第63図	Eブロック遺物分布図	81
第64図	1(005)号跡実測図	90
第65図	2(001)号跡実測図	91
第66図	3(002)号跡実測図	92
第67図	4(003)号跡実測図	93
第68図	遺構配置図	94

表 目 次

— 荒屋敷北貝塚 —

第1表	貝層サンプル出土の貝類一覧	37
第2表	貝層サンプルにおける貝類出土数とその割合	38～41

— 谷津上遺跡 —

第3表	礫群構成礫一覧	50
-----	---------	----

— 須摩堀遺跡 —

第4表	礫群構成礫一覧	83～90
-----	---------	-------

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡周辺の地形(1)
図版 2 遺跡周辺の地形(2)
図版 3 遺跡遠景
—荒屋敷北貝塚—
図版 4 1 (006) 号跡・2 (204) 号跡
3 (009) 号跡
図版 5 4 (201) 号跡
4 (201) 号跡
図版 6 4 (201) 号跡 sec. a-a', sec. b-b'
5 (202) 号跡
図版 7 6 (203) 号跡
7 (206) 号跡
図版 8 8 (001) 号跡
9 (002) 号跡
図版 9 10 (003) 号跡・11 (004) 号跡
10 (003) 号跡・7 (206) 号跡・11 (004)
号跡
図版10 12 (005) 号跡
13 (007) 号跡
図版11 14 (008) 号跡
15 (101) 号跡
図版12 16 (102) 号跡
17 (205) 号跡
図版13 1 (006) 号跡出土遺物
3 (009) 号跡出土遺物
図版14 4 (201) 号跡出土遺物
5 (202) 号跡出土遺物
図版15 グリッド出土遺物
10 (003) 号跡出土遺物 2, 3
13 (007) 号跡出土遺物 4
図版16 貝層サンプル出土の貝(1)
図版17 貝層サンプル出土の貝(2)
—谷津上遺跡—
図版18 Aブロック出土状況
1 (008) 号跡
図版19 1 (008) 号跡 sec. g-g', f-f', 炉跡
2 (013) 号跡
図版20 3 (014) 号跡
3 (014) 号跡炉跡, 遺物出土状況
図版21 4 (011) 号跡
5 (015) 号跡遺物出土状況, 掘り上
がり
図版22 6 (001) 号跡
7 (002) 号跡
図版23 8 (003) 号跡
8 (003) 号跡
図版24 8 (003) 号跡
9 (004) 号跡
図版25 10 (005) 号跡
11 (009) 号跡
図版26 12 (006) 号跡
13 (007) 号跡
図版27 13 (007) 号跡出土遺物
1 (008) 号跡出土遺物
3 (014) 号跡出土遺物(1)
図版28 3 (014) 号跡出土遺物(2)
14 (010), 2 (013), 5 (015) 号跡
出土遺物
グリッド出土遺物
—須摩掘遺跡—
図版29 Aブロック出土状況
Bブロック出土状況

図版30 Cブロック出土状況

Dブロック出土状況

図版31 Eブロック出土状況

1 (005) 号跡

図版32 2 (001) 号跡

3 (002) 号跡

図版33 2 (001) 号跡・3 (002) 号跡

4 (003) 号跡

図版34 Aブロック出土遺物(1)

図版35 Aブロック出土遺物(2)

Bブロック出土遺物(1)

図版36 Bブロック出土遺物(2)

図版37 Bブロック出土遺物(3)

Cブロック出土遺物

図版38 Dブロック出土遺物

Eブロック出土遺物

序 章

1. 調査の方法と経過

以下に報告する3遺跡の立地する千葉市は県庁所在地として、また古くからの中心都市として、今なお開発が進んでいる地域である。

これに伴って埋蔵文化財の保護をはじめとして、様々な問題が起きている。交通量の増加による道路事情の悪化も、そのうちの大きな問題の一つである。

このような状況を解決するために、建設省は、国道51号線北千葉バイパスの改良工事を計画した。

この計画に基づいて、千葉県教育委員会は改良工事予定地内に含まれる、埋蔵文化財の取扱いについて、建設省をはじめ関係諸機関と協議を重ねた。その結果、発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなった。調査については、千葉県教育委員会の指導のもとに、建設省との委託契約に基づいて、当千葉県文化財センターが実施する運びとなった。対象となった3遺跡とその調査面積は以下の通りである。

荒屋敷北貝塚	3740 m ²
谷津上遺跡	3340 m ²
須摩堀遺跡	1230 m ²

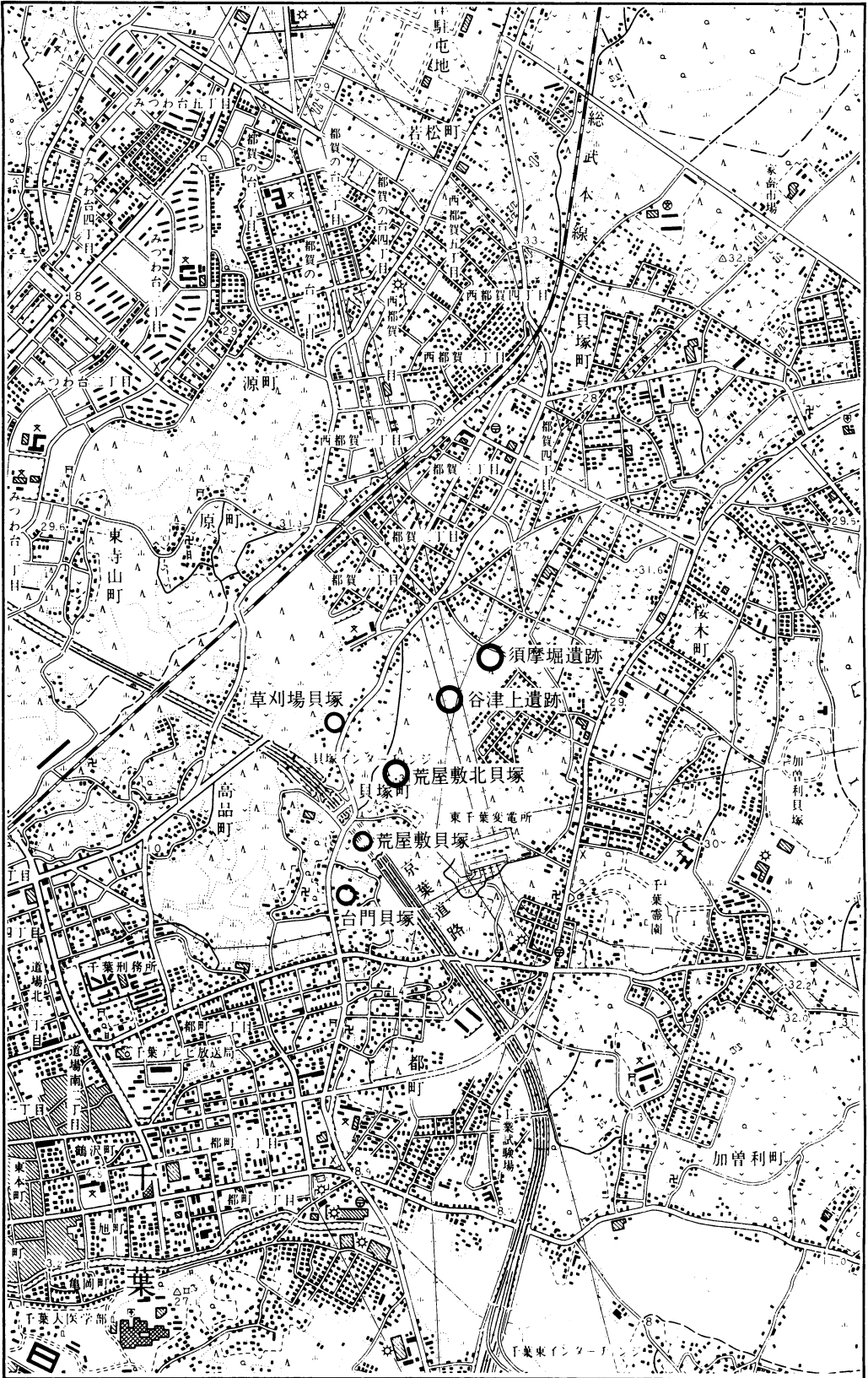
2. 立地と周辺の遺跡

三つの遺跡が所在する千葉市は一般に下総台地と呼ばれる沖積台地のほぼ中央部から、東京湾の東岸に及ぶ広い範囲を行政区画とする市である。今回、調査の行われた三つの遺跡は全て千葉市貝塚町に所在し、市の中央を流れる都川の北側に位置している。

都川は千葉市の中央を東から西へ流れており、いくつかの大きな流路に分かれている。この流れに沿って数多くの小さな谷が台地に入りこんで複雑な地形を作り出している。

荒屋敷北貝塚をはじめとする3遺跡は通常荒屋敷支谷と呼ばれる小さな谷の西側に位置している。

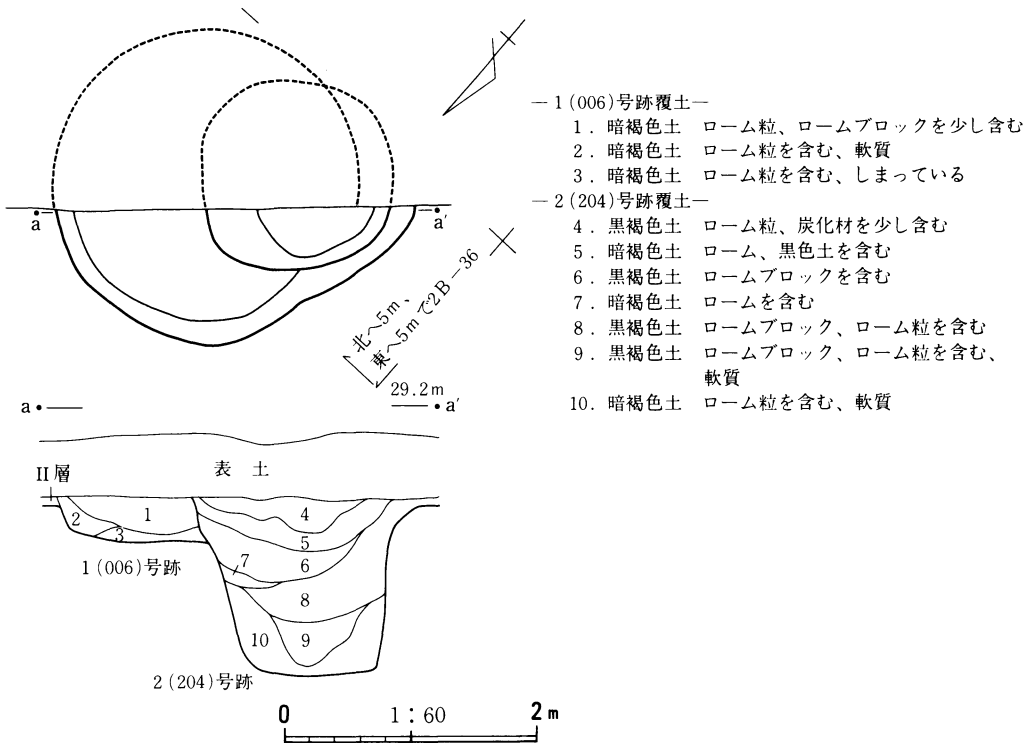
3遺跡を含む台地は、西を高品支谷、東を荒屋敷支谷によって区切られた南北約1 km、東西約0.5 kmのそれほど大きくない台地で下総台地の基部から南側へ強り出した、いわゆる舌状台地である。この台地は一般に「貝塚町貝塚群」として知られている、荒屋敷貝塚、台門貝塚、草刈場貝塚などの大形貝塚が密集する台地として有名である。



第1図 遺跡周辺の状況 (1:25,000、千葉東部)

I 章 あ ら や し き き た
荒屋敷北貝塚

1. 縄文時代



第2図 1 (006)号跡・2 (204)号跡実測図

1 (006)号跡 (第2,3図, 図版4,13)

調査区中央, 南西側2B-35グリッドで検出された。本遺構の北東から南へかけての部分は区域外へ延びており, 半分強が未掘と思われる。南西側で2 (204)号跡と重複しているが, 土層断面を観察する限り本遺構の方が古い。双方とも確認面の標高は28.5m前後である。

平面形は径が2.4mほどの円形と推定される。確認面からの掘り込みは約35cm, 床面には若干の起伏が認められる。今回, 調査した部分では柱穴等の内部施設は検出できなかった。

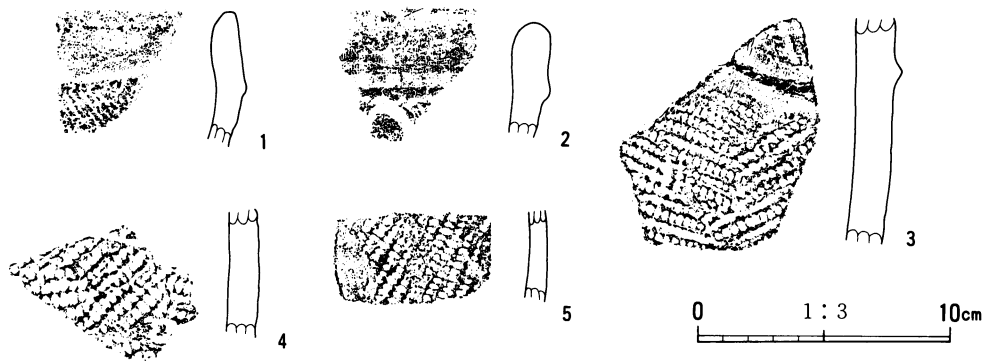
遺物は覆土中から若干出土したが, いずれも細片で器形を復元できるものはなかった。1, 2は口縁部破片で無文帯を持っている。3は微隆起帯によって無文部を区画している。加曾利EIV式に相当するものと思われる。

2 (204)号跡 (第2図, 図版4)

前述の1 (006)号跡と重複して検出された土壌である。1 (006)号跡より新しい。本遺構も $\frac{2}{3}$ 以上が区域外に延びているものと考えられる。

平面形は径が1.5m程度の円形ないしは不整形円形を推定している。確認面からの深さは1.3mほどである。覆土は, ロームを含む黒褐色土ないし, 暗褐色土である。

遺物はごく少量しか発見されず, 図示できるものはない。



第3図 1(006)号跡出土遺物

3 (009) 号跡 (第4, 5図, 図版4, 13)

縄文時代中期の竪穴住居跡である。

調査区域の北東側2B-04, 05グリッドに位置する。この付近は南から北へ下る、ごくゆるやかな斜面になっている。本住居跡の確認面は26.8~27.0 mほどである。

平面形は不整長円形とでも言った形状で、長径4.2 m、短径3.7 mほどである。床面は水平でなく、旧地表と同じ方向にゆるやかに傾斜している。炉は、住居の中心からやや東側に片寄った位置にあって、径が60~70 cmほどの不整円形で、掘りこみの深さは約40 cmと比較的しっかりしている。床面からは13本の小ピットが検出された。深さはいろいろだが、平面的にみると2本が1組となって炉を中心として放射状に広がっているものが多い。北西側から発見された2本のピット(挿図中の網部分)は貼り床が施されていた。周溝は検出されなかった。

遺物1は胴部下半から底部を欠く小形の深鉢で、炉の南東の床面から発見された。最大径は19.2 cmほどで、口縁はゆるやかな波状(4単位)となっている。口縁部に1~1.5 cmの無文帯を作り、円形の刺突文を施文している。口縁から胴部にかけては斜縄文を地文として棒状工具による沈線で区画を作り区画内をすり消している。成・整形や施文は全体にルーズな印象を受ける。3, 4は櫛歯状工具による細い平行沈線文を持つ。5, 6は微隆起帯によって地文の縄文とすり消しによる無文帯が区画されている。本住居跡の時期は1, 2, 5, 6から加曾利E IV式期に相当すると考えられる。

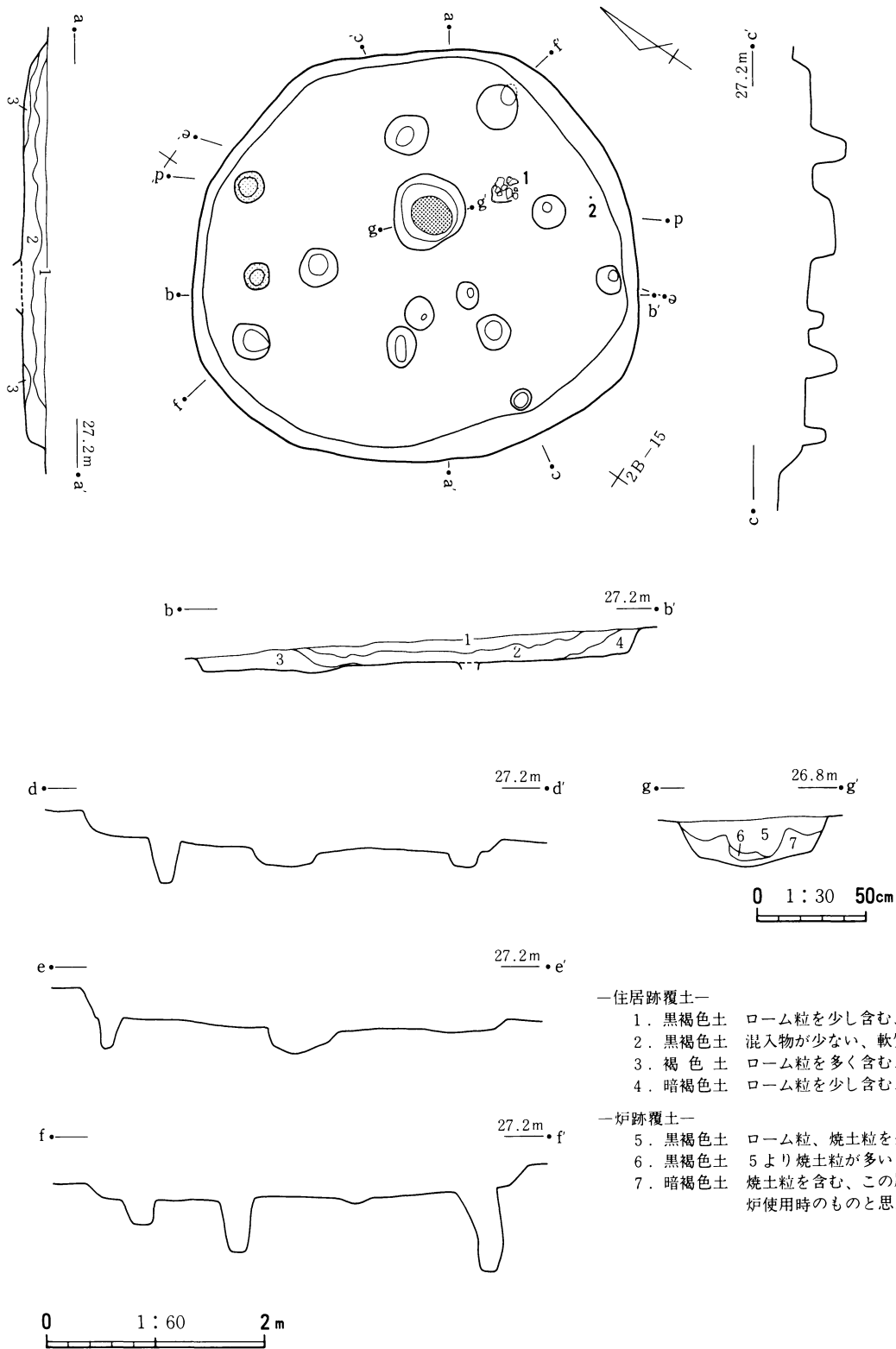
4 (201) 号跡 (第6, 7, 8図, 図版5, 6, 14, 16, 17)

調査区域の北側2B-05グリッドで検出された。東側およそ3 mの距離には3(009)号跡がある。確認面の標高は26.8~26.9 mで北側が低くなっている。

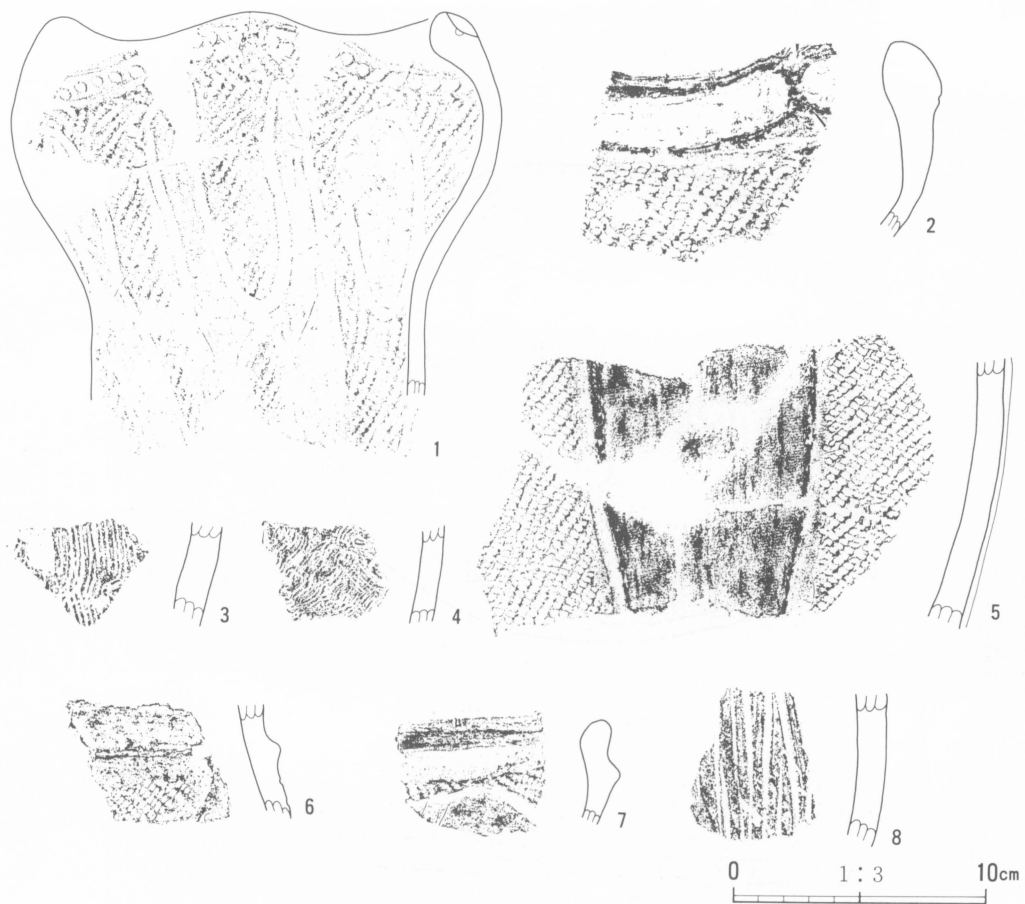
平面形は径が1.9~2.1 mの不整円形である。遺構確認面ですでに貝層が露出している。遺構の南側は攪乱を受けているが、本来はこの部分にも貝が存在していた可能性が強い。確認面からの掘りこみは深さ1 m前後である。底面はほぼ平坦だが北側が若干低くなっている。

覆土は以下のとおりである。

1. 純貝層 イボキサゴ, ウミニナ, イボウミニナ, アラムシロを主体とする。

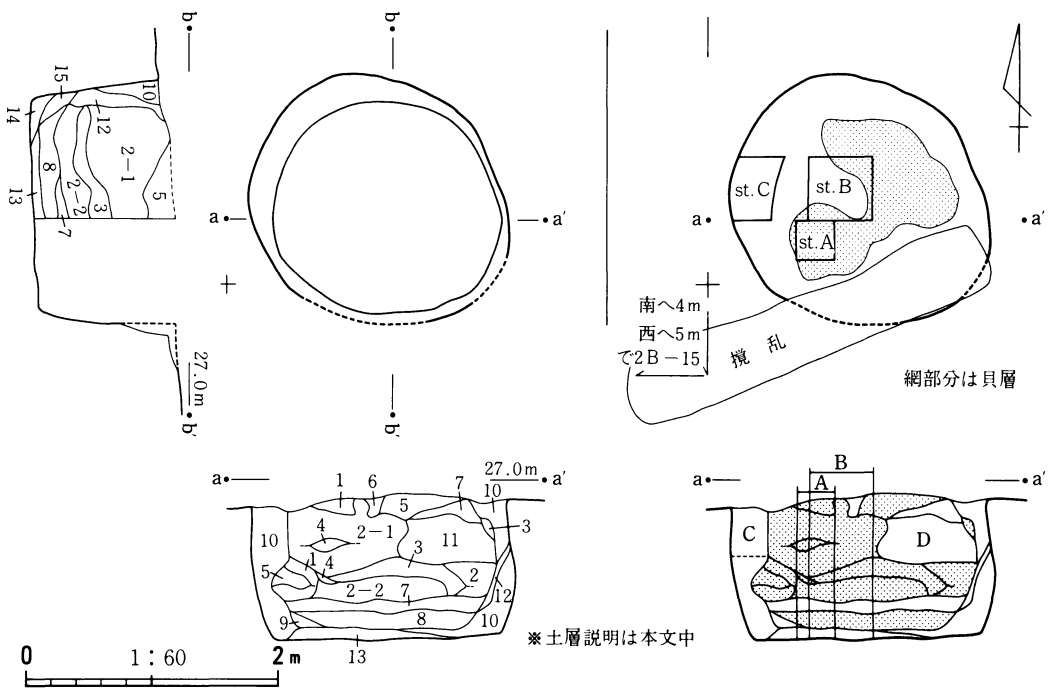


第4図 3(009)号跡実測図



第5図 3(009)号跡出土遺物

- 2-1, 2-2. 純貝層 アサリ, ハマグリを主体とする。
3. 純貝層 破碎したイボキサゴを主体とする
4. 純貝層 マガキを主体とする
5. 純貝層 イボキサゴ, ウミナ, アサリ, ハマグリ, アカニシを主体とする
6. 黒褐色土 5と同様の貝を含む混貝土層
7. 黒褐色土 アサリ, ハマグリ等を含む混貝土層
8. 純貝層 イボキサゴ, ウミナ, アラムシロを主体とし, アサリ, ハマグリも含む
9. 黒褐色土 貝片を含む
10. 黒褐色土 若干の黄褐色土を含む, st.Cを採取
11. 黒褐色土 若干のロームブロックを含む, 軟質, 人為堆積, st.Dを採取
12. 黒褐色土 軟質
13. 黒褐色土 破碎したイボキサゴを含む混貝土層
14. 黄褐色土 崩壊したローム層
15. 黒褐色土 若干のロームを含む



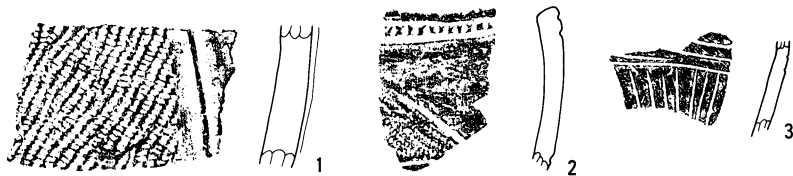
第6図 4(201)号跡実測図

以上のように覆土は、貝層と貝を含まない黒褐色土に大別することができる。これを図示したのが右側の断面図である。これを見ると、底面に接して平均10cmほどの貝を含まない層があること、さらに最下層の貝層の上に5~10cmの間層があること、側面にも貝を含まない層があることなどが良くわかる。

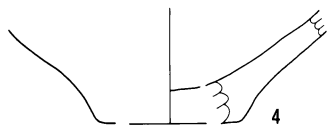
遺物は、覆土の上層から下層まで平均して出土し、特定の層に集中する傾向は認められなかった。ここでは、土器の出土層位を尊重して層位ごとに図示した。

1~3は表採で土壌に伴わない可能性が高い、特に2, 3は縄文後期の土器である。4は底部近くの破片、よく磨かれている、外面に赤色塗彩の痕跡が認められる。5, 6は口縁部の破片、沈線で区画し、無文帯を作る。7は無文の土器で隆起線で文様を表出している。同様の手法を持つものに12がある。8は沈線によって縄文部分と無文部を区画する胴部破片で、17, 23, 24が同じ手法を持つ。9, 13, 16は櫛歯状の工具で細い沈線を文様としている。11は大形破片、上半は微隆起線文によって区画を作り無文部を表出している、下半は沈線による区画で方向の違う縄文を施文している。同様の文様と思われるものに19, 20, 22などがある。14, 25は微隆起線文によって無文帯を作るもの。このような遺物の状況をみる限りでは貝層の堆積に、そう長い時間がかかったとは思われない。

土表採
壤周边



2-1
層



上層



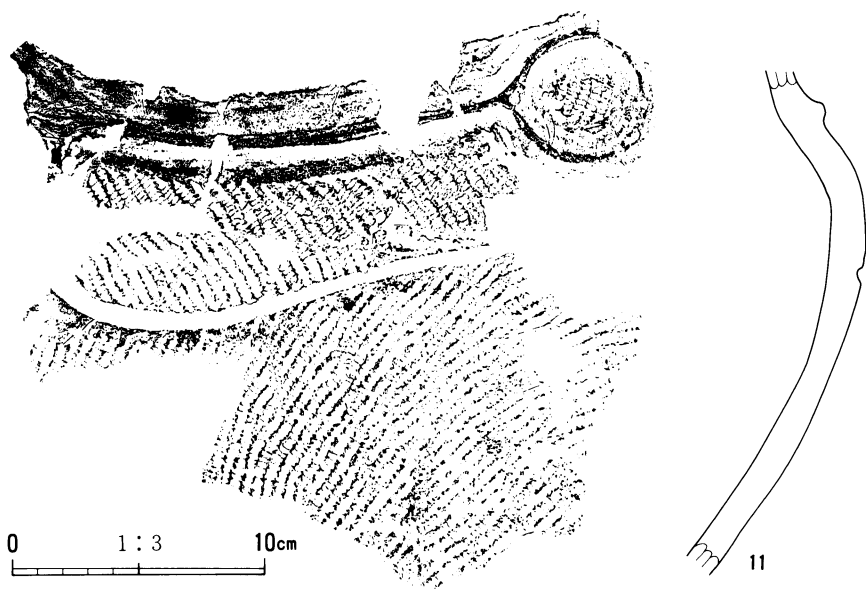
2-2
層



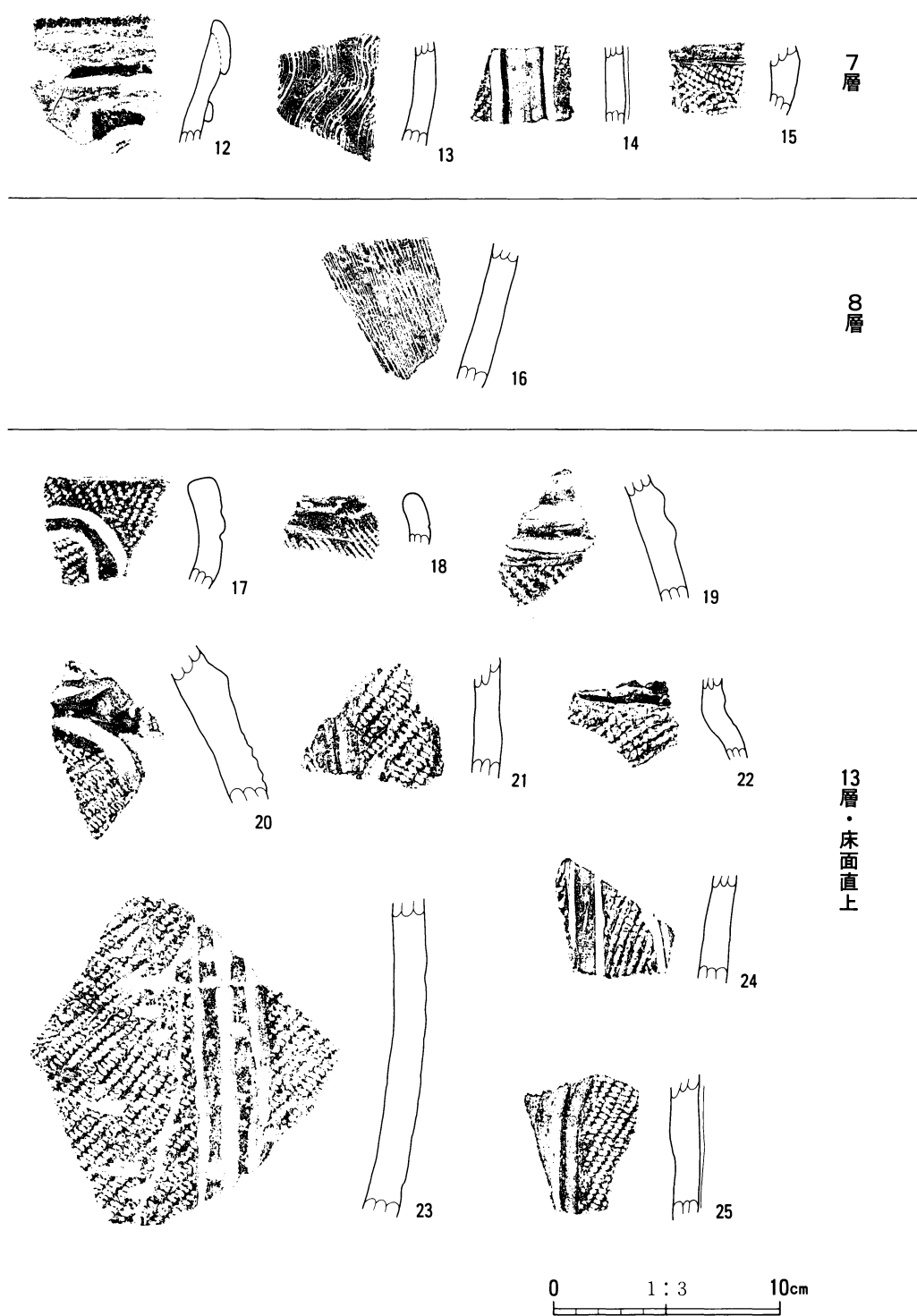
中層



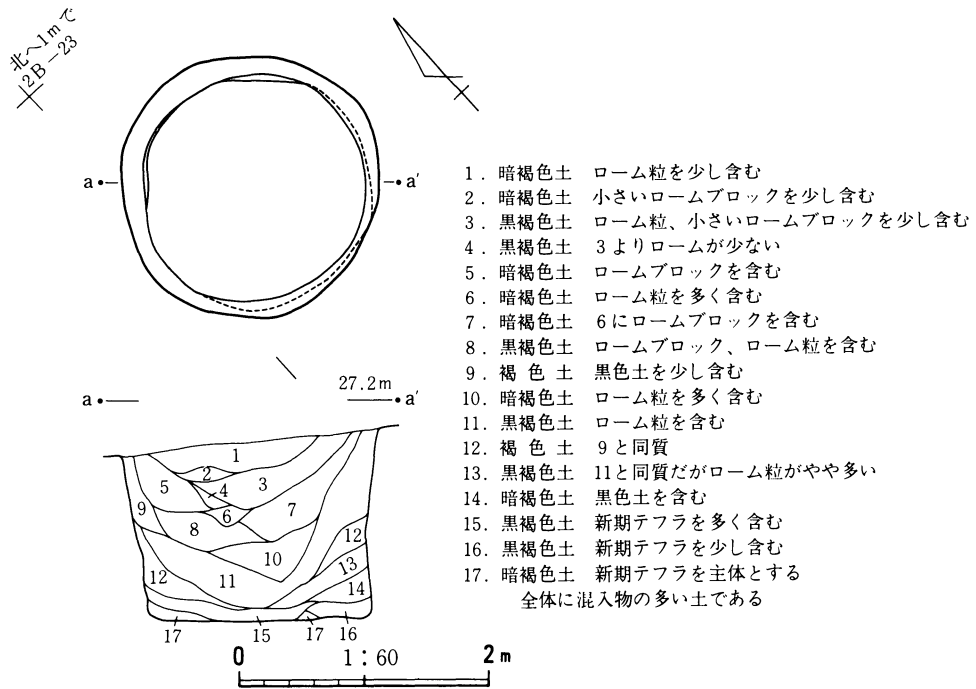
7
層



第7图 4(201)号迹出土遗物1)



第8図 4(201)号跡出土遺物(2)



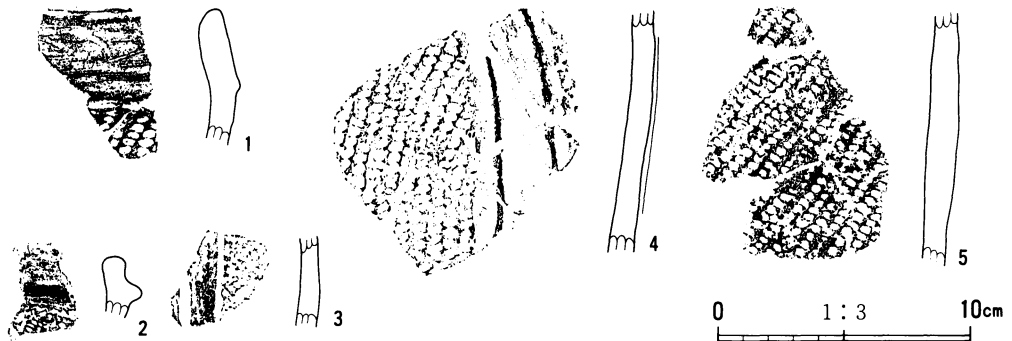
第9図 5 (202)号跡実測図

5 (202) 号跡 (第9,10図, 図版6,14)

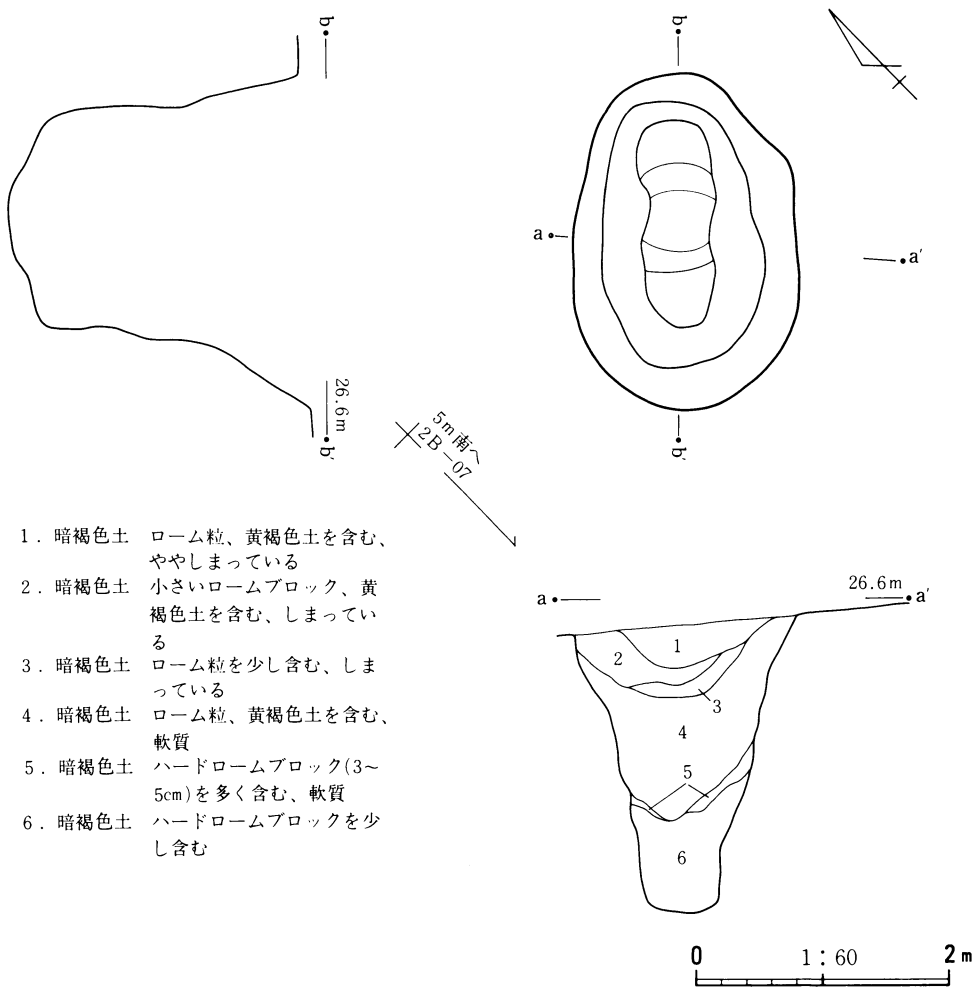
調査区の中央北西, 2B-23グリッドから検出された。遺構確認面の標高は26.8~27.0 mで台地の縁に近く, 北西に向かって, ゆるやかに傾斜している。

平面形は径2.0~2.2 mほどの円形をしている。確認面からの掘り込みは, 深さ1.3~1.5 m, 底面から50 cmほど上の部分で, ゆるやかな段が付いて壁面の立ち上がり方が変わる。断面形は南側がわずかに袋状になっている。底面はほぼ水平に整えられている。

遺物は何れも細片で, 図示したものが, ほとんど全てである。1は口縁部に3 cmほどの無文帯を持ち, それ以下は縄文が施文される。区画は微隆起によって行われる。2も同様だが隆帯が強く表出されている。3は沈線によって, 4は微隆起によって, 無文部分と地文(縄文)部分を区画している。加曽利EIV式に相当するものと思われる。



第10図 5 (202)号跡出土遺物



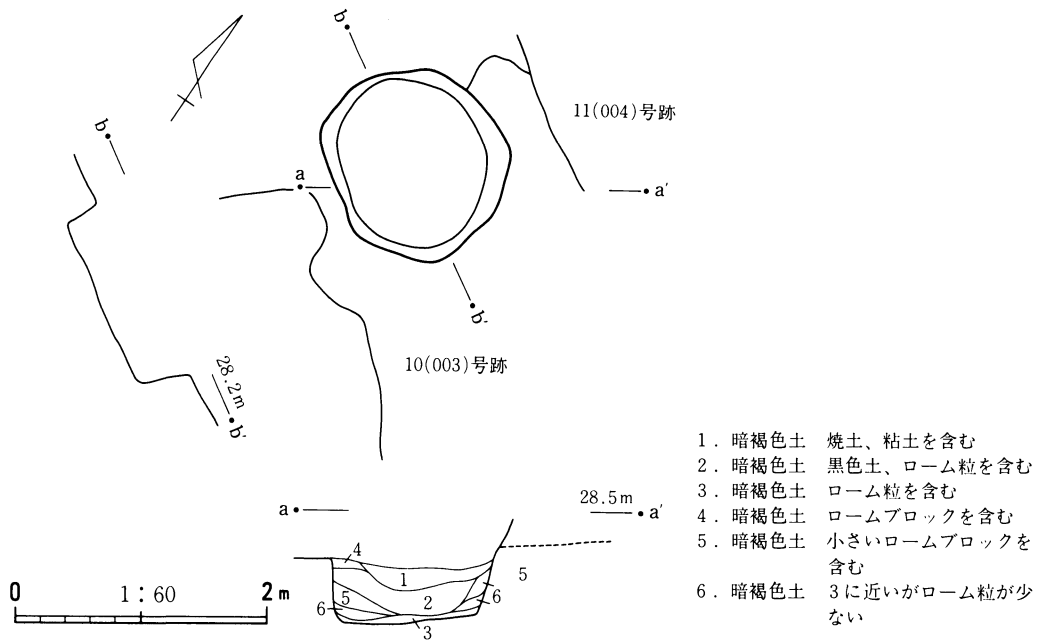
第11図 6 (203)号跡実測図

6 (203) 号跡 (第11図, 図版7)

調査区北東隅の1B-97グリッドから検出された。確認面の標高は26.3~26.5 mで北西側に向かってゆるやかに傾斜している。

平面形は長軸が2.6 m, 短軸が1.8 m ほどの長円形で長軸は北-45°-東を示し, 等高線とほぼ平行である。確認面からの掘り込みは2.2 m と深い。断面形は中段を持ち, それ以下では立ち上がりの角度が大きくなる。底面の中央にはさらに浅い掘りこみが認められる。覆土はロームを多く含む暗褐色土である。

時期・性格等を決定できる遺物は全く発見することができなかったが, 形状等から縄文時代の「落とし穴」状遺構である可能性が高い。



第12図 7(206)号跡実測図

7(206)号跡(第12図, 図版7, 9)

10(003)号跡の床下から発見された。10(003)号跡よりも古い。上半部分は10(003)号跡によって削平されており、底面から40cmほどが調査されたにすぎない。

現在残されている部分の平面形は、径が1.3~1.5mほどの不整形円形である。

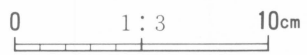
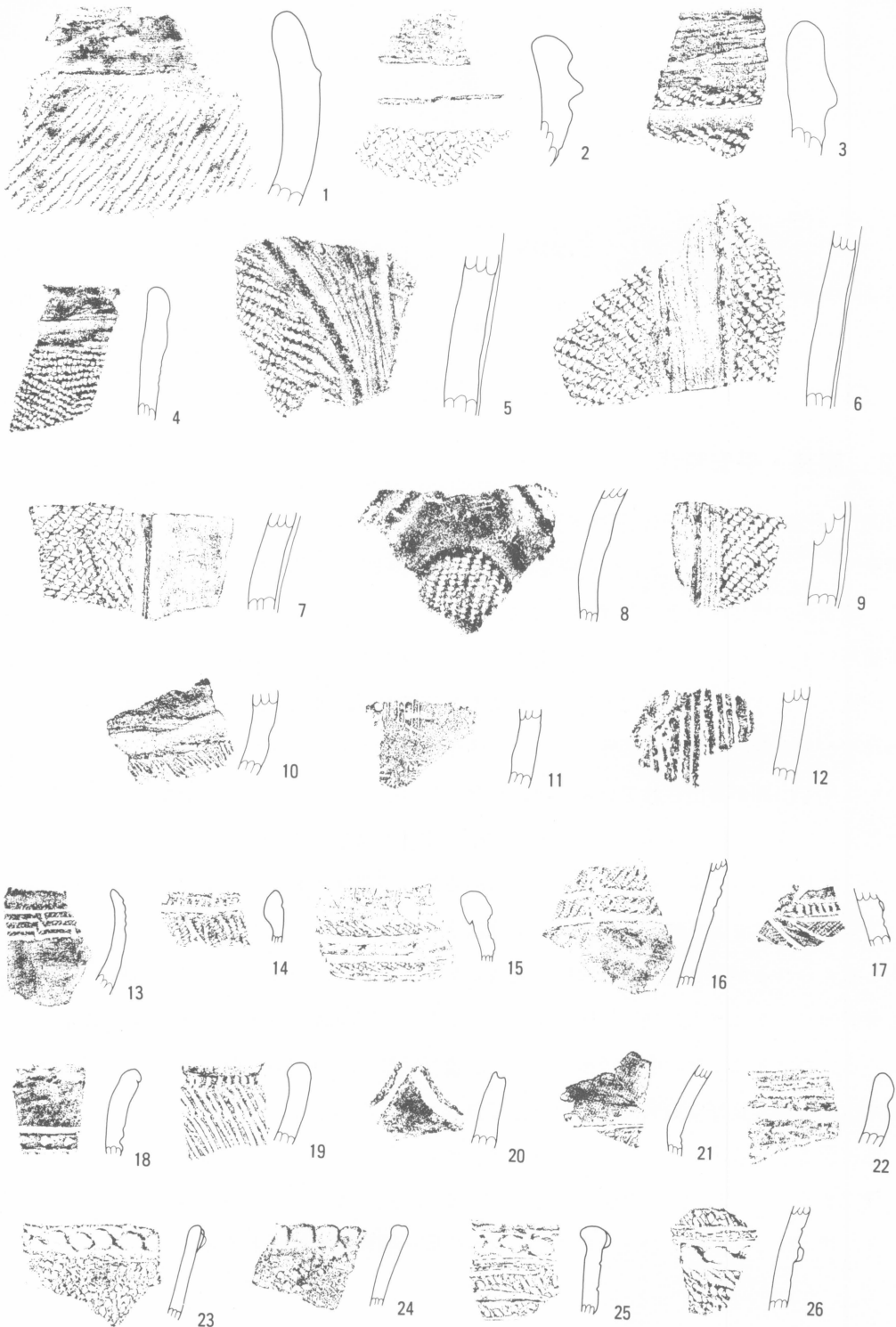
遺物は、縄文土器の細片が少量発見されたが、図示できるものではなく時期、性格は明確にできない。しかし形状等から考えて、おそらく縄文時代の土壌であろう。

グリッド出土の遺物(第13, 14図, 図版15)

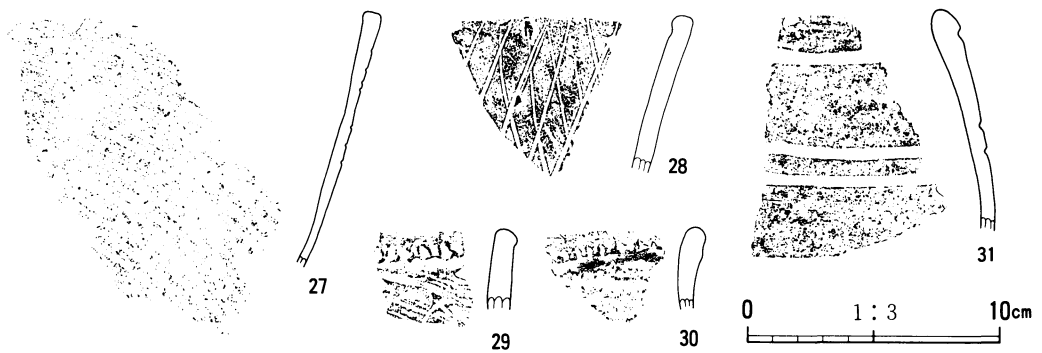
遺構以外から出土した土器、攪乱等によって原位置を保っていないと考えられる土器を一括して扱う。グリッドごとの出土量について大きな差は認められないが、西端のグリッド(2A-50~80)は量的に少ない。

縄文時代中期の土器(1~12) 1~4は口縁部破片、隆線もしくは微隆起線によって口縁部に無文帯を作る。5~9は胴部破片、微隆起線によって文様を区画し、磨り消した無文帯を作っている。10, 11は地文を持たず、櫛歯状工具による細い平行沈線文を施文している。12は粘土ひものような隆線を貼り付けて文様を表出、地文は細い沈線文。

縄文時代後期の土器(13~31) 13~22は精製土器、基本的にははいねいに磨かれた器面と比較的細い沈線によって文様が構成されている。細かい縄文を持つもの(13~17)と持たないもの(18~21)がある。23~31は、いわゆる粗製土器である。23, 24は荒い縄文を地文として口唇部に指頭圧痕をめぐらしている。25, 26はこれに沈線を加えている。27, 28は地文を持たず荒い斜めの沈線文のみで構成される。31は太い沈線が横位に施されている。



第13図 グリッド出土の遺物1)



第14図 グリッド出土の遺物2)

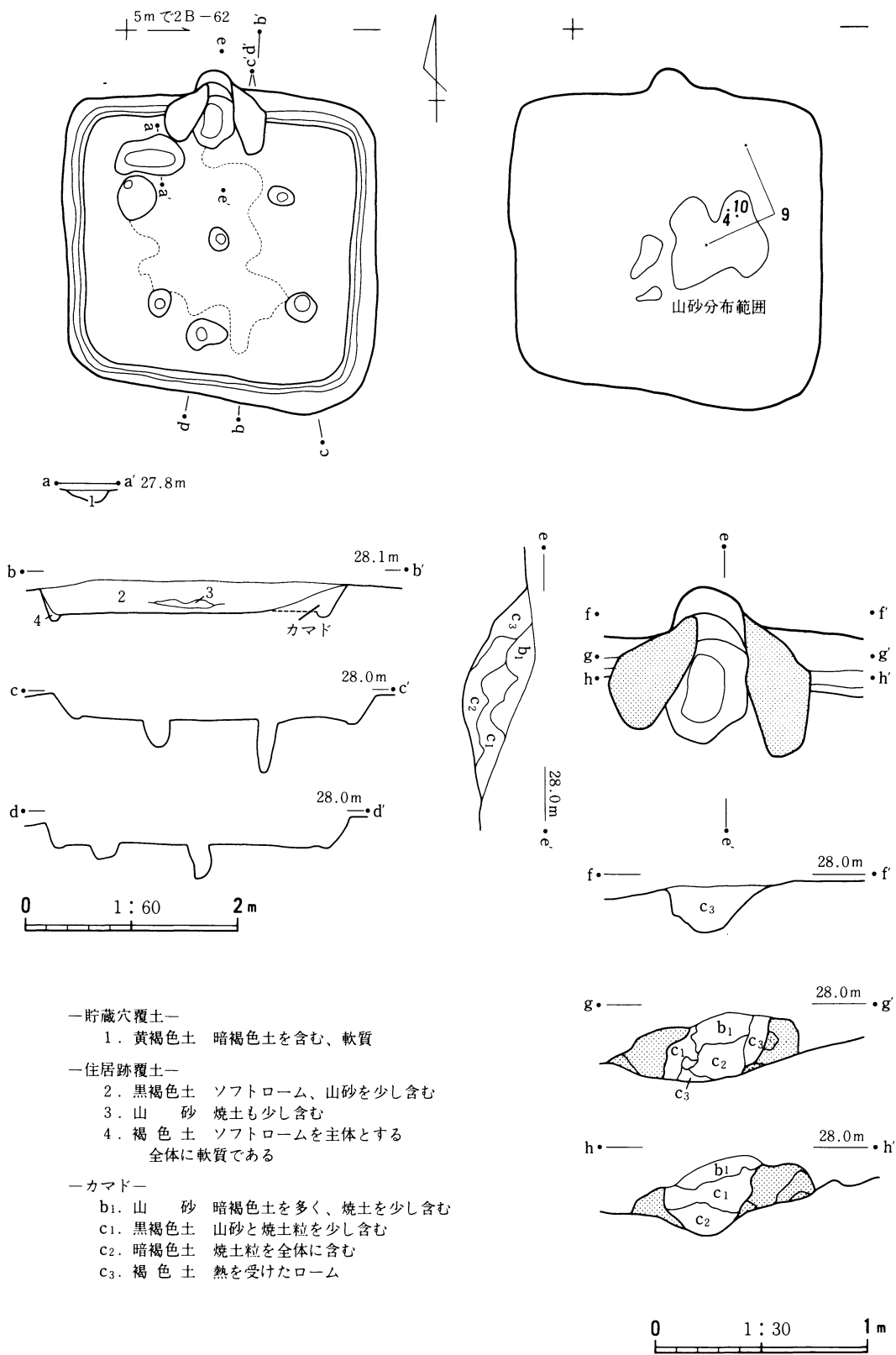
2. 奈良・平安時代

8 (001) 号跡 (第15, 16図, 図版8)

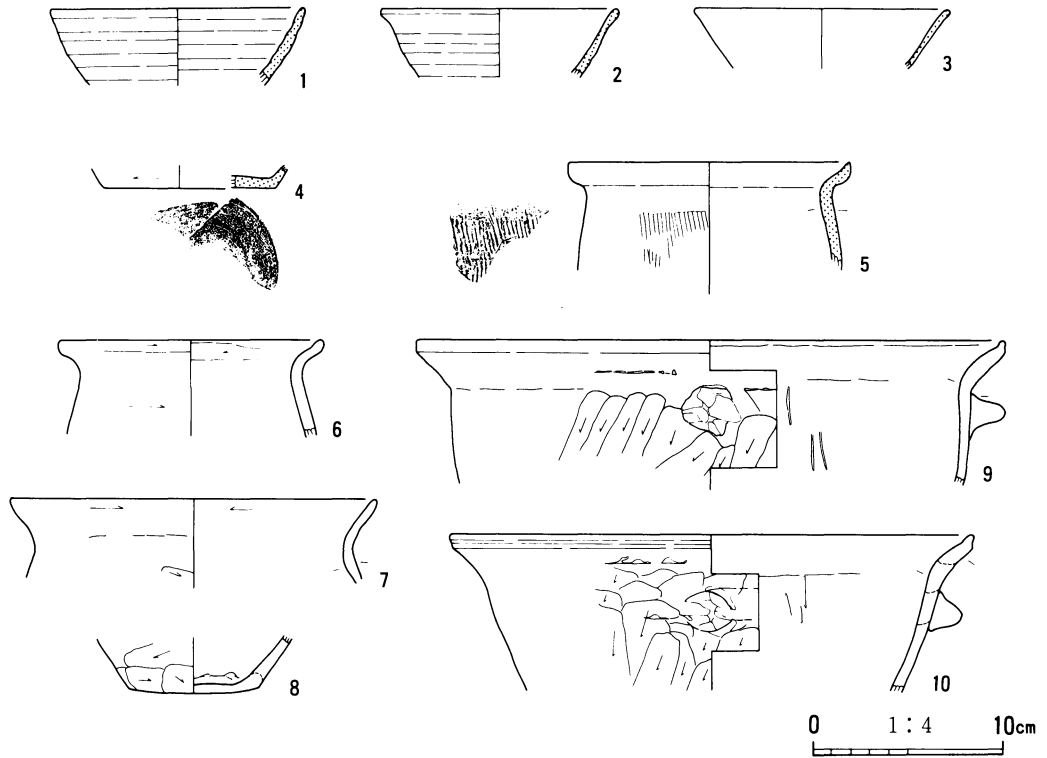
調査区南西の2B-61グリッドから発見された。本住居跡の東側、約5 mには9 (002) 号跡がある。確認面の標高はおよそ28.0 mである。

平面形は1辺の長さが2.7~3.0 m, 南東側の隅がやや突出した方形である。主軸方向は北-1°-東 前後と考えられる。覆土は黒褐色土を基本としており、堆積状況からみて細分が可能だと思われるが調査時の観察では困難であった。住居跡の中央部分から東側にかけて床面からやや浮いた状態で山砂が検出されている。焼土を含んでいることからカマドの構築材に関するものと考えられるが、本住居跡のカマドとの間には間層をはさむこと、分布範囲が柱穴に及ばないこと、などからみて別の遺構に由来する山砂である可能性もある。床面は、ほぼ水平に調整されている。カマドと支柱穴で囲まれる部分はその外側に比べて固くしまっている。支柱穴は4本と考えられるが深さは一定しない。北西にあるピットは、かなり浅いが、貯蔵穴であろう。最も南側のピットは出入口施設に関するものであろう。周構は幅15~25 cm, 深さ5 cmで全周している。カマドは北壁の中央で検出された、遺存状態は普通であった。

遺物は少なく、良好な資料ではない。全て復元実測である。1, 4, 9, 10は山砂下より出土、他は覆土中から出土している。1~4は須恵器の坏、4の底部は回転ヘラケズリ。5は小形の甕であろう、いわゆる土師質須恵器。7, 8は砂粒の多い胎土で赤っぽい色の薄い作りの甕。9, 10はほとんど同じ技法で作られており、同一個体の可能性もある。



第15図 8(001)号跡実測図



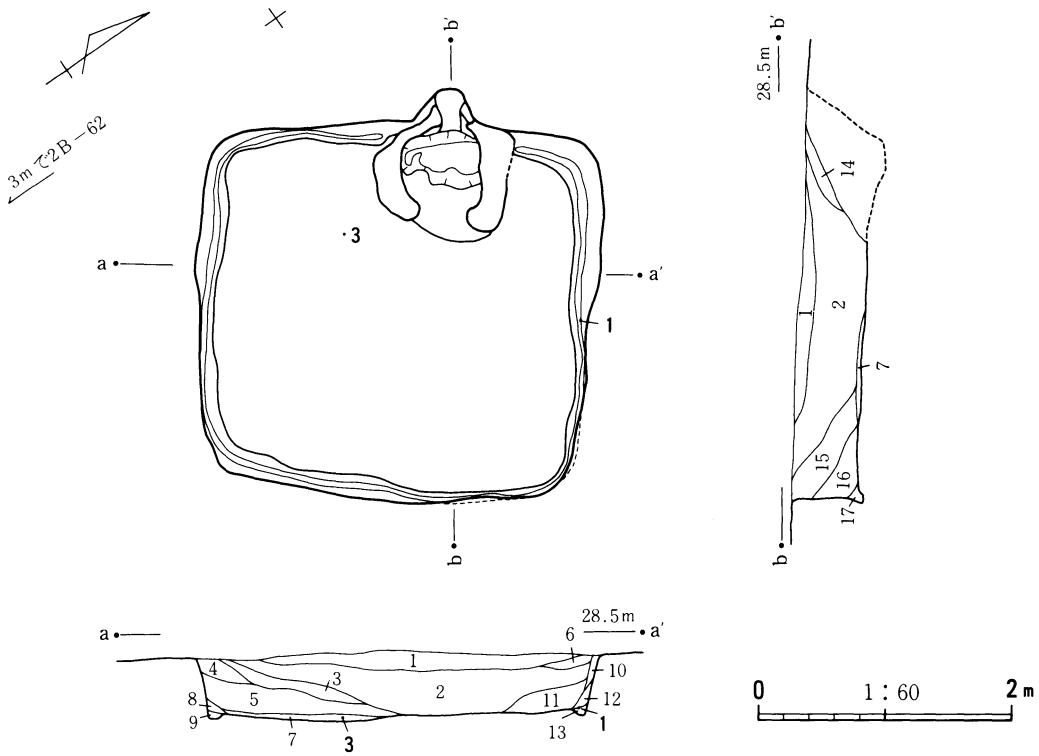
第16図 8 (001)号跡出土遺物

9 (002) 号跡 (第17, 18図, 図版8)

調査区の南西側2B-52グリットで発見された。西側には8 (001) 号住居跡がある。遺構確認面の標高は28.3~28.4 m ほどである。

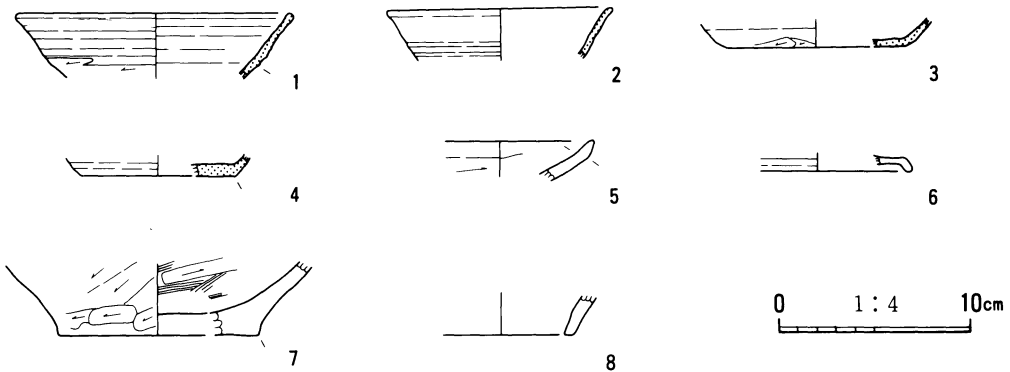
平面形は1辺が2.7~3.2 m のくずれた方形をしている。主軸方向はおよそ北-53°-西と推定される。覆土はロームを含む黒褐色土, 暗褐色土を基本としている。柱穴, その他のピットは1本も検出することができなかった。床面は場所によって若干の高低差がある。周溝は幅10~25 cm, 深さ5 cmほどで, カマド部分を除いて全周している。かなり雑な作りで幅は部分的に大きな差がある。また東隅の付近では壁面より外側に出ている。カマドは北西壁の中央やや北寄りから発見されたが遺存状態は悪かった。全体にルーズな印象を受ける住居跡である。

遺物は全て細片で, 明確な時期決定の根拠を欠いている。1~4は須恵器の坏, 1は体部下端に回転ヘラケズリ, 4を除いて焼成は良好である。5は土師器の坏, 口唇部はヨコナデ, 体部内外面には, 軽いミガキが施される。6は土師器のふた。7は大きな甕で, 時期的に伴わない可能性がある。8は土師器の甑。

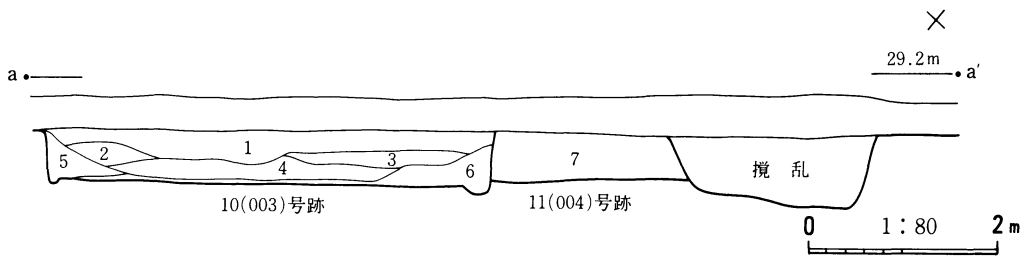
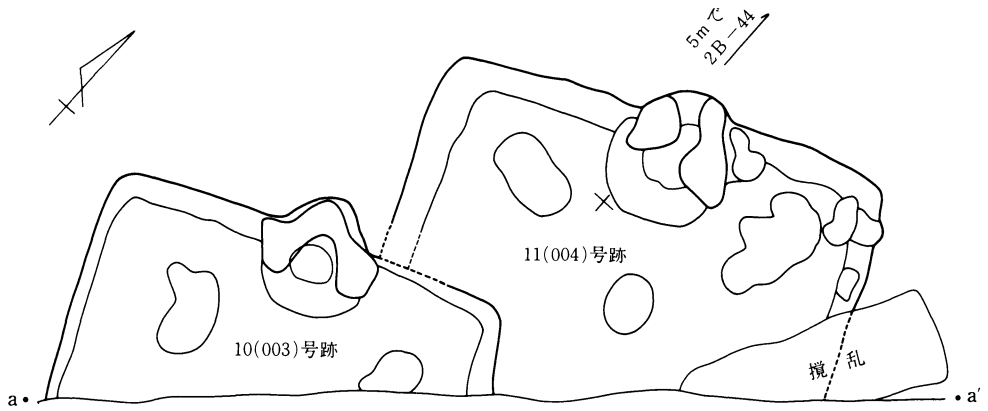


- | | | | |
|---------|-----------------------------|----------|-----------------------|
| 1. 暗褐色土 | ローム粒、ローム小ブロックを含む | 10. 暗褐色土 | よくしまっている |
| 2. 黒褐色土 | 若干のローム粒、ロームブロック、暗褐色土を含む | 11. 暗褐色土 | ローム粒、ロームブロックを含む |
| 3. 暗褐色土 | 若干のローム粒、ロームブロック、黄褐色土を含む | 12. 暗褐色土 | ローム粒を含む |
| 4. 暗褐色土 | ローム粒、黒褐色土混じる、ややしまっている | 13. 暗褐色土 | ローム大ブロックを含む |
| 5. 暗褐色土 | 若干のローム粒、ロームブロック、黒褐色土、焼土粒を含む | 14. 黒褐色土 | ローム粒を含む |
| 6. 暗褐色土 | ローム粒、ロームブロック、黒褐色土を含む | 15. 黒褐色土 | ローム粒、ローム小ブロック、黄褐色土を含む |
| 7. 黄褐色土 | 暗褐色土を含む、硬質 | 16. 黒褐色土 | 暗褐色土を含む |
| 8. 暗褐色土 | 軟質 | 17. 黒褐色土 | 若干のローム粒を含む |
| 9. 暗褐色土 | ローム粒、黄褐色土を含む | | |

第17図 9(002)号跡実測図



第18図 9(002)号跡出土遺物

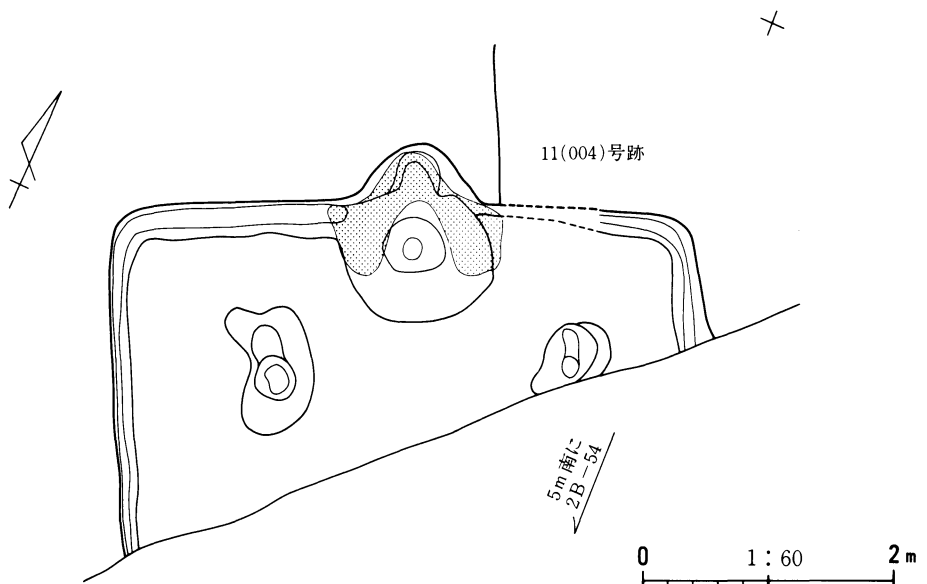


—10(003)号跡覆土

1. 黒褐色土 ロームブロック、ローム粒、焼土粒、暗褐色土を少し含む、軟質
2. 黒褐色土 ロームブロック、ローム粒、暗褐色土を少し含む、軟質
3. 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土を含む
4. 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土を含む、軟質
5. 黒褐色土 ローム粒、黒色土を含む、軟質
6. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック、黒褐色土を少し含む、しまっている

—11(004)号跡覆土

7. 黒褐色土と暗褐色土の混在層
ローム粒、焼土粒、炭化物粒を含む、しまっている。短期間に埋まったものと思われ層序の変化は見られない

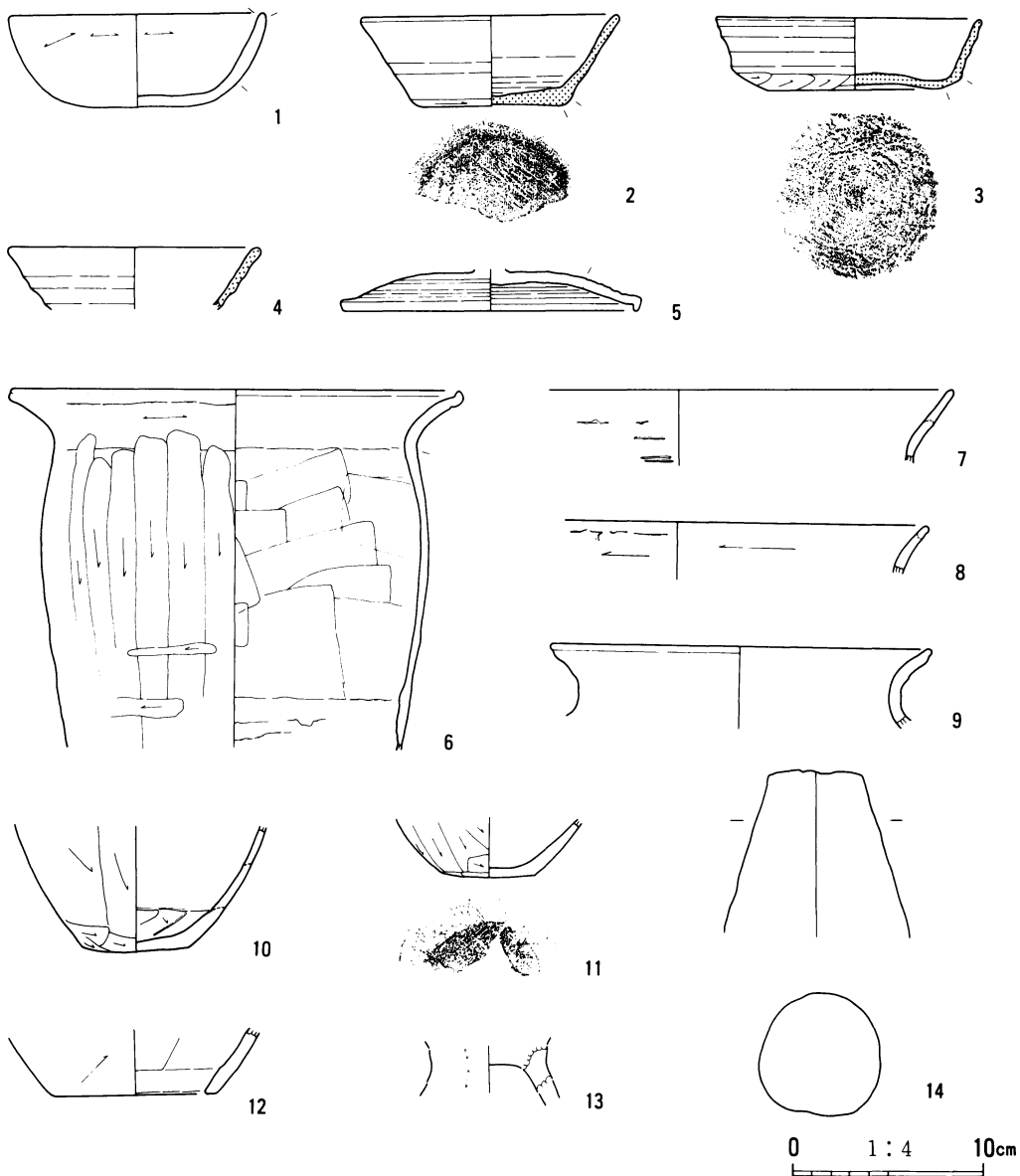


第19図 10(003)号跡実測図

10 (003) 号跡 (第19, 20図, 図版 9, 15)

調査区域の中央南西側, 2B-43グリッドを中心として検出された。住居跡の南側は区域外に延びており, 今回は北側の $\frac{1}{3}$ 程度が発掘されたにとどまった。また住居の東側で, 7 (206) 号跡, 11 (004) 号跡の2遺構と重複している。これらの遺構の中では, 遺物や土層断面の観察から本遺構が他の2遺構よりも新しいことがわかる。

平面形は1辺の長さが4.7~4.8 mほどの方形と思われる。推定主軸方向は, 北-25°-西を示す。覆土は全体に軟質で, 黒褐色土が主体を占めている。確認された床面はほぼ水平に整えられている。柱穴は2本検出され, いずれも深さは50~60 cmである。周溝は全周しているものと



第20図 10(003)号跡出土遺物

思われる。

遺物は、本遺跡の中では比較的豊富である。1は土師器の坏，口径13.6 cm，器高4.8 cm，底径4.7 cm（いずれも推定），内面はナデかミガキ，外面はおそらく横方向のヘラケズリ，全体に磨めつが激しく，成・整形技法は不明の部分が多い。2～4は須恵器の坏。2は推定口径13.8 cm，器高4.7 cm，推定底径7.4 cm，内外面とも濃い灰色で，胎土には長石を多く含む，焼成は普通，体部下端は回転ヘラケズリ，底部は手持ちヘラケズリ。3は口径14.0 cm，器高3.7 cm，底径8.7 cm，基本的に灰白色で胎土には砂粒を多く含む，焼成は不良，軟質である，磨めつで不明の部分が多いが，おそらく体部下端は手持ちヘラケズリ，底部は回転ヘラケズリと思われる。5は須恵器のふた，推定口径16.0 cm，上面は回転ヘラケズリ。6～11は土師器の甕，このうち9を除く5点は器厚の薄い作り。12は甑。13はおそらく高杯の接合部。14は支脚。

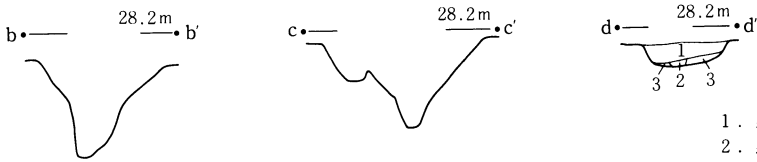
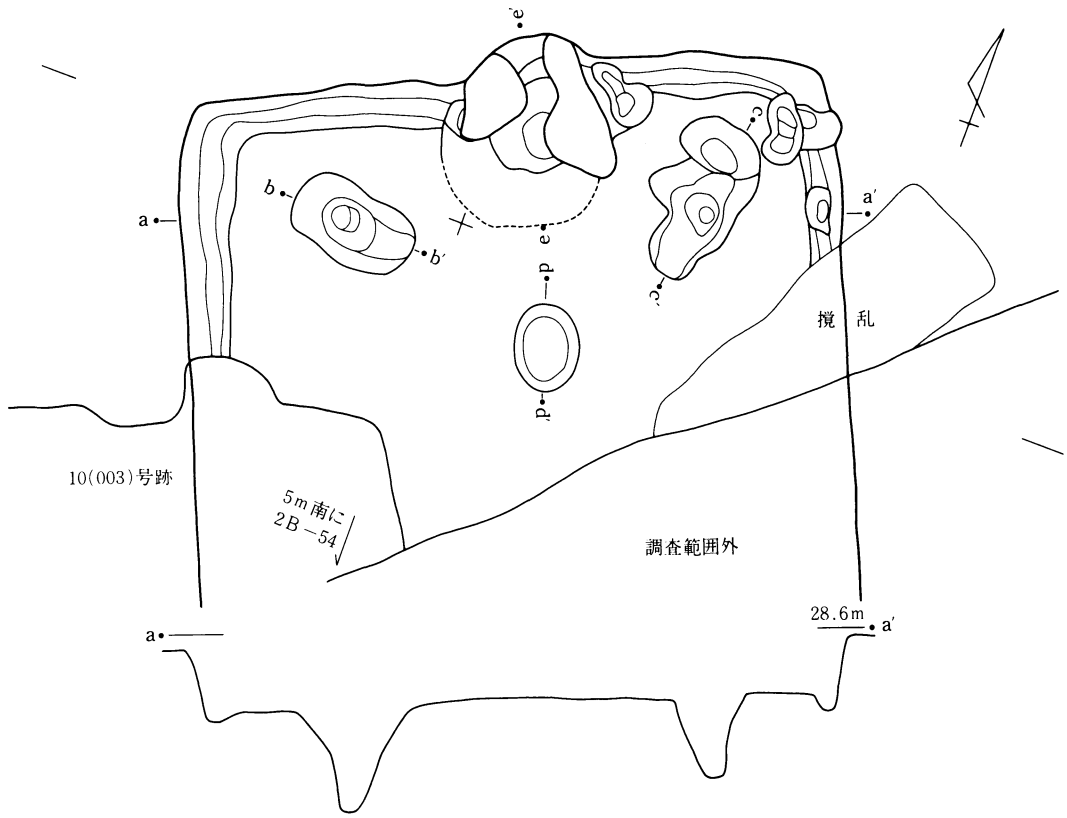
11 (004) 号跡（第19，21，22，23図，図版9）

調査区の中央南西側，2B-43，44グリッドで検出された。西側は7（206）号跡，10（003）号跡と重複しているが，本住居跡は7（206）号跡よりは新しく，10（003）号跡よりは古い。また東側3 mほどの距離には，12（005）号跡がある。住居跡の南側は調査区域外に延びていて，全体の半分ほどを発掘したことになる。遺構確認面の標高は28.5 m強である。

平面形は1辺の長さが5.2 mほどの方形と推定される。また主軸方向は北-23°-西前後と思われる。覆土は単一層で短期間に埋まったものと考えられる。支柱穴と思われるピットは2本検出された。双方ともに柱の抜き取りを思わせる掘りこみを示している。床面はほぼ水平に整えられている。周溝は幅20～40 cm，深さ5～10 cmで全周しているものと考えられる。カマドは北壁の中央やや東寄りで見えられた。袖部の外側にカマドに伴うと思われる小ピットが2本検出されている。

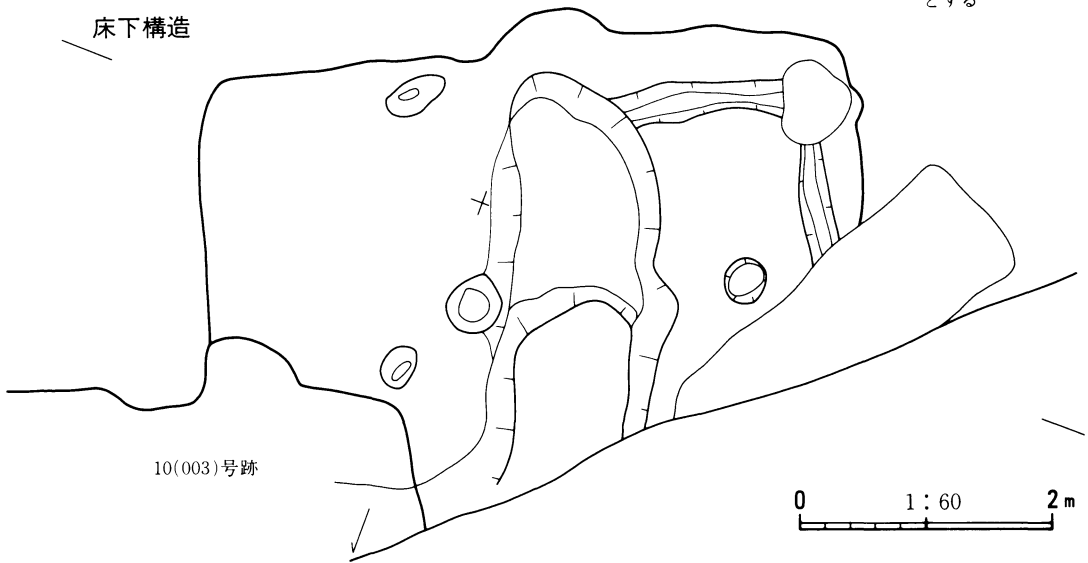
床下からは小ピットが4本，東側を半周する周溝が発見された。これらの小ピット，周溝や支柱穴の形状などから，拡張もしくは建て替えが行われた可能性があると思われる。

遺物は小破片が多く，全て復元実測によっている。1は土師器の坏，内面はミガキ，外面はヘラケズリ後，荒いミガキを施す。2～4は須恵器の坏，2は高台付の坏，底面は回転ヘラケズリ，3は推定口径13.6 cm，器高3.4 cm，推定底径6.7 cm，胎土には雲母・長石をはじめ，かなり大きな砂粒をたいへん多く含んでいる。色は明るい灰色，焼成は普通，全体に磨めつが著しく，口唇の形も原形かどうか不明。体部下端ヘラケズリ，底面は手持ちヘラケズリ。5は須恵器，坏でない可能性もある。細い砂粒を含む胎土，色調は灰色，焼成は良好で硬質。6は土師器，高坏か台付甕の脚の接合部であろう。内面はミガキ，外面は上半が横方向のナデ，下半がヘラケズリ。7，8は土師器，小形の甕か？双方とも遺存状態が悪い。8は推定口径12.4 cm，体部最大径15.0 cm，9～11は土師器の甕（9，10は甑の可能性もある）。

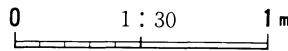
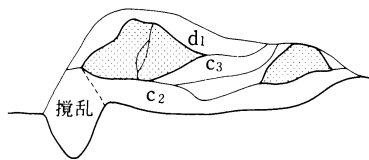
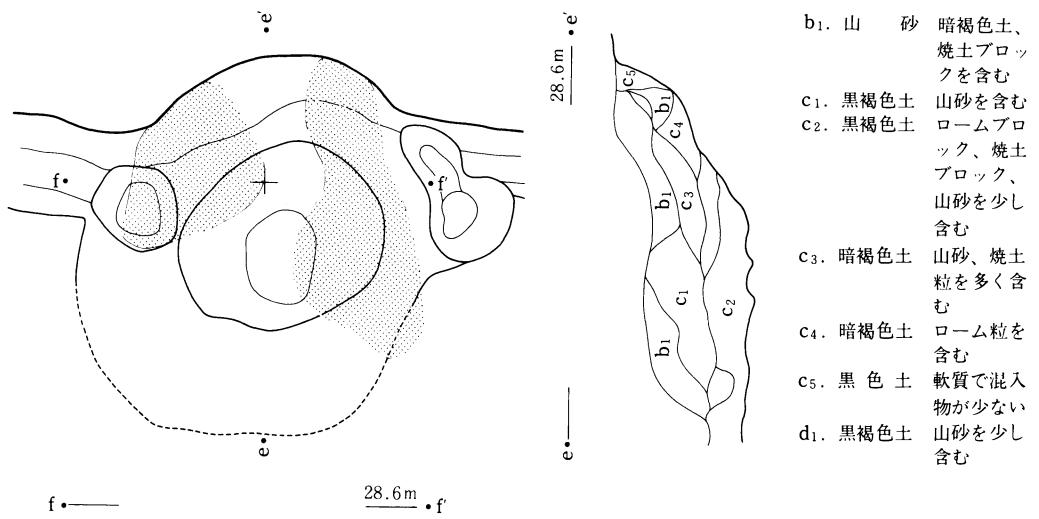


- 1. 黒褐色土 ローム粒、焼土を含む
- 2. 黒褐色土 1よりも多くのローム粒を含む
- 3. 褐色土 ロームブロックを主体とする

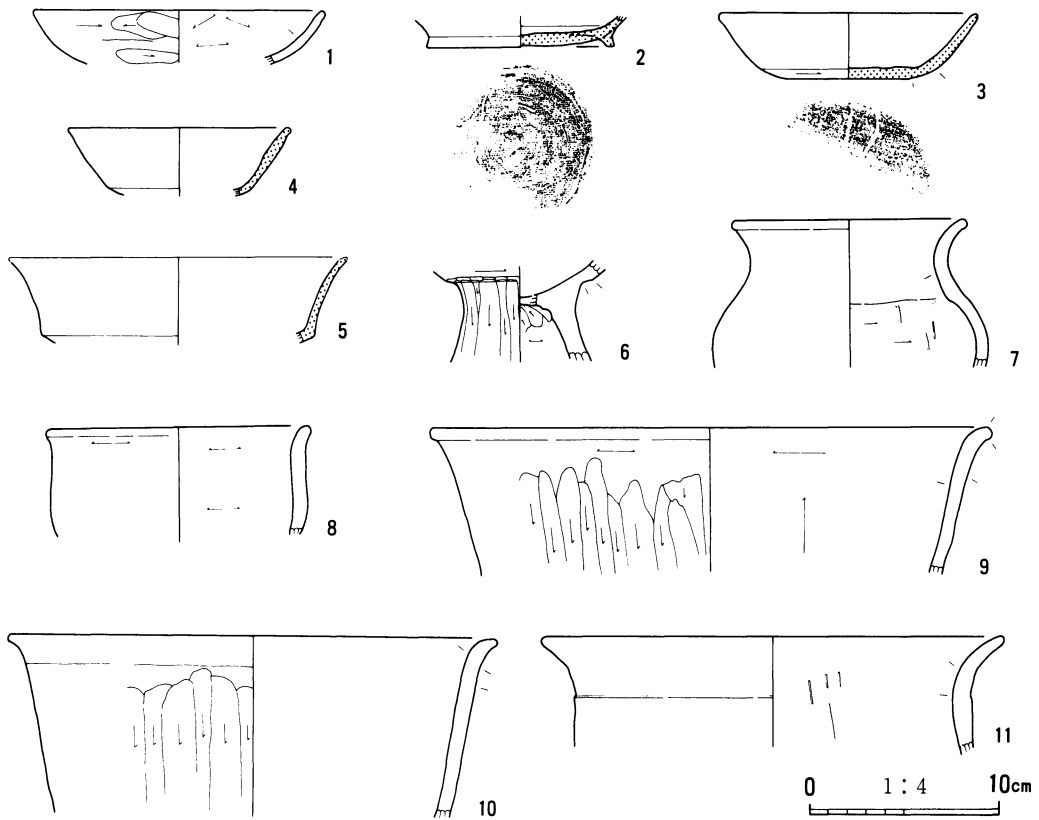
床下構造



第21図 11(004)号跡実測図(1)

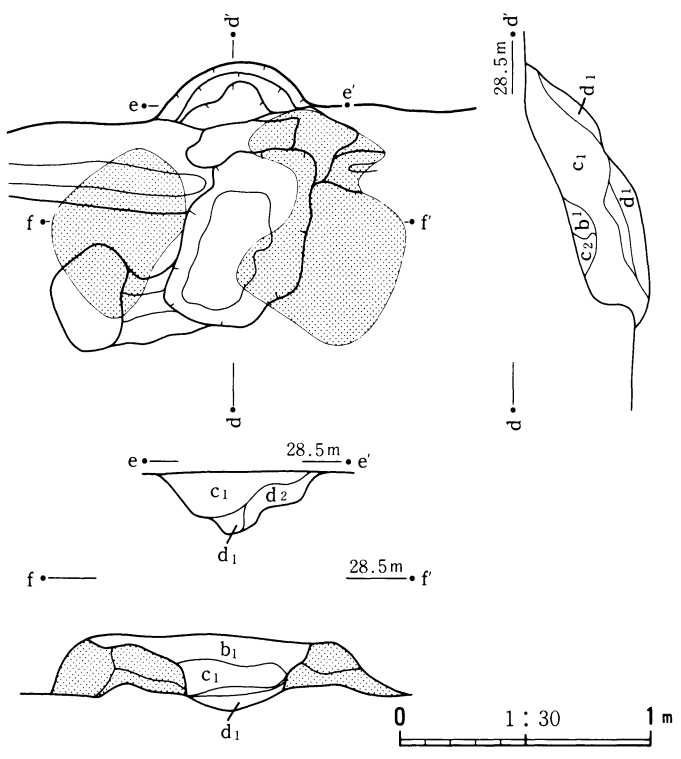
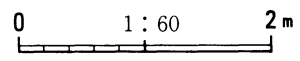
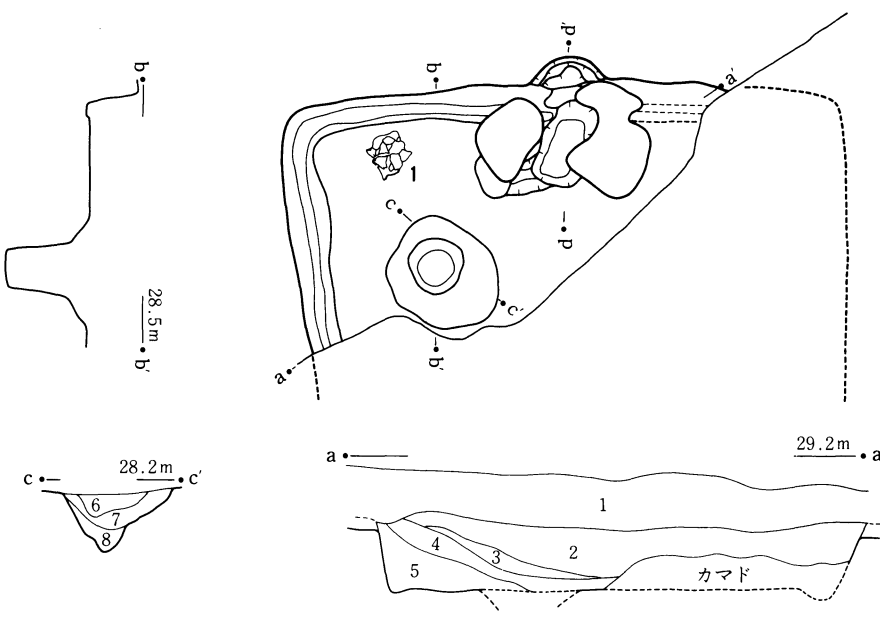


第22図 11(004)号跡実測図(2)



第23図 11(004)号跡出土遺物

2B-45



- 住居跡覆土—
1. 黒色土 表土
 2. 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック(1~5cm)を含む
 3. 暗褐色土 山砂、ロームブロックを少し含む
 4. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを含む
 5. 黒色土 ローム粒、ロームブロックを少し含む
全体に軟質である
- 柱穴覆土—
6. 暗褐色土 ロームブロック(1cm)を少し含む
 7. 暗褐色土 ロームブロック(1~3cm)を含む
 8. 暗褐色土 ロームブロック(1cm)をごく少し含む
- カマド—
- b1. 黒褐色土 山砂を含む、天井(?)
 - c1. 黒褐色土 山砂、焼土を含む
 - c2. 黒褐色土 焼土を少し含む
 - d1. 暗褐色土 ロームを含む(d1の直上に焼土の層がある)
 - d2. 黄褐色土 ロームを主体とする

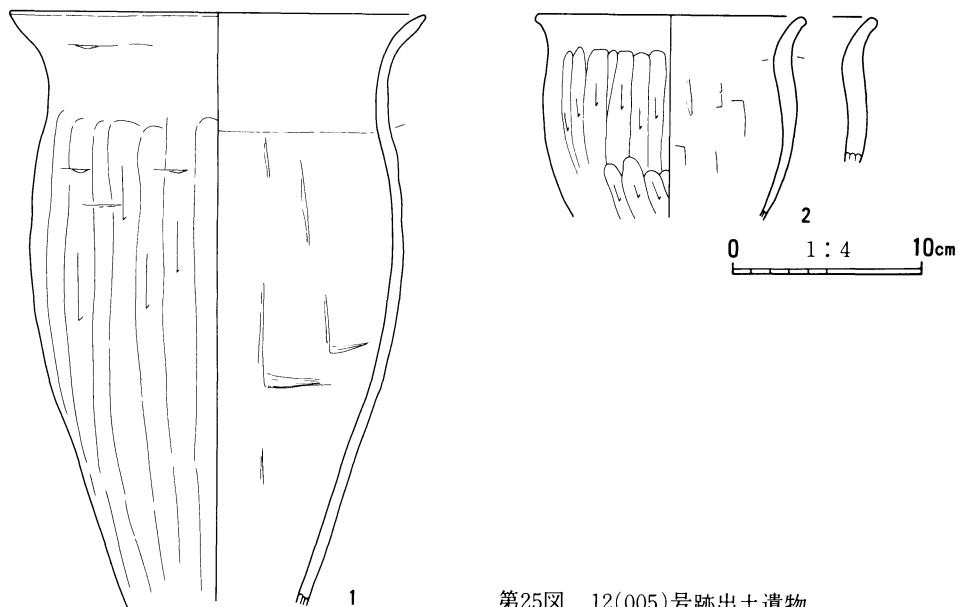
第24図 12(005)号跡実測図

12 (005) 号跡 (第24, 25図, 図版10)

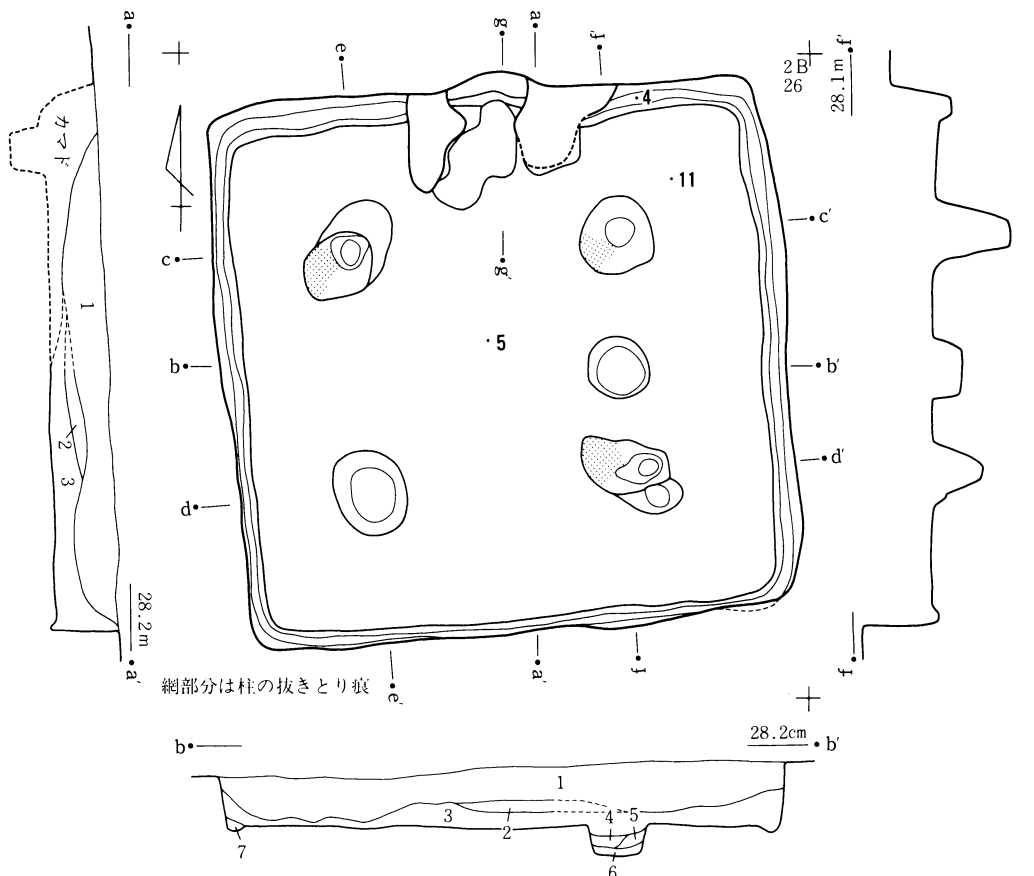
調査区域の南東側2B-44グリッドから検出された。住居跡の大部分は区域外にあって、今回は全体の1/4弱が発掘されたにすぎない。確認面の標高は28.5 m 弱である。

平面形は1辺の長さが4.5 m ほどの方形であると推定される。カマドと西側の壁面をもとに推定した主軸方向は、北-12°-西となる。床面はおおむね水平に調整されている。支柱穴は4本と思われるが、実際に発掘できたのは北西の1本だけであった。周溝は幅30 cm, 深さ5 cmほどで全周していると考えられる。カマドは北壁の中央附近から発見された。遺存の状態はあまり良くない。

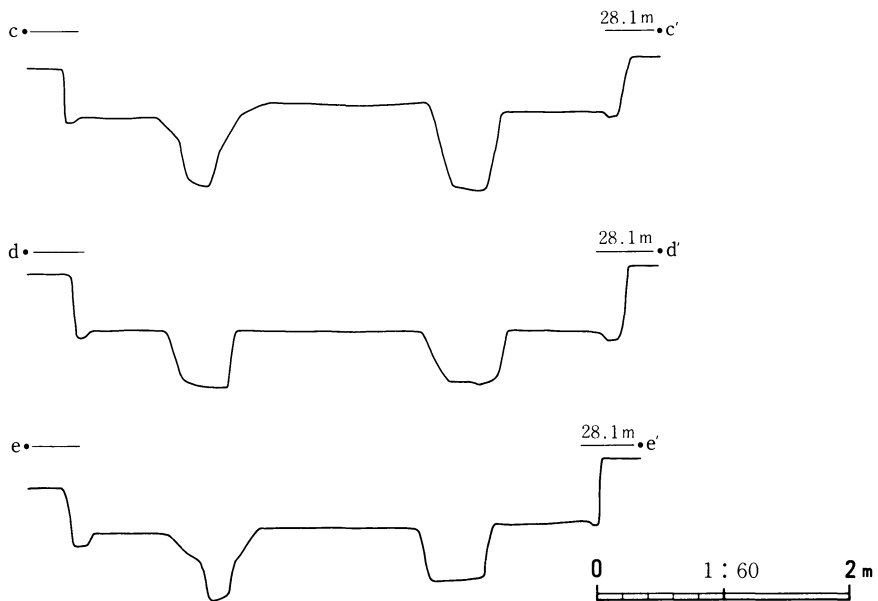
遺物は図示した2点の他は細片が少量発見されただけである。1はカマド西側の床面で発見された土師器の甕, 胴部下半から底部を欠いている。口径21.8 cm, 頸部径17.9 cm, 胴の張らない長胴の甕で, 外面は頸部より上がヨコナデ, 頸部以下がヘラケズリで調整されている(ヘラケズリは上から下へ何回かに分けて行われたと思われるが, よく観察できなかった)。内面は上半がヨコナデ, 胴部は横方向のヘラナデ。2は小形の甕もしくは鉢。全体にゆがんでいて, 口径は13.2~15.8 cm, 器厚も5~10 mmと部分的に著しく異なる。外面は2段のヘラケズリ, 内面は横方向のナデ, 口縁部内外面はヨコナデ, 褐色で砂粒を多く含み砂質である。



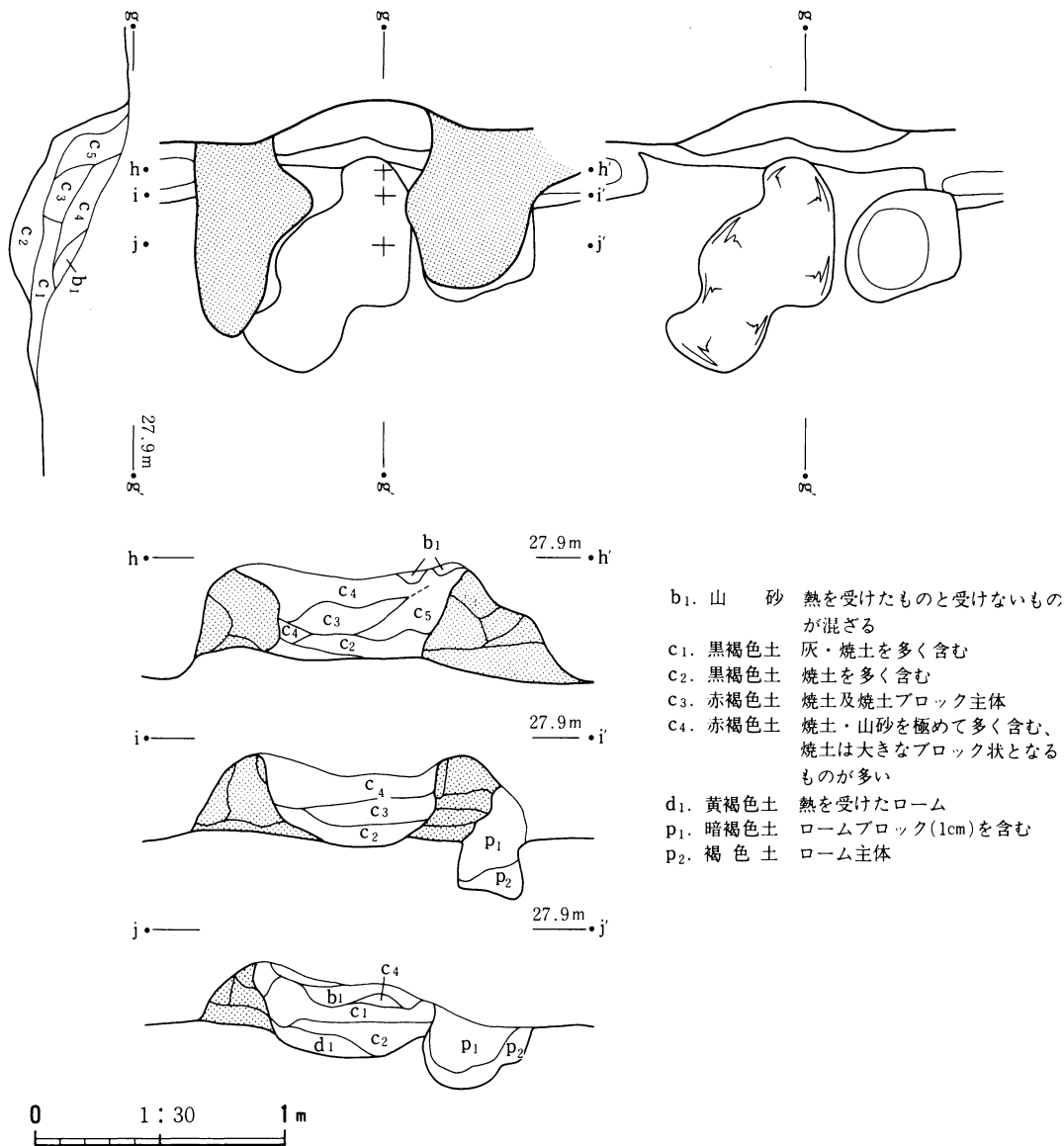
第25図 12(005)号跡出土遺物



- | | | | |
|---------|--------------------|---------|--------------------|
| 1. 黒褐色土 | ローム粒、小さいロームブロックを含む | 5. 暗褐色土 | 大きいロームブロックを含む |
| 2. 暗褐色土 | ローム粒、ロームブロックを含む | 6. 黄褐色土 | 小さいロームブロック、ローム粒を含む |
| 3. 暗褐色土 | ロームブロック、新期テフラを少し含む | 7. 黒色土 | 混入物が少ない、しまっている |
| 4. 暗褐色土 | ローム粒を含む | | |



第26図 13(007)号跡実測図(1)

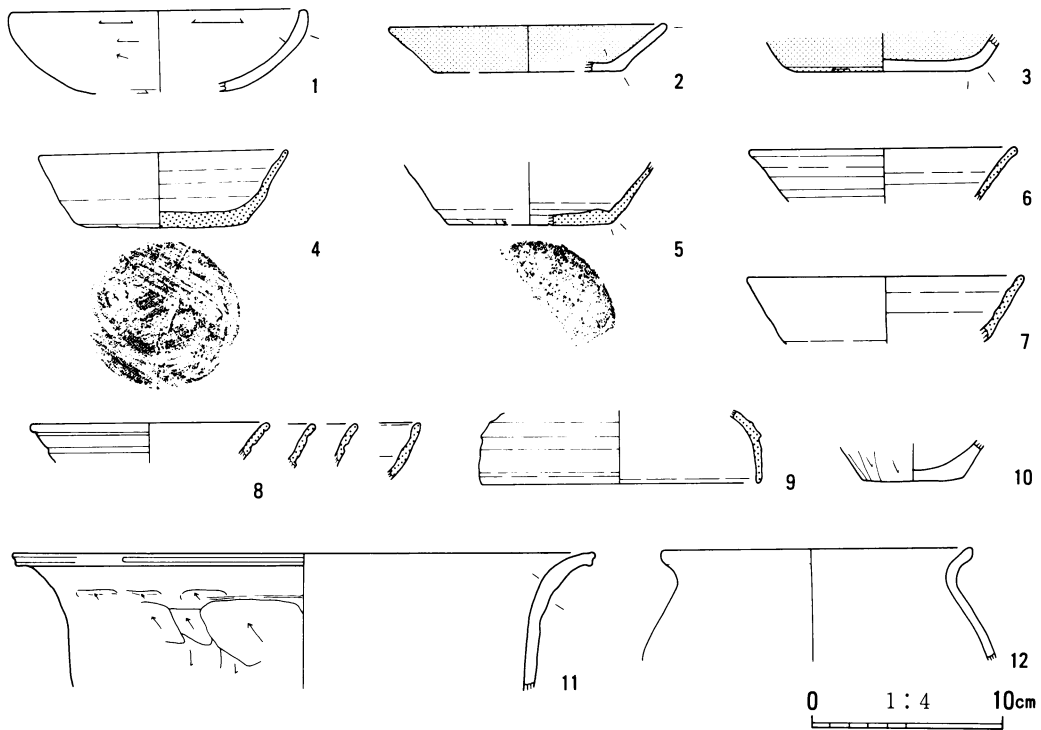


第27図 13(007)号跡実測図(2)

13 (007) 号跡 (第26, 27, 28図, 図版10, 15)

調査区域の中央やや東寄りの台地平坦部分で検出された。本住居跡の北側約4mには14(008)号跡がある。確認面の標高は28m前後でほぼ平均している。

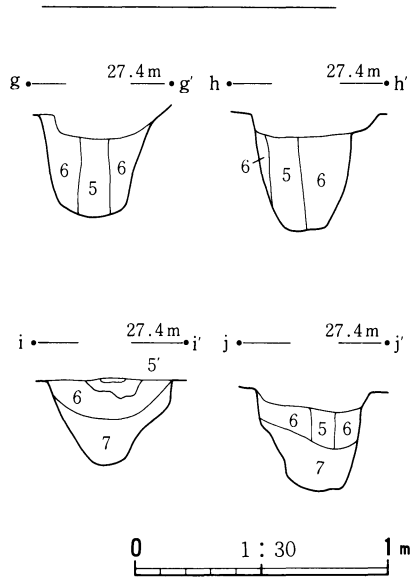
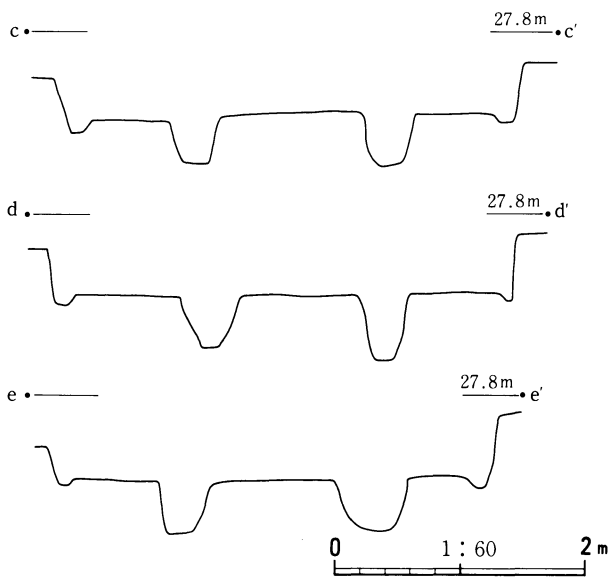
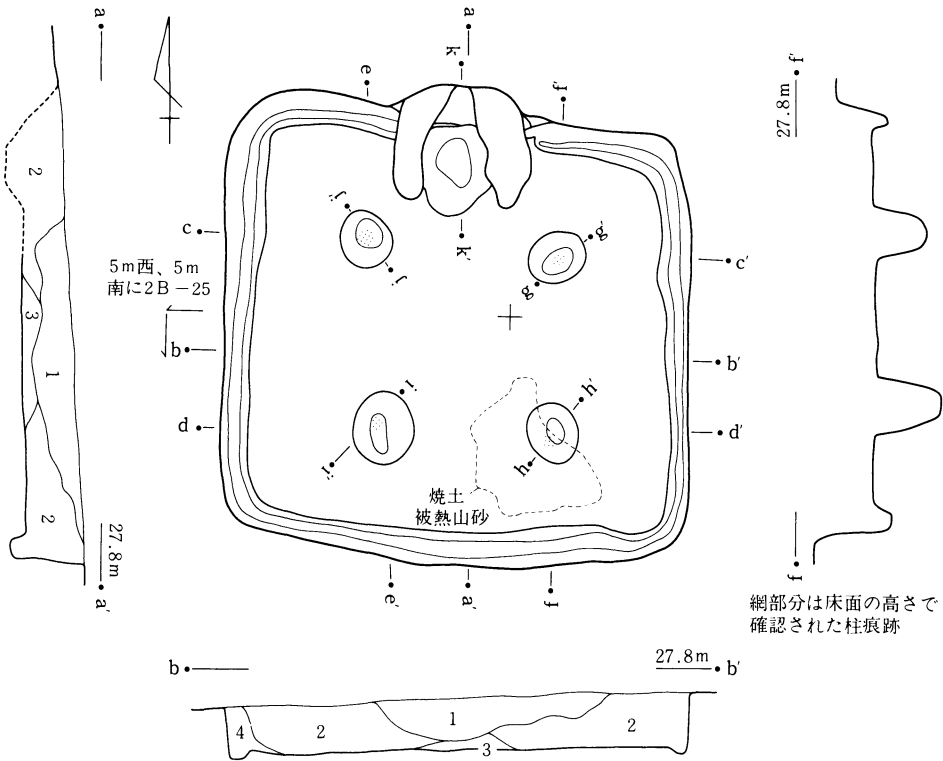
平面形は南北径4.2m, 東西径4.5mの隅丸方形をしている。主柱穴は4本, 南西を除く3本の柱穴には, 柱の抜き取り痕と思われるものが残っており, これによれば柱は皆, 西側から抜かれている。これら4本の主柱穴の他には北東と南東の主柱穴の間にやや浅いピットがある。床面はおおむね水平に整えられている。周溝はカマドの部分を除いて全周している。幅は10~30cm, 深さは10cmほどで北側がやや広い。カマドは北壁のほぼ中央で検出された。遺存状態は



第28図 13(007)号跡出土遺物

普通、東側の袖の下に径40 cmほどのピットがある。

遺物は少ない。4, 12を除いて復元実測 4, 5, 11は床面ないし覆土下層, その他は覆土中の出土。1～3は土師器の坏, 1は口縁部内外は横方向のナデ, 体部外面はヘラケズリ後ナデ, 内面はナデ, 内面は赤彩の可能性がある。2は全面赤彩, 口径14.6 cm, 器高2.4 cm, 底径9.8 cm (全て推定), 体部内面はヨコナデ後軽いミガキ, 底部内面はミガキ, 体部外面はヨコナデ, 底部外面はおそらく回転ヘラケズリ。砂粒を多く含む胎土で色は褐色, 焼成は良好, 外面は角が磨めつしている。3も2と同様全面赤彩, 内面は横方向のミガキ, 体部外面はナデ, 体部下端・底部は回転ヘラケズリ, 砂粒を多く含み, 焼成良好, 磨めつしている。4～8は須恵器の坏, 4は口径13.1 cm, 器高3.9 cm, 底径7.9 cm, 体部下端・底部は手持ちヘラケズリ, 灰色で砂粒を多く含むが焼成は良好で硬質。5は推定底径8.4 cm, 体部下端・底部は手持ちヘラケズリ, 8は濃い灰色で胎土に長石を多く含む, 焼成は極めて良好, 硬質である。同じ特徴をもつ破片が他にもあるので, 口縁形態だけを合わせて図示した。9は須恵器のふた, 推定口径15.0 cm, 外面上部は回転ヘラケズリ, 色調は灰色, 細砂粒を多く含むが焼成は良好で, 硬質。10は器厚の薄い土師器の甕, 12は土師器の小形甕, 推定口径15.8 cm, 頸部径14.0 cm, 口縁部内外面はヨコナデ, 体部内外面は横方向のナデ。



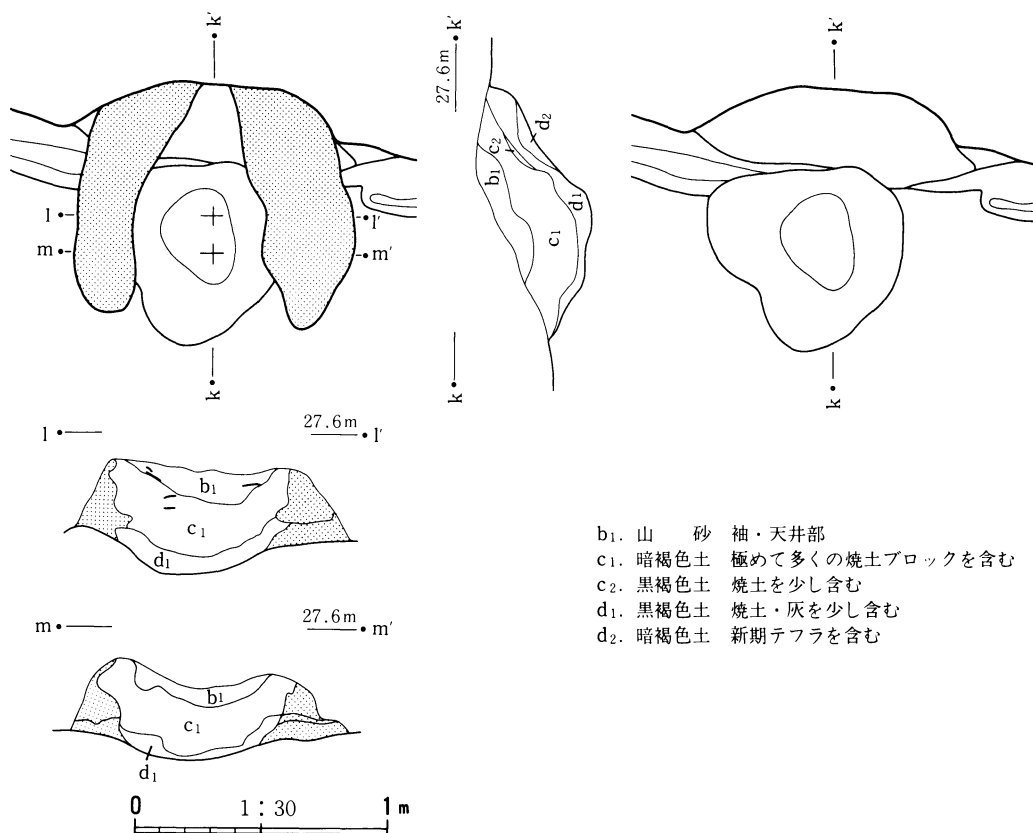
—住居跡覆土—

1. 黒褐色土 焼土ブロック(1~3cm)、ローム粒、かたいブロックを含む
2. 黒褐色土 新期テフラを含む、かたい
3. 暗褐色土 新期テフラを多く含む、かたい
4. 黒褐色土 ロームを少し含む

—柱穴覆土—

5. 黒褐色土 柱痕と思われる、少量のロームを含む、やわらかい
- 5'. 黒褐色土 5と同質だが柱痕とは思われない
6. 暗褐色土 ロームブロック(1~2cm)を含む、しまっている
7. 褐色土 ロームブロック(2~5cm)を多く含む、よくしまっている

第29図 14(008)号跡実測図(1)



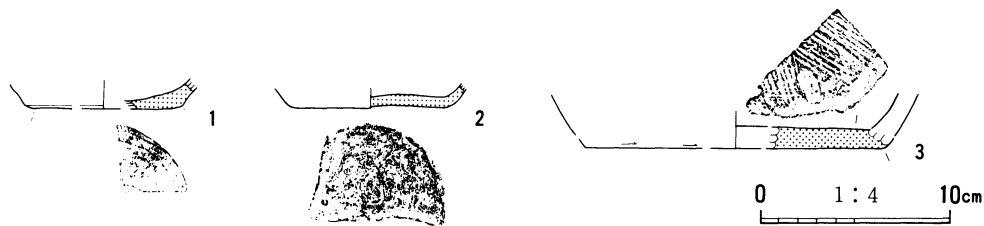
第30図 14(008)号跡実測図(2)

14 (008) 号跡 (第29, 30, 31図, 図版11)

調査区域北側の2B-15グリッドに位置する。今回、発見された同時代の住居跡の中で最も北側に位置している。約4m南側には(007)号住居跡がある。確認面の標高は、27.5~27.8m、北西側がやや低くなっている。

平面形は1辺の長さが3.3~3.7mのひしゃげた方形を呈している。主軸方向は北-1°-西前後になると推定される。覆土は黒褐色土を基調とした、しまった土で構成されている。支柱穴は、4本検出され、4本とも床面で柱痕と思われるものが確認できたが、断面とは必ずしも一致しなかった。床面はほぼ水平に調整されている。周溝は幅15~35cm、深さ5~15cmほどで、カマドの部分を除いて全周している。カマドは北壁の中央から発見された。遺存状態は比較的良好であった。

遺物は極めて少ない。図示した他に器厚の極めて薄い土師器の甕が $\frac{1}{2}$ 個体分ほどあるが、復元できなかった。1, 2は須恵器の坏, 1の体部下端と底面は回転ヘラケズリ, 灰色で焼成良好, 硬質。2は軟質で磨めつが著しい。3は須恵器, 大形甕の底部, 体部下端はヘラケズリ? 底部内外面とも平行タタキ, 色は明るい灰色で, 雲母・長石を多く含む。



第31図 14(008)号跡出土遺物

3. その他

15 (101) 号跡 (第32図, 図版11)

調査区の西端, 2A グリッドと2B グリッドの境を中心として発見された溝状遺構である。本遺構の両端は調査区域外に存在すると考えられ, 今回は15 m 弱の発掘を行ったにすぎない。調査部分の中央, 東側で16 (102) 号跡に接している。本遺構は等高線に添うような形で台地の縁辺部を巡ってゆくものと考えられる。

形状は幅2~3 m, 深さ40~60 cmほどで, 両側に平坦面を持ち, 浅いすり鉢状の断面を示している。覆土には「宝永火山灰」と思われる火山灰を含んだ暗褐色土が検出されている。

遺物は覆土から土師器・須恵器の破片が出土しているが時期・性格を明らかにすることはできない。

16 (102) 号跡 (第32図, 図版12)

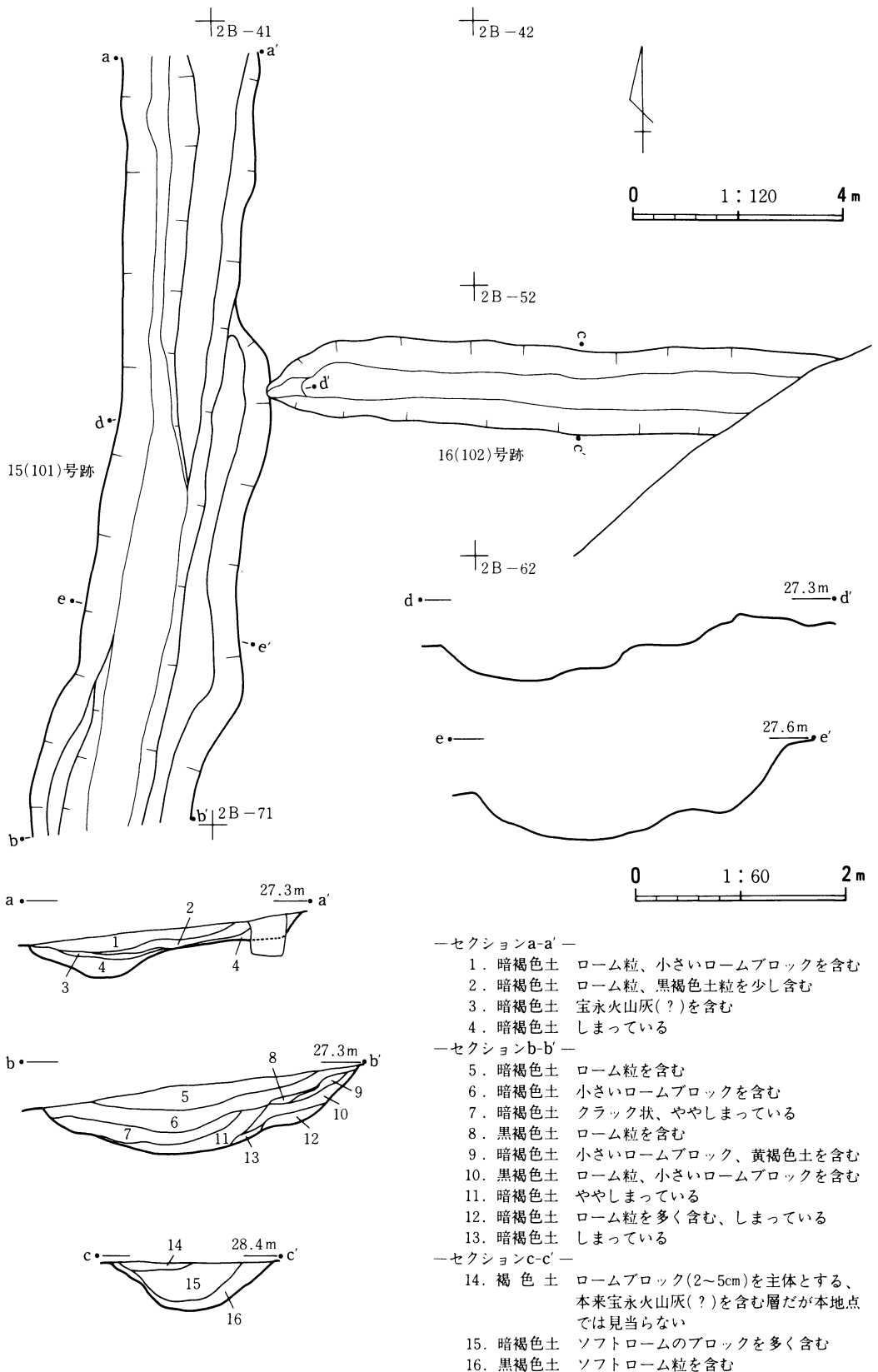
調査区西側2B-50~53グリッドで検出された溝状遺構である。西端は前述の15 (101) 号跡と接しており, 15 (101) 号跡にほぼ直交するように東側へ延びていく。今回調査されたのは11 m ほどで, 東端は調査区域外にある。なお接点の部分で両遺構の新旧関係は明らかにならなかった。

形状は幅が約1.6 m, 確認面からの深さが50 cmの浅いすり鉢状をしている。覆土には, 上部に「宝永火山灰」ではないかと思われる火山灰を含んだ褐色土が認められる。

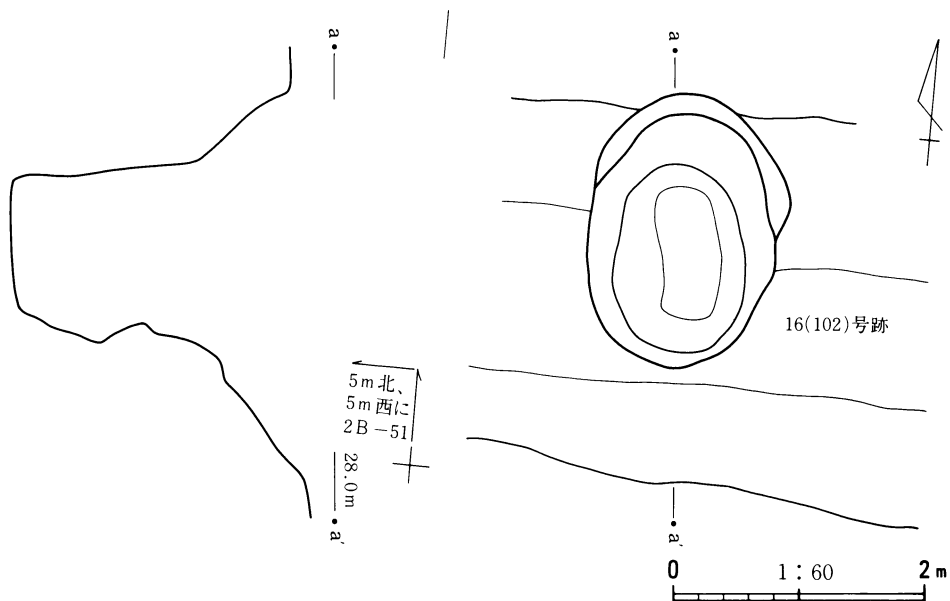
17(205)号跡 (第33図, 図版12)

前述の16(102) 号跡の中から検出された土壌である。

平面形は長軸が2.2m, 短軸が1.5m弱の長円形で, 長軸は北-4°-西前後を示す。確認面(溝上面)からの掘りこみは2 mを超える。断面形は中段を持ち, それ以下では立ち上がりの角度が大きくなる。覆土は極めて軟質の暗褐色土で時期的に新しい遺構の可能性が高い。16(102) 号跡との新旧関係は明確でない。遺物も全く検出できなかった。



第32図 15(101)・16(102)号跡実測図



第33図 17(205)号跡実測図

4. 貝層サンプルの分析

今回、分析した資料は全て4(201)号土壌内に残されていた貝層から採取したサンプルを水洗・分離して得たものである。以下サンプルの採取、水洗、集計等の方法について記述する。

貝層サンプルの採取方法

- st. A 平面的な大きさは30 cm×30 cmの正方形とし、貝層の最上面から水平に15 cmずつを切り取って1単位とした。したがって採取単位1つの体積は30 cm×30 cm×15 cmとなり、およそ13500 cm³である。採取単位数はst. A-1～st. A-7までの7つである。
- st. B 平面的な大きさは50 cm×50 cmの正方形とした。この採取地点内に含まれる貝層を肉眼で観察できる層位ごとに採取し、1単位とした。ただし層によっては小さな層をいくつかまとめて1単位としたものや、厚い層を分割して複数の単位を採取したものがある。なお採取単位に付した数字は土層断面の層序の数字と一致している。したがって各採取単位の体積は不定である。採取単位総数は10。
- st. C 貝をほとんど含まない層を50 cm×20～25 cm×40 cm=4000～5000 cm³ほど採取し、1単位とした。採取単位総数1
- st. D st. Cと同様に層を採取した。平面的な大きさ、厚さは不定。採取単位総数1。

サンプルの保管

採取された資料は単位ごとにビニール袋に入れて通常の状態での保管した。

第1表 貝層サンプル出土の貝類一覧

No.	種名	学名	個体数	%
腹足綱/前鰓亜綱/原始腹足目				
1	ツボミガイ	<i>Patelloida (Chizacmea) pygmaea lampanicola</i> (HABE)	21	+
2	イボキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i> (LAMARCK)	76294	77.4
3	スガイ	<i>Lunella coronata coreensis</i> (RECLUS)	2401	2.4
4	カワニナ	<i>Semisulcospira bensoni</i> (PHILIPPI)	3	+
5	タマキビガイ	<i>Littorina brevicula</i> (PHILIPPI)	1	+
6	ミミズガイ	<i>Siliquaria (Agathirses) cumingi</i> (MÖRCH)	1	+
/中腹足目				
7	ヘナタリ	<i>Cerithidea (Cerithideopsilla) cingulata</i> (GMELIN)	31	+
8	イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i> (BRUGUIÉRE)	7	+
9	ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i> (LISCHKE)	431	0.4
10	ウミニナ科不明	Family Potamididae	3	+
11	ツメタガイ	<i>Neverita (Glossaulax) didyma</i> (RÖDING)	69	0.1
/新腹足目				
12	アカニシ	<i>Rapana thomasi</i> CROSSE	55	0.1
13	イボニシ	<i>Thais clavigera</i> (KÜSTER)	21	+
14	アラムシロ	<i>Hinia festiva</i> (POWYS)	813	0.8
15	バイ	<i>Babylonia japonica</i> (REEVE)	1	+
/後鰓亜綱/頭楯目				
16	キジビキガイ科不明	Acteonidae	4	+
斧足綱/糸鰓亜綱/真多歯目				
17	ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i> (LINNÉ)	13	+
18	サルボウ	<i>Scapharca subcrenata</i> (LISCHKE)	4	+
/翼形目				
19	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i> (THUNBERG)	3405	3.5
/弁鰓亜綱/異歯目				
20	ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i> PRIME	240	0.2
21	アサリ	<i>Tapes (Amygdala) philippinarum</i> (ADAMS et REEVE)	896	0.9
22	オキアサリ	<i>Gomphina (Macridiscus) veneriformis</i> (LAMARCK)	11	+
23	オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i> (GMELIN)	225	0.2
24	カガミガイ	<i>Dosinorbis (Phacosoma) japonicus</i> (REEVE)	21	+
25	ハマグリ	<i>Meretusroria</i> (Röding)	12200	12.4
26	マルスタレガイ科不明	Veneridae	15	+
27	バカガイ	<i>Mactra chinensis</i> Philippi	1	+
28	シオフキ	<i>Mactra veneriformis</i> Reeve	1337	1.4
29	ベニハマグリ	<i>Mactra ornata</i> Gray	1	+
30	ムラサキガイ	<i>Hiatula diplos</i> (LINNE)	2	+
31	サラガイ	<i>Peronidia venulosa</i> (Schrenck)	1	+
32	ニッコウガイ科不明	Tellinidae	4	+
33	マテガイ	<i>Solen strictus</i> Gould	36	+
/無面目				
34	オオノガイ	<i>Mya (Arenomya) arenaria oonogai</i> Makiyama	2	+
35	斧足綱不明		4	+
	総計		98574	99.8

サンプルの水洗

網目の大きさが9.52 mm, 4.0 mm, 2.0 mm, 1.0 mmの4種類の試験フルイを用いた。フルイを網目の大きいものから順に重ね、9.52 mmのフルイ上にサンプルを乗せ、遺物水洗用のハケ等で土を落としながら流水によって順次、下へ送った。この際、ハケ等で資料が破損しないように、また水圧によって資料がはねないように、小さい資料が流失してしまわないように注意した。

乾燥

各網目上に残った分離物は、整理箱の新聞紙上にひろげて乾燥させた。本来、屋内で静かに乾燥させるのが望ましいが、時間的、場所的な制約から、今回は屋外での乾燥を併用した。しかし、風によって運ばれたと思われる、現生の植物種子が混入したサンプルがあった。また、ごく小さい資料を紛失する恐れもあると思われ、屋外での乾燥は可能な限り避けるべきである。

第2表 貝層サンプルにおける貝類出土数とその割合

— st.A (個体数) —

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
貝種 地点	ツボミガイ	イボキサゴ	スガイ	カワニナ	タマキビガイ	ミミズガイ	ヘナタリ	イボウミナ	ウミニナ	ウミニナ科	ツメタガイ	アカニシ	イボニシ	アラムシロ	バイ	キジビキガイ科	ハイガイ
st.A-1	3	8,137	3				1		24			1	1	157	1	1	
st.A-2	1	2,144	71						6		5	5	2	43			2
st.A-3	2	2,984	96		1		2		24		3	1	1	20			1
st.A-4		2,248	79					1	22		10	1	2	22			5
st.A-5	3	3,905	54				7		40	1	7	6	2	14			
st.A-6		3,575	2				3		26		5	4		26			1
st.A-7	1	12,047	3				1		32				1	135		1	
合計	10	35,040	308		1		14	1	174	1	30	18	9	417	1	2	9
%	+	81.9	0.5		+		+	+	0.4	+	0.1	+	+	1.0	+	+	+

— st.A (割合) —

st.A-1	+	92.2	+				+		0.3			+	+	1.8	+	+	
st.A-2	+	67.7	2.2						0.2		0.2	0.2	0.1	1.4			0.1
st.A-3	+	73.7	2.4		+		+		0.6		0.1	+	+	0.5			+
st.A-4		66.6	2.3					+	0.7		0.3	+	0.1	0.7			0.1
st.A-5	0.1	81.6	1.1				0.1		0.8	+	0.1	0.1	+	0.3			
st.A-6		68.3	+				0.1		0.5		0.1	0.1		0.5			+
st.A-7	+	90.3	+				+		0.2				+	1.0		+	
合計	+	81.9	0.5		+		+	+	0.4	+	0.1	+	+	1.0	+	+	+

分離

十分に乾燥させた資料は、各網目の大きさごとに、手、及びピンセットを使って不用な土や、木の根を取り除き、動物遺体等に分離した。

同定

同定は各サンプルの各網目ごとに行った。貝類遺体の同定には、主として以下の記載を参考にして筆者が行い、随時、主任調査研究員 小宮孟の教示を得た。

波部忠重監修 学研生物図鑑「貝Ⅰ」1981, 「貝Ⅱ」1983, 学習研究者

奥谷喬司監修 学研観察図鑑「海の貝」1985, 学習研究社

波部忠重・小菅貞男 標準原色図鑑「貝」1967, 保育社

小宮孟 「Ⅶ魚類および貝類遺体」千葉東南部ニュータウン7 『木戸作遺跡 (第2次)』

18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	合計
サルボウ	マガキ	ヤマトシジミ	アサリ	オキアサリ	オキシジミ	カガミガイ	ハマグリ	マルスタレガイ科	バカガイ	シオフキ	ベニハマグリ	ムラサキガイ	サラガイ	ニッコウガイ科	マテガイ	オオノガイ	斧足綱不明	8,828
	82		50		4	2	171	5		180	1	1		1			2	8,828
1	173		43		8		483	1		177					1		1	3,167
	508		34		15	11	303			37					4		1	4,048
	219	10	141		17	4	555		1	33			1		4			3,375
	429	2	53	5	15		189	1		37					17			4,787
	97	64	76	1	4		1,311			39					2			5,236
	49	87	41		5	1	906			33		1		2		1		13,347
1	1,557	163	438	6	68	18	3,918	7	1	536	1	2	1	3	28	1	4	42,788
+	3.6	0.4	1.0	+	0.2	+	9.2	+	+	1.3	+	+	+	+	0.1	+	+	99.7

	0.9		0.6		+	+	1.9	0.1		2.0	+	+		+			+	99.8
+	5.5		1.4		0.3		15.3	+		5.6					+		+	100.2
	12.6		0.8		0.4	0.3	7.5			0.9					0.1		+	99.9
	6.5	0.3	4.2		0.5	0.1	16.4		+	1.0			+		0.1			99.9
	9.0	+	1.1	0.1	0.3		3.9	+		0.8					0.4			99.8
	1.9	1.2	1.5	+	0.1		25.0			0.7					+			100.0
	0.4	0.7	0.3		+	+	6.8			0.2		+		+		+		99.9
+	3.6	0.4	1.0	+	0.2	+	9.2	+	+	1.3	+	+	+	+	0.1	+	+	99.7

— st.B (個体数) —

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
地点 具種	ツボミガイ	イボキサゴ	スガイ	カワニナ	タマキビガイ	ミミズガイ	ヘナタリ	イボウミナ	ウミニナ	ウミニナ科	ツメタガイ	アカニシ	イボニシ	アラムシロ	バイ	キジビキガイ科	ハイガイ
	1	2	3,825	6					3	18		2			72		
2-1,5,6	1	2,830	2				1	1	20			2		38			
2-1上	3	4,614	1				1		19	1		3		69			
2-1中		4,534	805				1		33		11	13		55			
2-1下	2	2,191	712	1		1	2	1	29	1	8	2	2	27			1
4	2	1,454	274				6		37			1	1	12			1
3	1	6,243	244	1			2		27		7	1	4	4			
2-2		2,190	12	1			1		10		7	11		12		1	
7		4,202	8					1	6		3	4		33		1	1
8		8,602					3		56		1		5	74			
合計	11	40,685	2,064	3		1	17	6	255	2	39	37	12	396		2	4
%	+	73.9	3.8	+		+	+	+	0.5	+	0.1	0.1	+	0.7		+	+

— st.B (割合) —

1	+	86.1	0.1					0.1	0.4		+			1.6			+
2-1,5,6	+	79.9	0.1				+	+	0.6			0.1		1.1			
2-1上	0.1	83.1	+				+		0.3	+		0.1		1.2			
2-1中		56.2	10.0				+		0.4		0.1	0.2		0.7			
2-1下	+	49.6	16.1	+		+	+	+	0.7	+	0.2	+	+	0.6			+
4	0.1	51.9	9.8				0.2		1.3			+	+	0.4			+
3	+	88.4	3.5	+			+		0.4		0.1	+	0.1	0.1			
2-2		67.7	0.4	+			+		0.3		0.2	0.3		0.4		+	
7		65.3	0.1					+	0.1		+	0.1		0.5		+	+
8		90.8					+		0.6		+		0.1	0.8			
合計	+	73.9	3.8	+		+	+	+	0.5	+	0.1	0.1	+	0.7		+	+

— st.C —

st.C		179							2								
%		94.2							1.1								

— st.D —

st.D		390	29														
%		68.9	5.1														

18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	合計
サルボウ	マガキ	ヤマトシジミ	アサリ	オキアサリ	オキシジミ	カガミガイ	ハマグリ	マルスダレガイ科	バカガイ	シオフキ	ベニハマグリ	ムラサキガイ	サラガイ	ニッコウガイ科	マテガイ	オオノガイ	斧足綱不明	
	53		29		8		384	5		37								4,445
1	140		41		11	1	397	3		51								3,540
	135		37		9		604			56						1		5,553
	106		84		31	1	2,034			363								8,071
	246	6	72	4	43		970			97				1	2			4,421
	445		19		15		494			40					3			2,804
1	234	4	28	1	14		224			17					2			7,059
	35	3	57		6		847			41								3,234
1	39	59	64		12		1,925			74								6,433
	400	2	15		2		295			13					1			9,469
3	1,833	74	446	5	151	2	8,174	8		789				1	8	1		55,029
+	3.3	0.1	0.8	+	0.3	+	14.9	+		1.4				+	+	+		99.9

	1.2		0.7		0.2		8.6	0.1		0.8								99.9
+	4.0		1.2		0.3	+	11.2	0.1		1.4								100.0
	2.4		0.7		0.2		10.9			1.0						+		100.0
	1.3		1.0		0.4	+	25.2			4.5								100.0
	5.6	0.1	1.6	0.1	1.0		21.9			2.2				+	+			99.7
	15.9		0.7		0.5		17.6			1.4					0.1			99.9
+	3.3	0.1	0.4	+	0.2		3.2			0.2					+			100.0
	1.1	0.1	1.8		0.2		26.2			1.3								100.0
+	0.6	0.9	1.0		0.2		29.9			1.2								99.9
	4.2	+	0.2		+		3.1	+		0.1					+			99.9
+	3.3	0.1	0.8	+	0.3	+	14.9	+		1.4				+	+	+		99.9

	3						5			1								190
	1.6						2.6			0.5								100

	12	3	12		6	1	103			11								567
	2.1	0.5	2.1		1.1	+	18.2			1.9								99.9

1979, 千葉県文化財センター

小宮孟・郷田良一 「IV-4 動物遺体」 千葉東南部ニュータウン10『小金沢貝塚』1982, 千葉県文化財センター

小宮孟 「IX貝塚散布地区内出土の動物遺骸」1983, 千葉県文化財センター

集計

集計も各サンプルの各網目ごとに行い、最終的に各サンプル単位に合計した。各資料の集計基準は以下の通りである。

○貝類腹足綱 (ただし微小な陸産貝類を除いたもの) 9.52 mmと4.0 mmの網目上で分離したもののうち、体層部を保存しているものを集計した。

○貝類斧足綱 9.52 mmと4.0 mmの網目上で分離したもののうち、主歯を保存しているものを右殻と左殻の別々に集計し、集計数の多い殻数を記録した。

○微小な陸産貝類 各網目上で分離したもののうち、体層部を保存しているものを集計した。ただし、詳しい同定ができなかったため、便宜的にオカチョウジガイの仲間、キセルガイの仲間、マイマイの仲間の3つに分けた。

○フジツボ類・炭化物他 フジツボ類、微小な炭化物に関しては、各項目上に分離したもので存在の有無だけを確認、集計し、数量の集計は行わなかった。

計測

計測はノギスを用いて行い、殻の一部分が欠損している資料でも、無理なく原形が復元できるものについては、推定値を測った。計測部位は貝によって変えた。

水洗から計測に使用した主な用具は以下のものである。

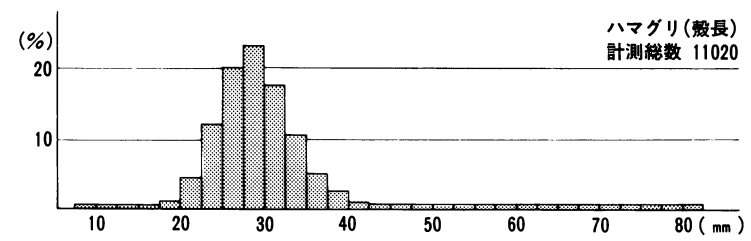
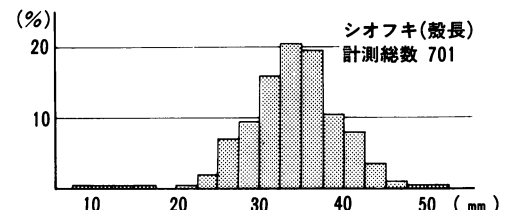
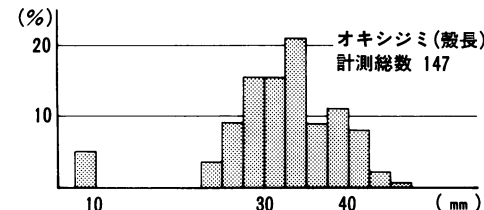
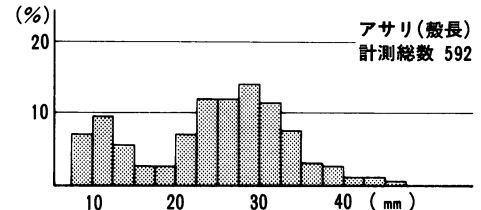
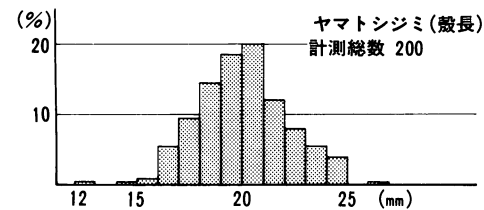
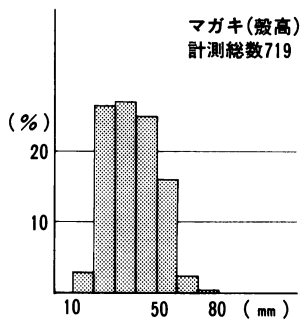
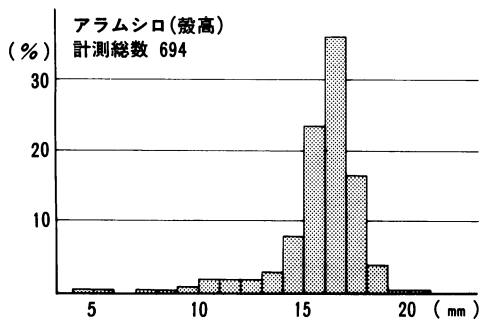
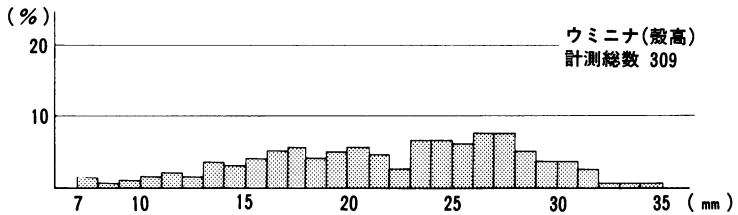
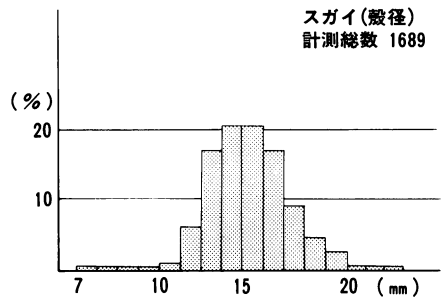
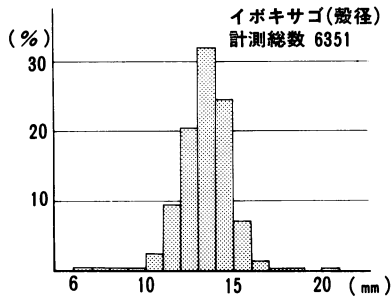
○試験用フルイ (9.52 mm, 4.0 mm, 2.0 mm, 1.0 mmの各網目)

○タルトックス ピンセット

○カーボンファイバーノギス(ダイヤル-15, 田島製作所)

貝の大きさ (第34図)

計測を行った貝のうち、計測総数が100個体をこえる貝について、その大きさの分布をグラフにしておく。次に主な貝の法量を平均-最大-最小の順に記述する。なお単位は全てmmである。イボキサゴ(殻径) 13.4-21.0-6.0, スガイ(殻径) 15.4-23.0-7.0, ウミナナ(殻高) 21.8-35.0-7.0, ヘナタリ(殻高) 23.7-28.0-19.0, ツメタガイ(殻高) 17.0-31.6-4.4, アカニシ(殻高) 48.7-80.0-22.9, イボニシ(殻高) 26.3-33.2-20.7, アラムシロ(殻高) 15.8-21.0-2.7, ハイガイ(殻長) 平均35.6, サルボウ(殻長) 平均16.8, マガキ(殻長) 平均38.2, ヤマトシジミ(殻長) 平均20.4, アサリ(殻長) 平均24.3, 最小5.7, オキシジミ(殻長) 32.0-47.0-6.3, カガミガイ(殻長) 平均51.5, ハマグリ(殻長) 29.4-94.4-7.0, シ



第34図 主な貝の大きさ

オフキ（殻長）平均33.9，最小7.0，マテガイ（殻長）平均13.8，オキアサリ（殻長）平均26.0。

魚類遺体について

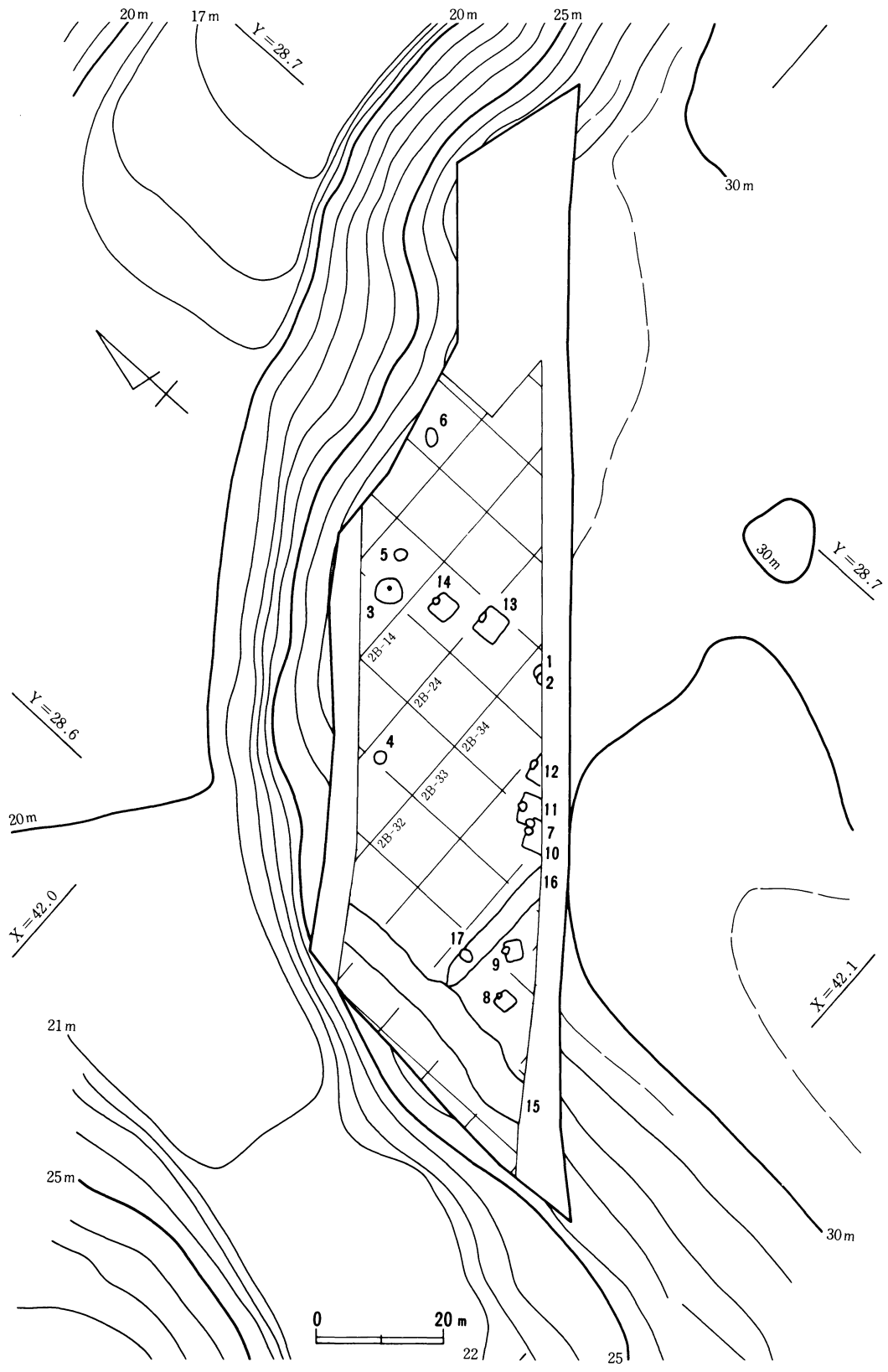
大量の貝が投棄されていたにも拘らず、貝層中のサンプルからは魚類遺体を確認することはできなかった。しかしst.Dを採取した11層の黒褐色土の中からイワシの脊椎骨の破片が1点だけ検出された。

5. まとめ

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡が2軒と土壌が5基発見された。このうち6(203)号跡だけはその形状から古い時期の可能性を持っている。残りの遺構のうち遺物の検出された1(006)号跡、3(009)号跡、4(201)号跡、5(202)号跡の4遺構は遺物の特徴からみて、加曽利E式の終末期に相当するとして良いだろう。また残りの2遺構についても形状等から判断して、中期末を大きくはずれないものと考えて、差しつかえあるまい。これらの遺構は散在しており、集落の中心から離れていることを示している。なお、縄文土器のグリッド別の分布をみると、遺構の配置とは関係なく、調査区域の東側半分に多く認められたことから、集落はその先に伸びていく可能性が高い。

奈良・平安時代の遺構としては、竪穴住居跡が7軒、検出された。遺構の分布状況や調査区域が台地の縁辺部に当たっていることなどを考えると集落はさらに南へ広がっていくと思われる。個々の住居跡の細かい年代については、遺物が貧弱で良好なセット関係が確認できないこと、実測図の多くを復元実測に頼っていること、明らかに時期の異なる遺物の混入が見られることなど不確定な要素が多く、断定はさけない。ただ、敢えて特徴的な遺物を抽出して年代を考えると11(004)号跡、13(007)号跡、8(001)号跡、10(003)号跡の順を考え、8世紀の中葉から9世紀の初頭にかけての住居跡群、としておきたい。

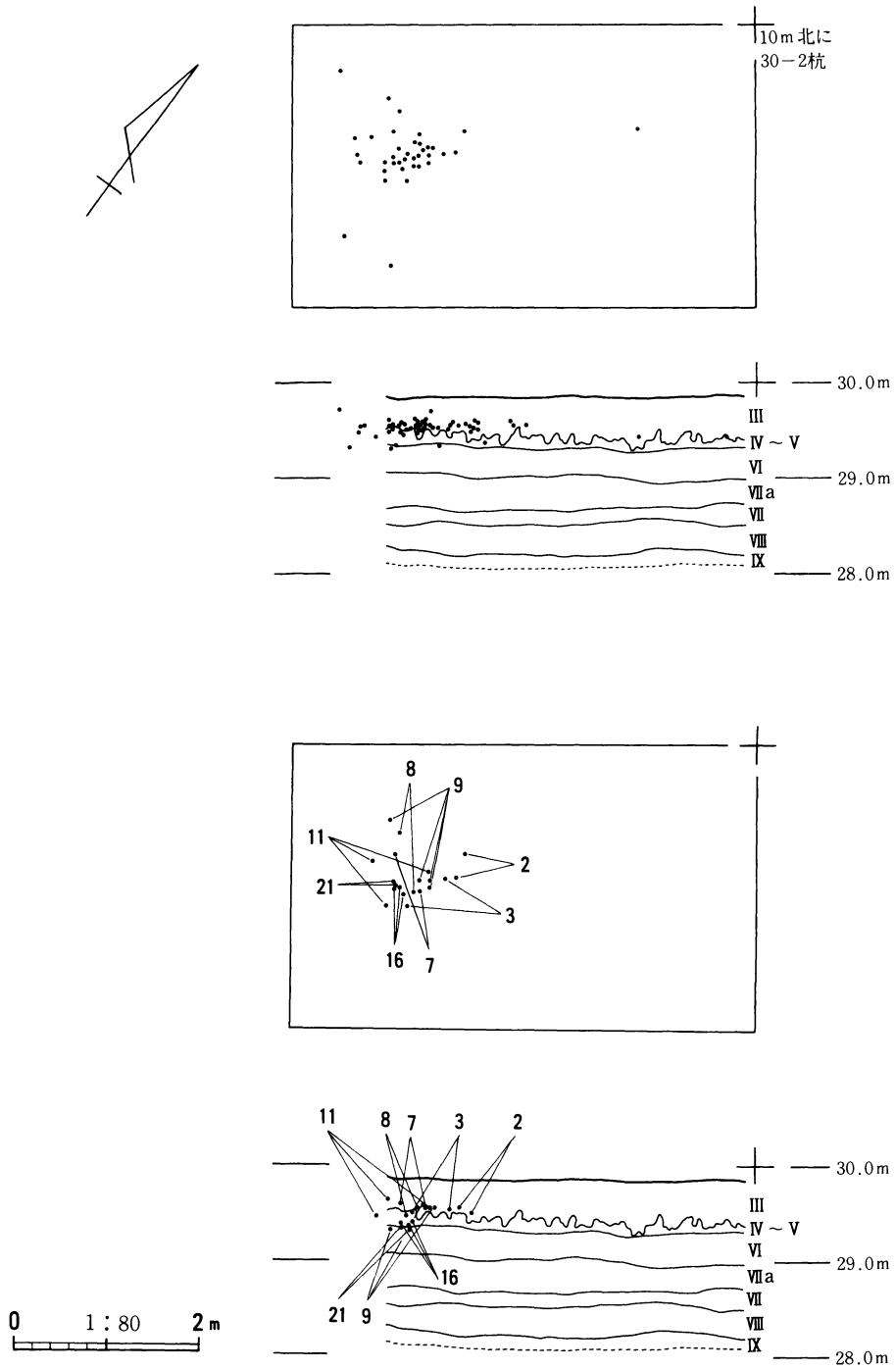
さらに時期不明としたものに溝2条、土壌1基がある。このうち溝2条の覆土には宝永火山灰と思われる火山灰の堆積が認められることから、江戸時代の遺構と推定されるが、火山灰の分析をしなかったので断言はできない。



第35図 遺構配置図

II章 谷津^{や つ がみ}上遺跡

1. 先土器時代



第36図 Aブロック遺物分布図

第3表 礫群構成礫一覧

Aブロック

No	遺物番号	法量			石質	遺存状態				焼 ス ス	備 考
		長径	短径	重量		A	B	C	D		
1	1	7.8	4.1	186.0	砂岩	○				○	
2	2+3	7.3	4.7	109.8	石英斑岩		○			-	
3	4+20	4.7	3.2	46.2	砂岩			○		○	
4	5	5.5	3.6	84.6	チャート		○			×	
5	6	5.7	3.1	59.8	石英斑岩		○			○	
6	7	5.2	3.2	35.6	流紋岩		○			○	
7	8+27	7.0	2.7	64.3	砂岩		○			○	
8	9+19	5.8	4.3	97.9	石英斑岩			○		○	
9	10+26+32+33	5.2	3.5	63.9	石英斑岩		○			○	
10	11	2.1	1.3	3.8	砂岩				○	○	
11	12+17+23	6.1	4.8	124.6	砂岩		○			○	
12	13	5.7	2.5	27.3	砂岩			○		○	
13	14	3.3	2.6	12.8	チャート			○		○	2片接合
14	15	4.3	3.5	41.2	チャート	○				-	
15	16	2.6	2.0	9.8	チャート				○	○	4片接合
16	18+28+37	5.6	4.0	89.3	チャート	○				○	
17	21	2.4	1.5	3.2	砂岩				○	○	
18	22	2.9	1.8	4.9	砂岩				○	○	
19	24	6.2	2.9	46.2	石英斑岩	○				○	
20	25	3.0	2.5	16.4	チャート			○		○	
21	29+36	5.6	3.4	55.8	流紋岩	○				○	
22	30	4.7	2.9	32.0	流紋岩	○				-	
23	31	4.0	2.7	21.8	砂岩		○			○	
24	35	4.7	3.6	43.7	チャート			○		○	

礫群構成礫一覧の見方

1. Noは整理の際、遺物に付した番号、接合作業が終了した時点で付けた。挿図・図版の番号はこの番号と一致している。
2. 遺物番号は、発掘調査の時、現場で付けた番号。礫群に含まれないと思われる遺物は削除したので表の中では、欠番となっている番号がある。
3. 法量の項で、長径、短径の単位はcm、重量の単位はgである。
4. 石質は肉眼観察のみによっている。
5. 遺存状態の各記号はおおむね次のような基準によって分類した。
 - A 完形ないしほぼ完形、接合したものは接合後の状態。
 - B 半分以上が残っており、原形が推定できるもの。
 - C 半分以下の破片で、原形は推定できない。
 - D ごく小さい破片

6. 焼礫の項は、○は被熱して赤化していることが確認できるもの、×は被熱していないと思われるもの、－はどちらか不明であるものを表わしている。
7. ススは肉眼で付着が確認できたものだけに○を付けた。

Aブロック (第36図, 図版18)

調査区域の東側、センター杭30-1の南側約10mの附近で検出された。ローム確認面の標高はおよそ28.8mでほぼ一定している。

遺物の分布は2.2×3.4mほどの範囲に及ぶが、北西側の1.0×1.2mほどの部分に集中している。出土層位は、Ⅲ層からⅥ層の上面にまで分布しているが、その中心はⅢ層の下半部にある。

遺物は総計36点が出土した。全て礫及び礫片である。完形で残存するものと、原形がわかるものを合わせると半数を超える。これは対岸の須摩堀遺跡の礫群とは異なる特徴である。石質は砂岩が多く、次いでチャート、石英斑岩、流紋岩の順になる。礫面の状態は焼礫でないものが1点、不明のものが3点あるが、残りの20個体は被熱している。

接合資料は8例あって、2点から4点の接合となっている。接合資料は、平面的、層位的に分布の密な場所でのみ検出されている。

2. 縄文時代

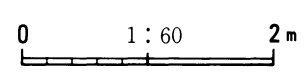
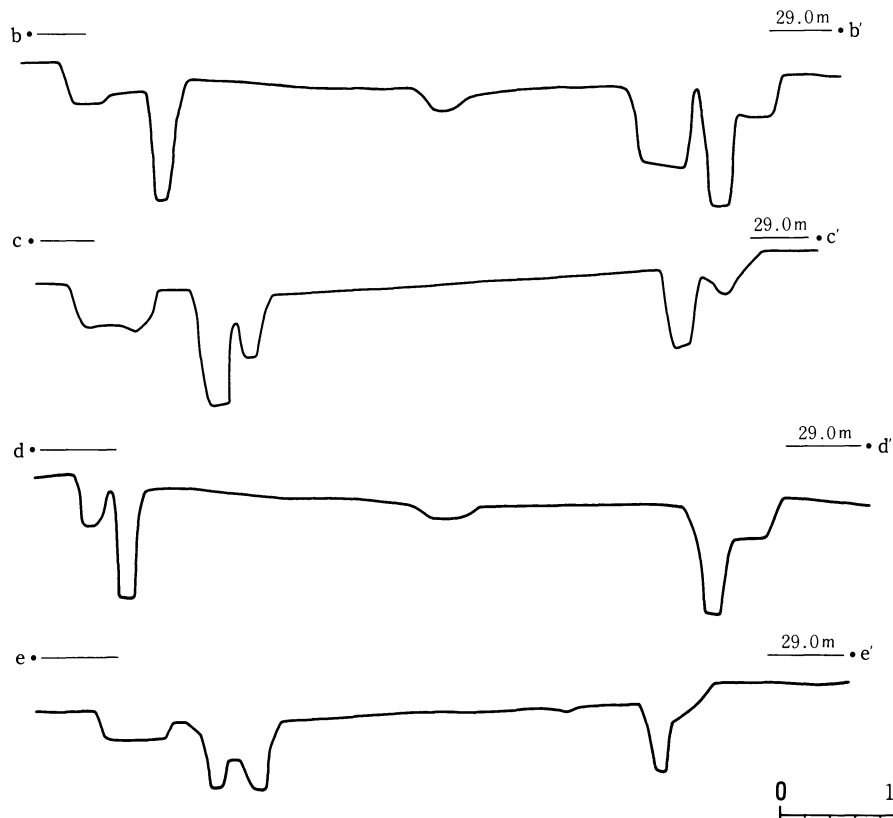
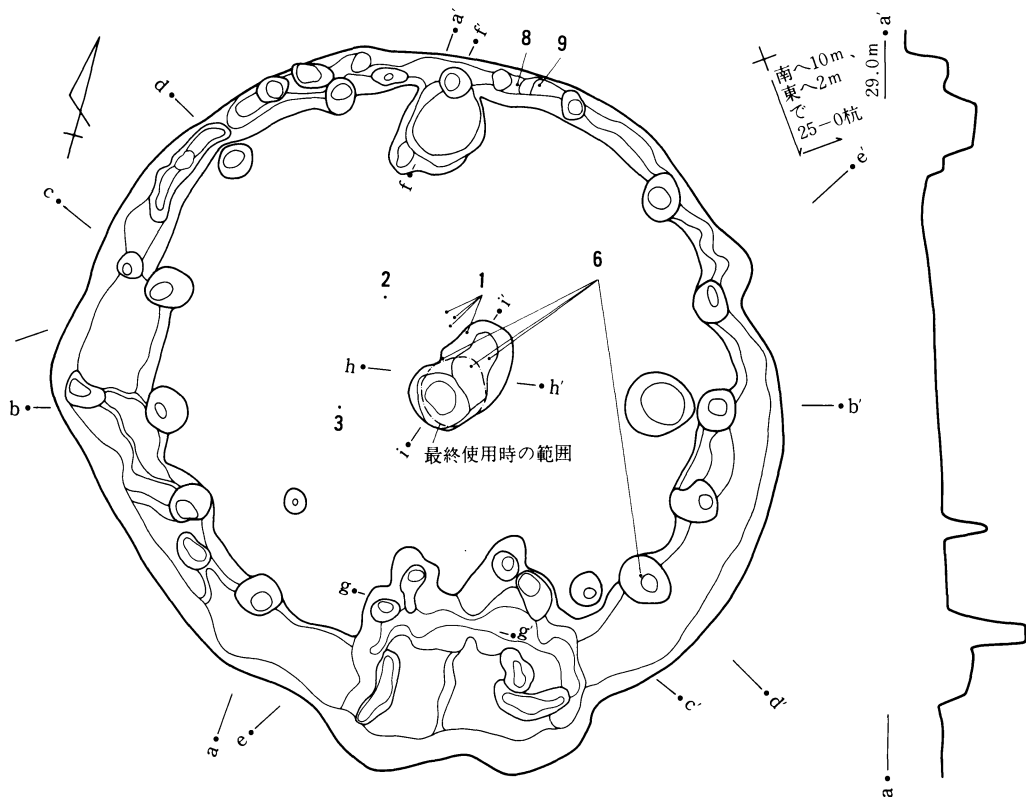
1 (008) 号跡 (第37, 38, 39図, 図版18, 19, 27)

縄文時代後期の堅穴住居である。

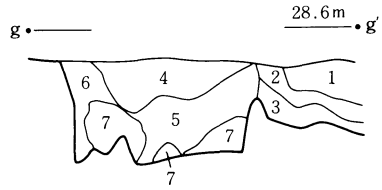
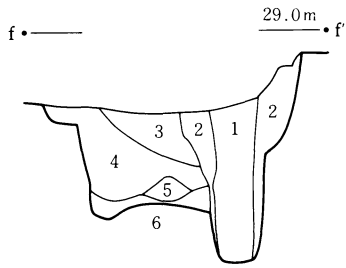
調査区域の中央からやや東のセンター杭25-0から8mほど北に位置している。確認面の標高は28.5~28.9mほどで全体としては南側が低い。

住居の平面形態は、径が5.3~5.8m程の不整形円で南側には出入口に関係すると思われるピット群がある。このピット群と炉をもとに主軸方向を求めれば北-15°-西前後となる。周溝状の溝がほぼ全周しており、その溝の内側にそって柱穴と思われるピットが並んでいる。周溝状の溝は北半分は平均30cmほどの幅であるが南側部分では60~70cmほどにひろがっている。南側のピット群はかなり複雑な状態を示しているが、基本的には想定した主軸線に対してほぼ対称な形をとっている。炉はほぼ中央にあって南北方向に長く、長径1.0m、短径0.5~0.6mの長円形の掘りこみを持っている。もっともこの炉は何回か作り替えられていて、最終使用時の炉は0.6×0.5m程度の広がりであり、他の部分には貼り床がなされていた。確認面からの掘りこみは25~50cmと比較的浅い。床面はおおむね平坦だが南西部分がやや低くなっている。

遺物は出土地点を示した1~3, 6が床面ないしそれに近い状態で、その他は覆土から出土した。1, 3, 4, 6は地文に縄文を持ち、沈線で文様を加えている。2は地文を持たず、口唇部に沈線が一条認められる。5は縄文のみで構成されている。7はやや荒く調整をした器面に櫛歯状工具で平行沈線を施文している。これらは堀之内I式に相当するものと思われる。

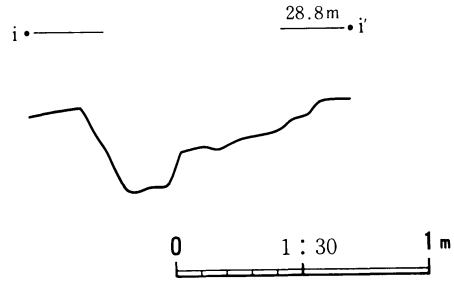
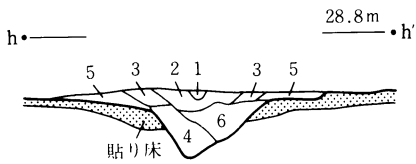


第37図 1(008)号跡実測図(1)



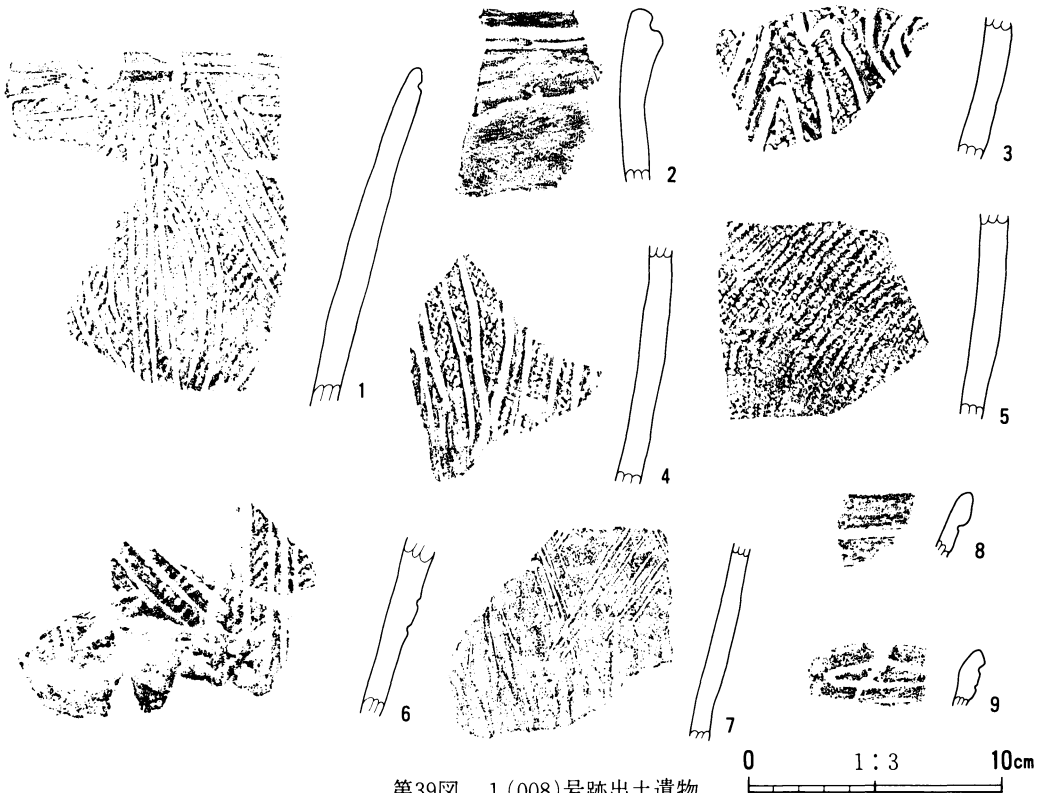
- 1. 黒褐色土 柱痕、小さいロームブロック、ローム粒を少し含む
- 2. 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒を含む、柱を建てた際に周溝を埋めた土と思われ固くしまっている
- 3. 黒褐色土 ロームブロック、ローム粒を少し含む、やわらかい
- 4. 黒褐色土 3と同質だがロームの割合が3より多い
- 5. 暗褐色土 ロームブロック(2~3cm)を多く含む、固くしまっている
- 6. 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む、やわらかい

- 1. 暗褐色土 焼土、炭化材を少し、ローム粒をやや多く含む
 - 2. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックをやや多く含む
 - 3. 褐色土 ローム粒を多く含む
 - 4. 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを含む
 - 5. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックをやや多く含む
 - 6. 褐色土 ローム粒を主体としている
 - 7. 褐色土 ローム粒、ロームブロックの混合層
- 4~7は人為堆積と思われる

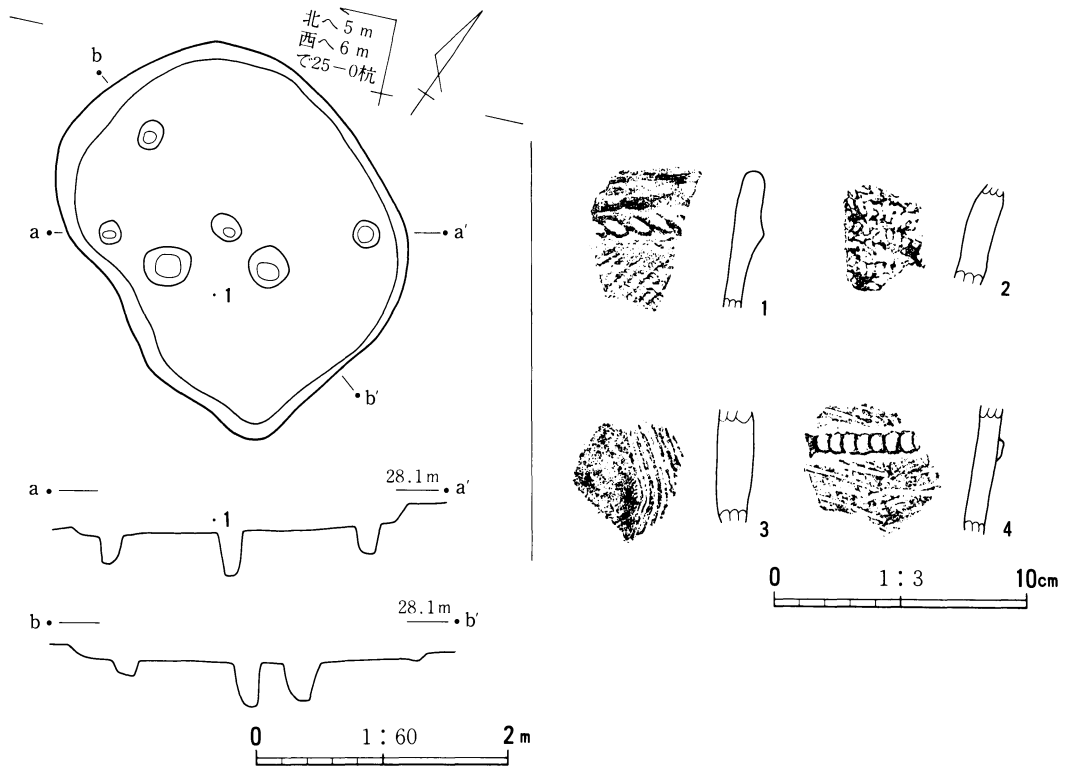


- 1. 黒褐色土 焼土粒を含む
- 2. 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土を少し含む
- 3. 黒褐色土 焼土粒、炭化物粒を少し含む
- 4. 暗褐色土 焼土を含む
- 5. 暗褐色土 焼土粒、炭化物粒を少し含む
- 6. 黒褐色土 焼土ブロックを含む

第38図 1(008)号跡実測図(2)



第39図 1(008)号跡出土遺物



第40図 2 (013)号跡実測図及び出土遺物

2 (013) 号跡 (第40図, 図版19, 28)

調査区域のほぼ中央南側, センター杭25-1から南へ6 mほどのところから検出された。本遺構のすぐ南側には3 (014)号跡がある。確認面の標高はおよそ27.8~28.0 mで南側ほど低くなっている。

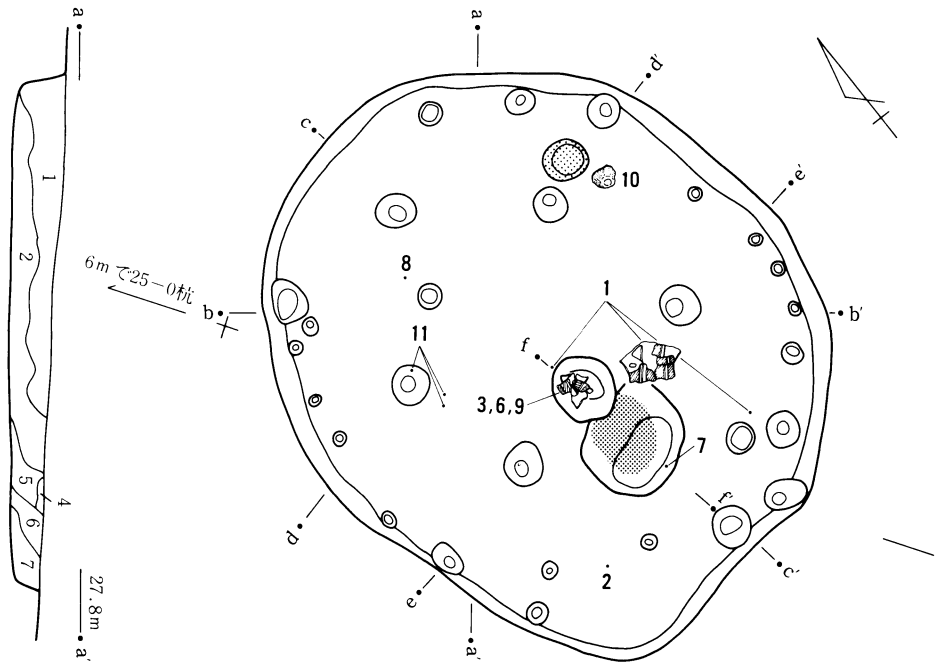
本遺構の平面形は南東部分がふくらんだ長円形となっている。(ただ南東部分には攪乱が目立ち、この形が原形ではなかった可能性もある。)確認面から底面までの深さは5~10 cmで、南側が浅い。底面からは6つの小ピットが検出された。このうち南東のピットは覆土に焼土を含んでおり炉跡に相当する可能性が高い。その他の5つについては柱穴の可能性はあるが特に規則性は認められない。

遺物はごく少量で図示したものが全てである。

3 (014) 号跡 (第41, 42, 43図, 図版20, 27, 28)

調査区域の中央, センター杭25-0から南へ約9 mほどの地点で検出された縄文時代中期の竪穴住居跡である。北側約2 mには2 (013)号跡が、南西約2 mには4 (015)号跡がある。遺構検出面の標高は27.3~27.8 mほどで、北側が高く南側が低い。

平面形は長径が約4.6 m, 短径が約3.9 mの不整長円形で、主軸方向は北-10°-西前後と推定さ

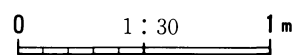
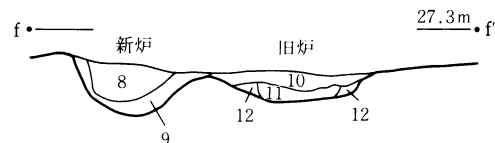
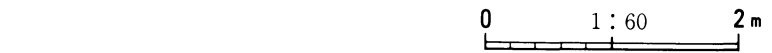
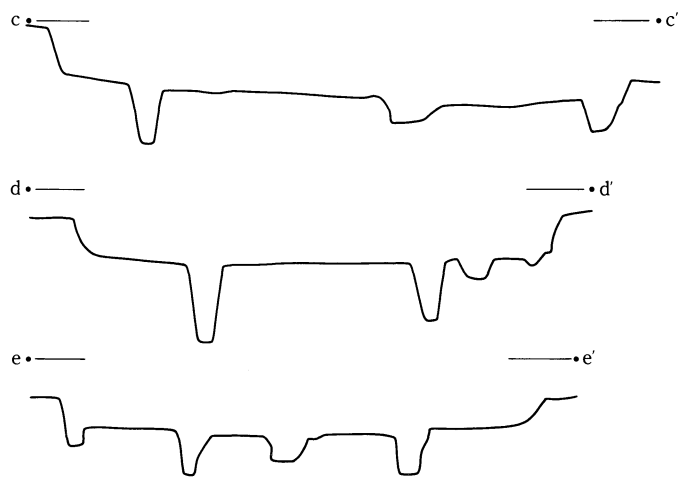
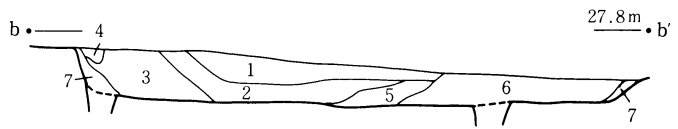


—住居跡覆土—

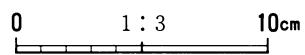
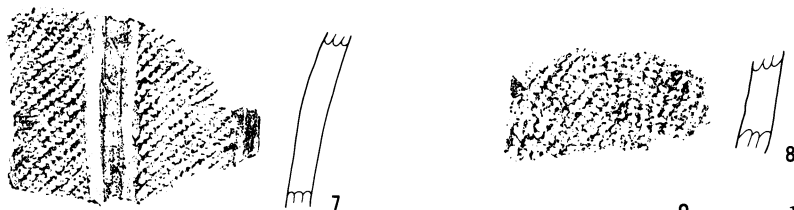
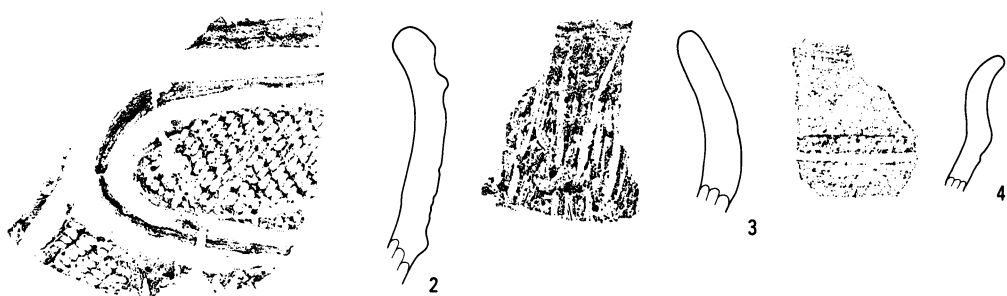
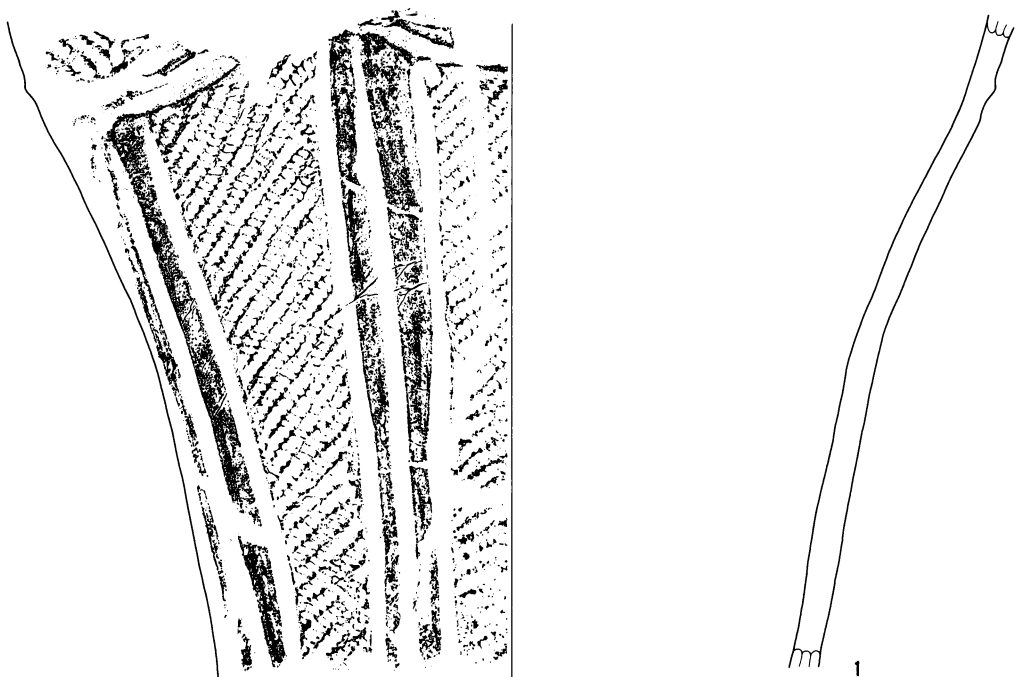
- 1. 黒褐色土 ロームブロック (0.5~2cm) を含む、固くしまっている
- 2. 黒褐色土 ロームブロック (0.5~1cm) と、ローム粒を多く含む、固くしまっている
- 3. 黒褐色土 ソフトローム粒と小さいロームブロックを多く含む、やわらかい
- 4. 暗褐色土 ロームを中心とする
- 5. 暗褐色土 ローム粒を多く含む
- 6. 暗褐色土 5層よりロームを多く含む
- 7. 褐色土 ロームを多く含む

—炉跡—

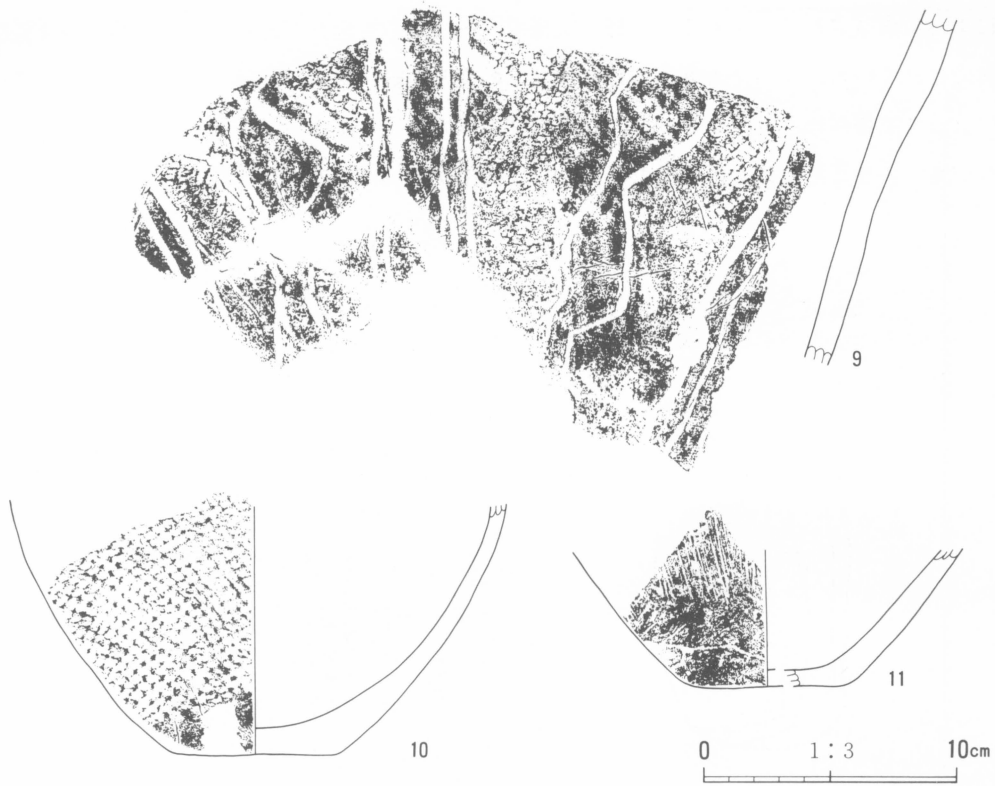
- 8. 暗褐色土 焼土粒、ローム粒を若干含む、しまっている
- 9. 粘土 内面は熱を受けている
- 10. 暗褐色土 ローム粒を少し含む、固くしまっている、貼り床
- 11. 黒色土 焼土を少し含む
- 12. 暗褐色土 ロームを少し含む



第41図 3(014)号跡実測図



第42图 3(014)号迹出土遗物(1)

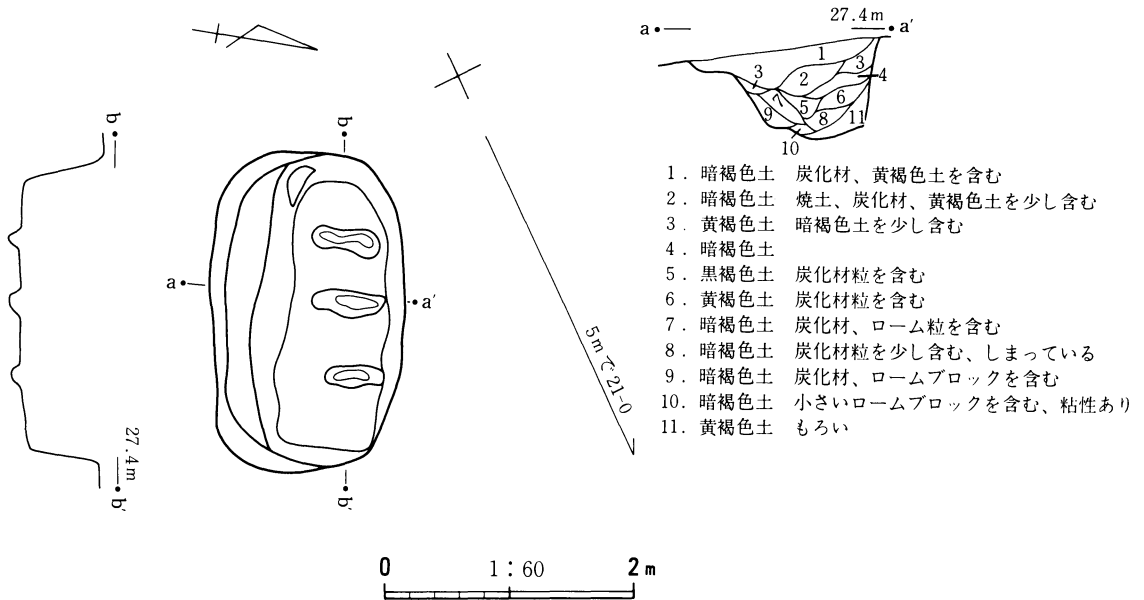


第43図 3(014)号跡出土遺物(2)

れる。遺構検出面から床面までの掘り込みは10～35 cm，中央部がやや低くなるが，ほとんど水平に調整されている。周溝は検出できなかった。炉は，住居跡の南側から発見された。使用時期の違う2つの炉が重複して，ひょうたんのような形をしている。新しい方の炉は南北径（長径）が55 cm，東西径（短径）が45 cm，深さ20 cmほどの長円形の掘りこみを持っている。この掘りこみの内面には平均5 cmほどの厚さに粘土が貼られている。炉内には土器が投げ込まれていた。旧炉は新炉の南側にあつて，わずかに重複している。掘り込みは径80 cmほどの不整形円形だったと推定され，深さは約15 cmの浅いすり鉢状になっている。人為的に埋戻されていて，最上部は貼り床されている。炉床の北側は50×65 cmほどにわたって被熱して赤くなっている。ピットは壁際をめぐる径が10 cm以下の小さいものと，その内側を中心に配される比較的大きいものに大別される。後者は深さが30～50 cmで支柱穴と考えられ，前者は深さが10～20 cmで支柱穴と考えられる。なお北西側の1つのピットには貼り床が施してあつた（図中の網部分）。

遺物は比較的豊富であつた。3，6，9は新炉内に投げ込まれていた土器，また7は旧炉の構築に使用されていたと考えられる出土状態を示していた。1は炉の周囲から出土した大形の深鉢で口縁，底部を欠いている，縄文を地文とし，太い沈線によって文様帯を作り出していて，上半には口縁部文様帯の一部が残っている，胴部文様帯は縄文と沈線間の磨り消した無文

帯によって構成される。2も1と同様の文様で同一個体の可能性がある。3は沈線のみで文様が構成されている。4～7も基本的には地文の縄文と沈線、および沈線に区画された磨り消し部によって文様が作られている。8, 10は縄文のみの破片だが4～7と同じ文様構成をとる可能性が高い。9は磨り消し部を持たない。11は櫛歯状工具による平行沈線文のみで地文は持たない。



第44図 4(011)号跡実測図

4 (011) 号跡 (第44図, 図版21)

調査区域の西寄りセンター杭21-0より南へ2 m ほどの地点に位置する。遺構検出面の平均的な標高は27.1～27.3 m ほどである。

形状は長径約2.5 m, 短径約1.5 m で各辺, 各隅がふくらんだ方形をしている。

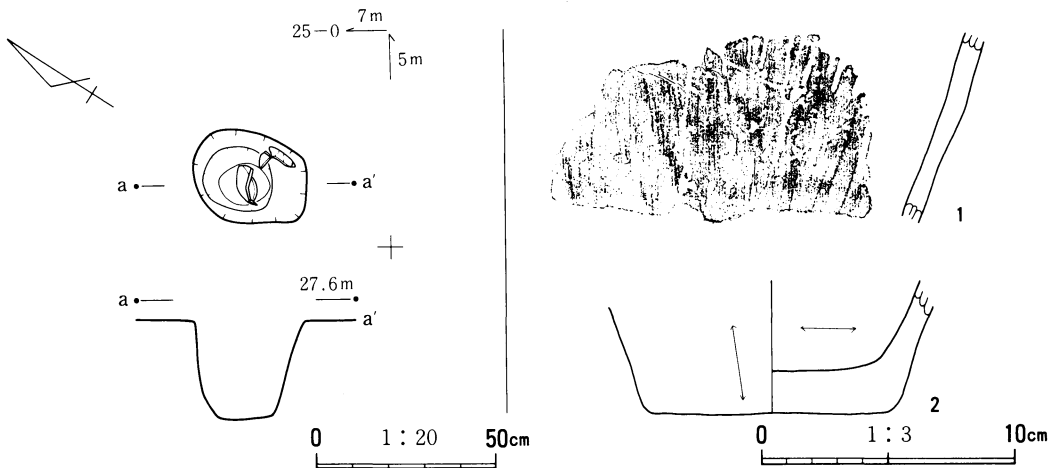
南側の長辺には幅が20～30 cmの一段低いテラスがあって, 確認面からの深さは平均10 cmほどである。底面は長径が2 m, 短径が0.7～0.9 m ほどの長方形を呈している。底面は比較的平らに成形されており整っている。この底面には, ほぼ40 cmの間隔で3つの小ピットが掘りこまれている。ピットは3つとも長方形で長径が40～50 cm短径が20～25 cm, 底面からの深さは10 cm弱である。覆土は炭化材片やローム粒を含む暗褐色土を基調とした土で自然埋没と考えられる。

遺物は極めて少なく, 本遺構の時期性格を決定する資料とはならなかった。

5 (015) 号跡 (第45図, 図版21, 28)

単独で検出されたピット内から土器が発見されたので, 一応遺構としてとらえておく。調査区域の中央南側センター杭24-3から南へ7 m ほどに位置する。東側に3(014)号跡がある。

ピットは確認面の長径が30 cm強, 短径25 cmほどの長円形, 底も10×15 cmの長円形を呈す。掘



第45図 5(015)号跡実測図及び出土遺物

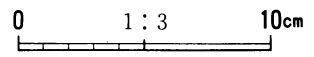
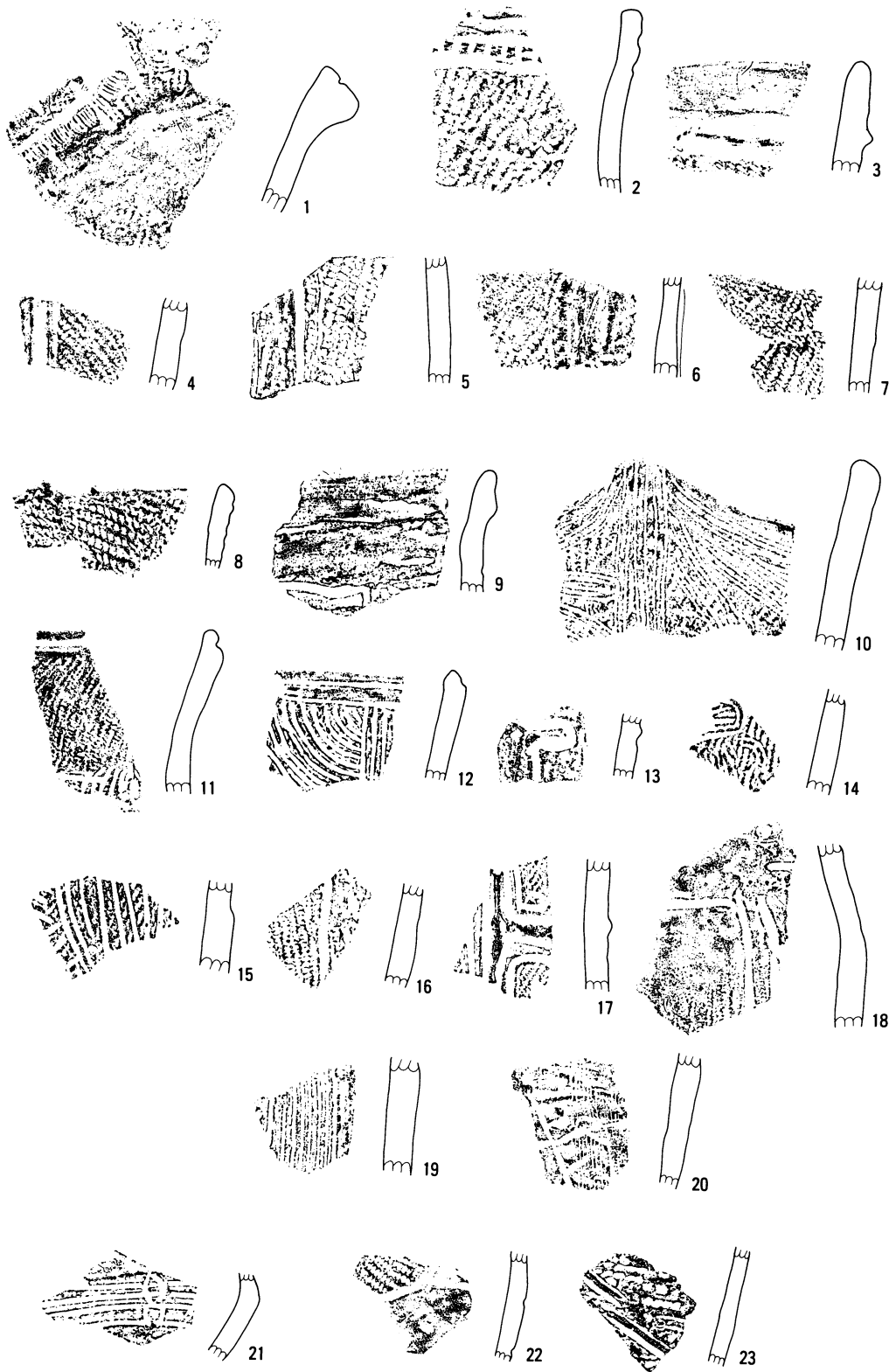
りこみの深さは25 cmで、途中に段を持つ。土器はピットの西側から発見されている。ピットの壁面に沿うような形で並んでおり、遺構確認面に近い高さで検出された。ただ後述するようにこの土器は、同一個体ではなく、部位も異なっていることから、一般的な埋甕とは区別した方が良いと思われる。

遺物は2点発見された、1は胴部下半の破片で上部にかすかな沈線が認められる。2は底部の破片。堀之内I式に相当か？

グリッド出土の遺物 (第46図, 図版28)

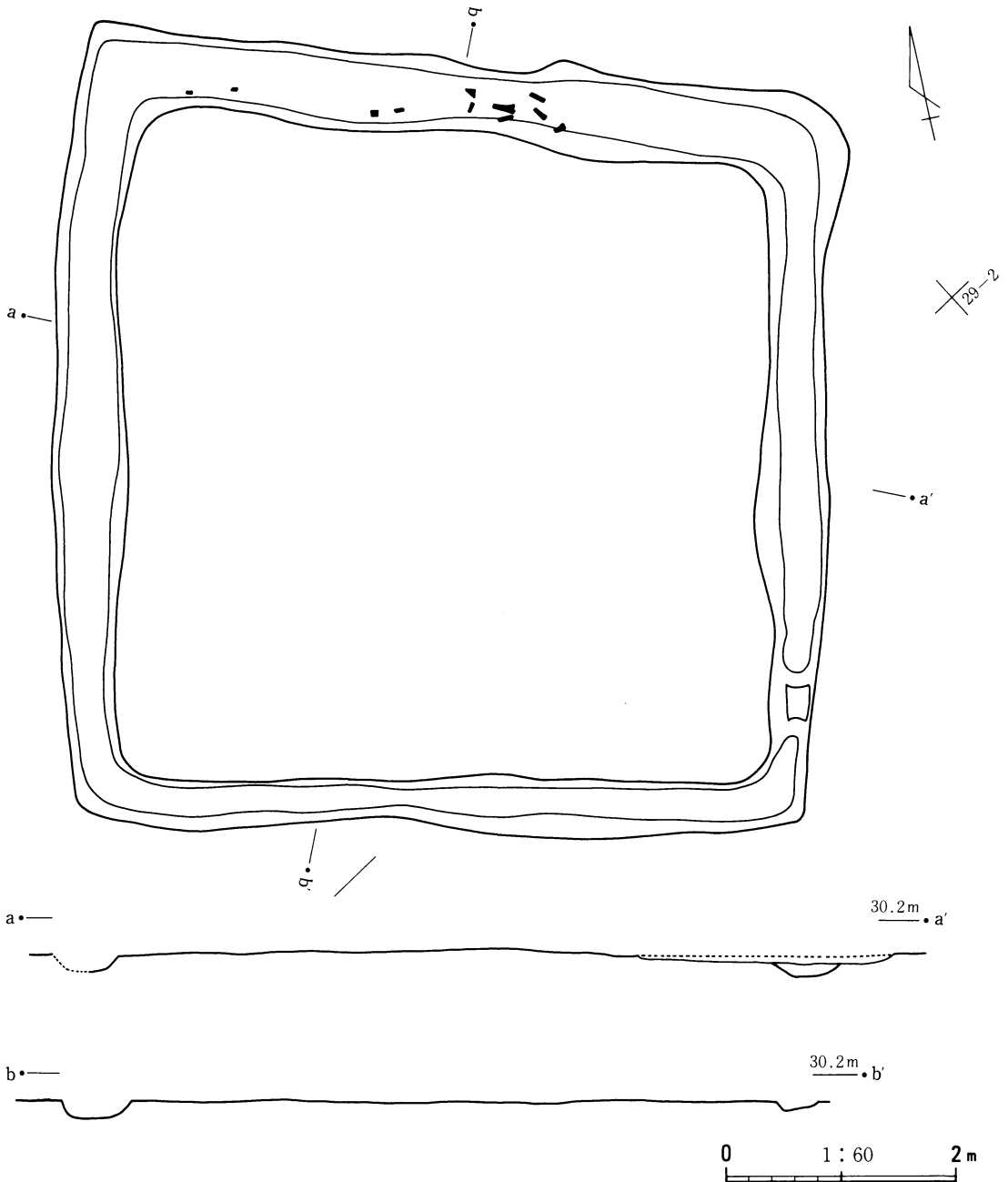
縄文時代中期の土器(1~7) 1は口縁部に連続爪形文と、沈線による文様を作る、胎土には大きな砂粒を多く含んでいる。2は地文に縄文を持ち、口縁部に沈線による文様を施す。3は微隆起線によって口縁部に無文帯を作っている。4, 5は地文の縄文を沈線によって区画し、磨り消し無文帯を作っている。6は地文の縄文を微隆起線によって区画し、磨り消し無文帯を作っている。

縄文時代後期の土器(8~23) 8は文様が縄文のみの小形の深鉢。9, 18は地文を持たず、沈線のみで文様が構成されている。10~16は地文に縄文を持ちその上に沈線で文様を加えている、沈線による文様は、平行沈線・わらび手・うずまき、など多様である。17は隆帯によって区画されている、隆帯上には「きざみ目」はない、地文の縄文と沈線文を合わせ持つ。19, 20は櫛歯状工具による細い平行沈線文を施文する、地文は持たない。21, 22は細い沈線とそれによって区画された、ていねいな磨り消し無文帯を文様としている。23は荒い縄文を地文とし、半截竹管様の工具で平行沈線文を加えている、粗製の深鉢であろう。



第46図 グリッド出土の遺物

3. 奈良・平安時代



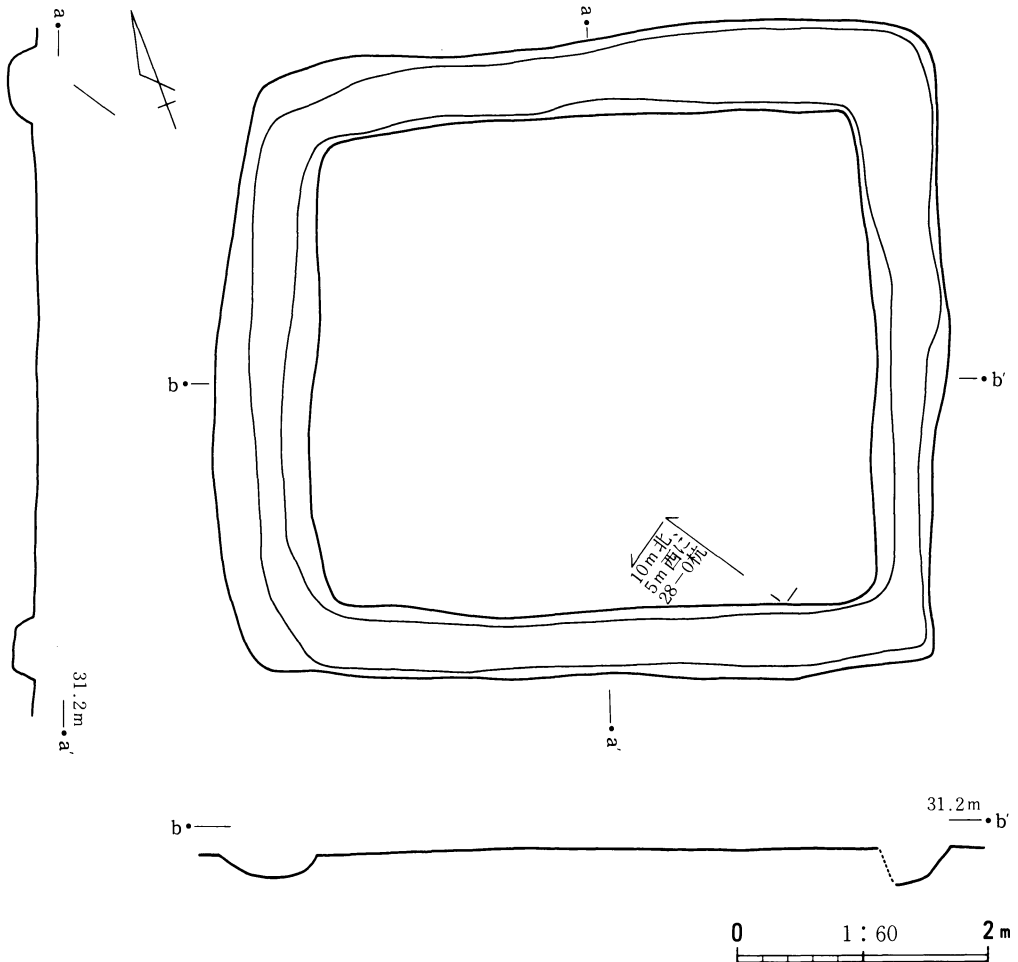
第47図 6(001)号跡実測図

6(001)号跡 (第47図, 図版22)

いわゆる方形周溝状遺構である。発掘調査区域の北東側中央の台地平坦部で検出された。確認面の標高は29.9~30.0 m ほどである。

平面形は南北6.3~6.7 m 東西6.3~6.7 m のゆがんだ正方形で、推定主軸方向は北-14°-東前

後（もしくはこれに直交）である。溝は幅が30～70 cm、深さが10～20 cmほどで断面は浅いU字状、全体的な傾向としては、南側部分の幅がせまく、深さも浅い。南東部の隅のやや北寄りの溝底部は若干、高くなっている。北側の溝の内側から中央部にかけて、底面近くで炭化材が検出されており注目される。溝の覆土は基本的に暗褐色土で上層にローム粒を比較的多く含んだ土、下層に黒色土ないしは炭化材を含んだ土である。

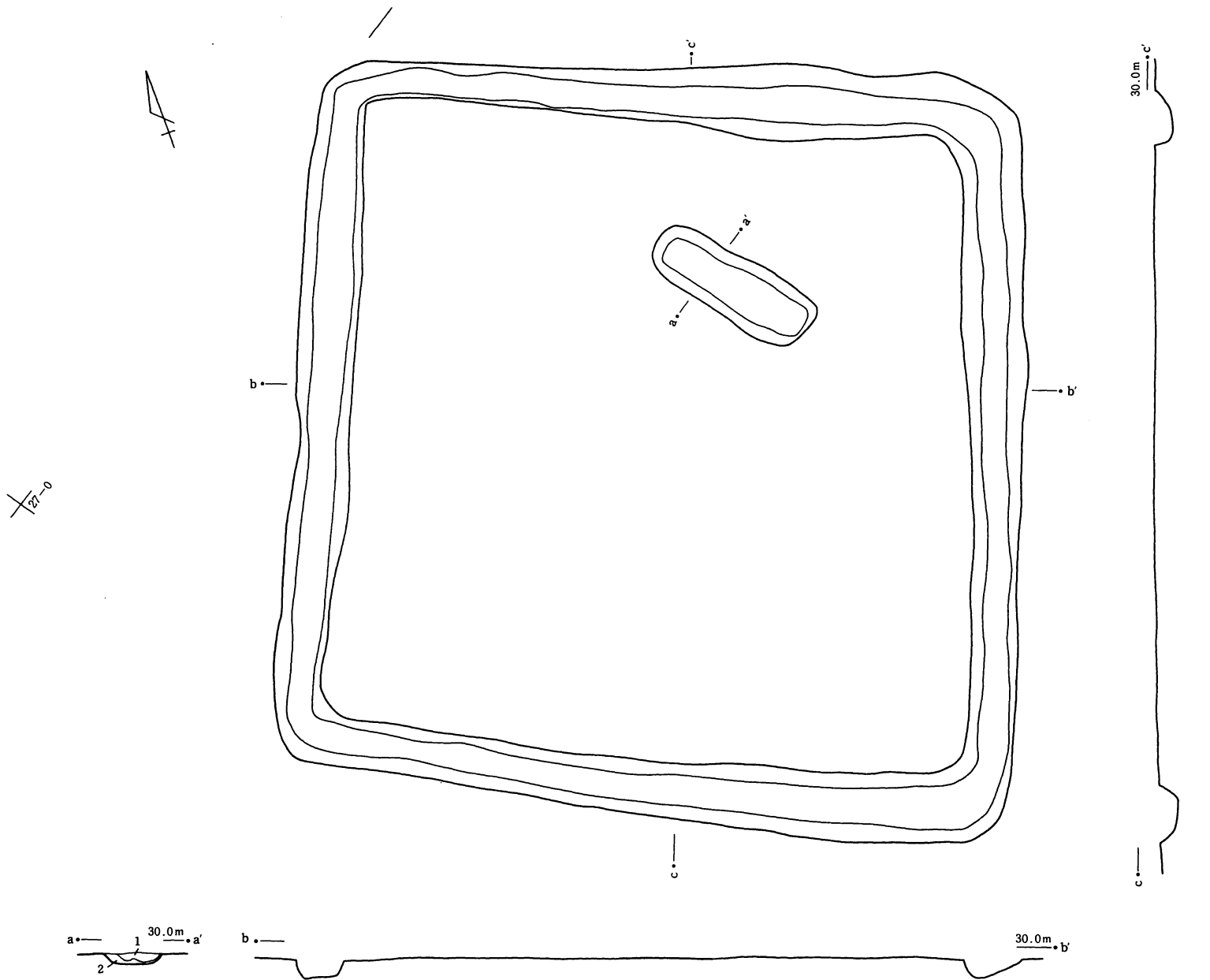


第48図 7(002)号跡実測図

7(002)号跡 (第48図, 図版22)

いわゆる方形周溝状遺構である。台地中央部センター杭28-0の南東約3 m前後で検出された。遺構検出面の標高は、およそ30.0 mである。

平面形は、南北4.3～5.0 m、東西5.5～5.7 mほどの長方形で長軸は北-71°-西前後である。溝の幅は40～80 cm、また検出面から溝底面までの深さは、20～25 cmでほぼ一定である。溝の断面はU字状、ないしは、すり鉢状に近いU字状で、北西側、南東側の溝の方が立ち上がりやすいやかである。



- a•— 1 30.0m •a'
 2
 b•—
1. 暗褐色土 ローム粒が少し混じる
 2. 黄褐色土 1層が少し混じる

第49図 8(003)号跡実測図

0 1:60 2m

溝の覆土は暗褐色土を基本とし、全体にローム粒や黄褐色土の混入が著しい。中心部に近いところでは黒褐色土が若干みられる。

8 (003) 号跡 (第49図, 図版23, 24)

方形周溝状遺構である。

調査区域のほぼ中央東より、センター杭27-0, 27-2附近で検出された。遺構確認面は29.7～29.9 m ほどで、北から南へ向かって、ゆるやかに下る斜面となっている。

平面形は南北8.4～9.2 m, 東西8.4～8.8 m ほどの南東側の角がややふくらんだ正方形で今回の調査で発見された方形周溝状遺構の中で最も大きい。推定主軸方向は北-23°-東前後、溝の幅はおよそ0.6～1.0 m, 北東側の隅付近でやや広がる傾向がある。検出面から溝底部までの深さは15～25 cm, 斜面の高低に関係なく、ほぼ一定している。溝の覆土はローム粒及び黄褐色土を含む暗褐色土, 黒褐色土を基本とする自然埋没土である。

溝の区画の内側に盛土を発見することはできなかった。主体部と思われる土壌が区画の内側、北東角に近いところで検出されている。この土壌は長径2.1 m, 短径0.7～0.8 m ほどの長円形の土壌で、長軸は北-41°-西前後である。検出面から、底面までの深さは15 cm と浅い。底面から検出面への立ち上がりは、ゆるやかである。覆土は周溝内と同じように黄褐色土を含む暗褐色土が基本となっている。遺物、埋葬施設の痕跡などは検出できなかった。この土壌が、本方形周溝状遺構の主体部となるかどうかを決定する資料は足りないと言わざるを得ないが、仮に、主体部だとすれば木棺直葬の可能性が高いと思われる。

時期を決定できる遺物は発見することが、できなかった。

9 (004) 号跡 (第50図, 図版24)

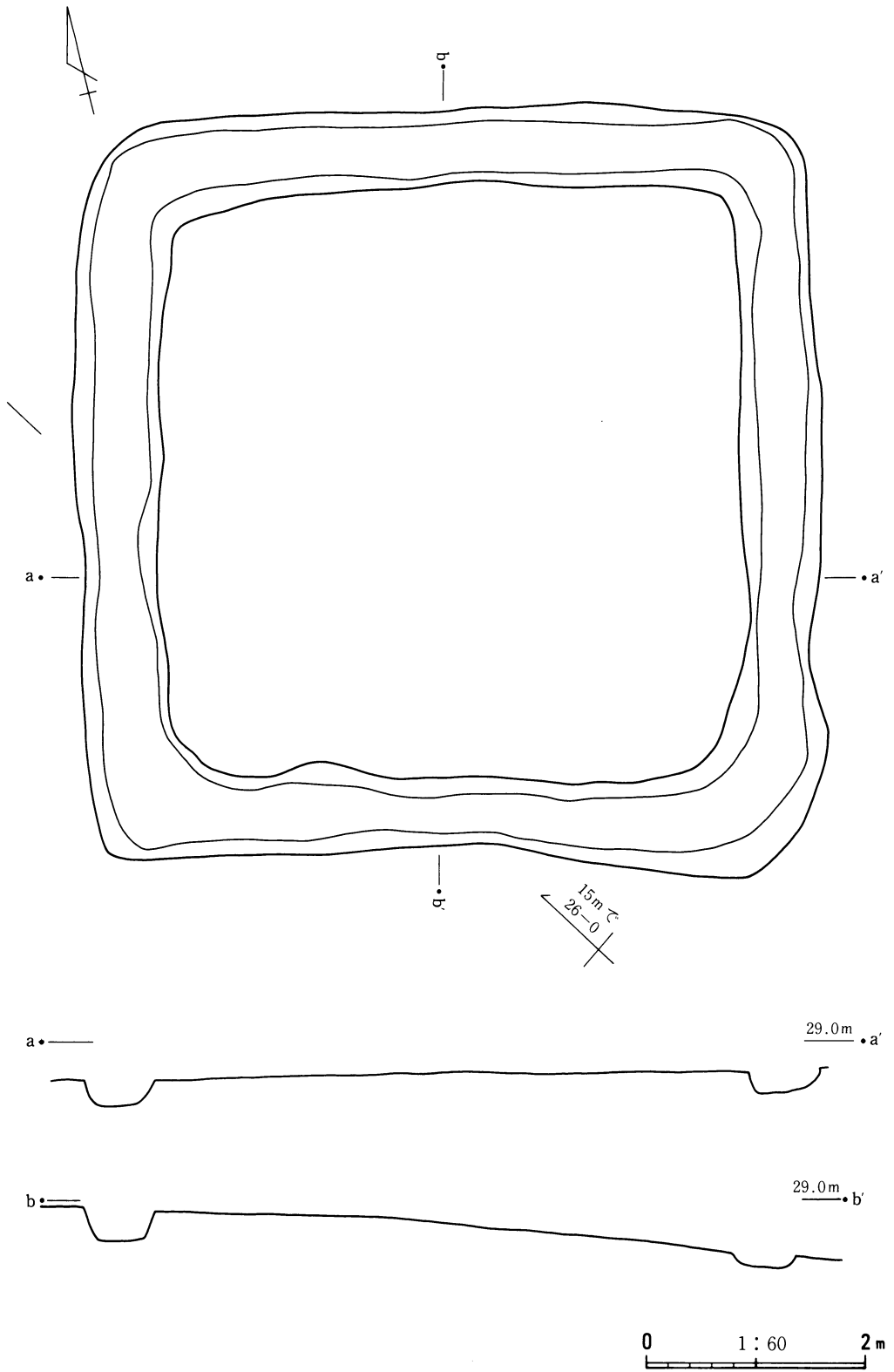
方形周溝状遺構である。

調査区域の中央、南東側センター杭26-0から南へ8 m ほどのところから検出された。確認面の標高は28.5～29.0 m ほどで北東側が最も高く、南へ行くにつれて次第に低くなる。

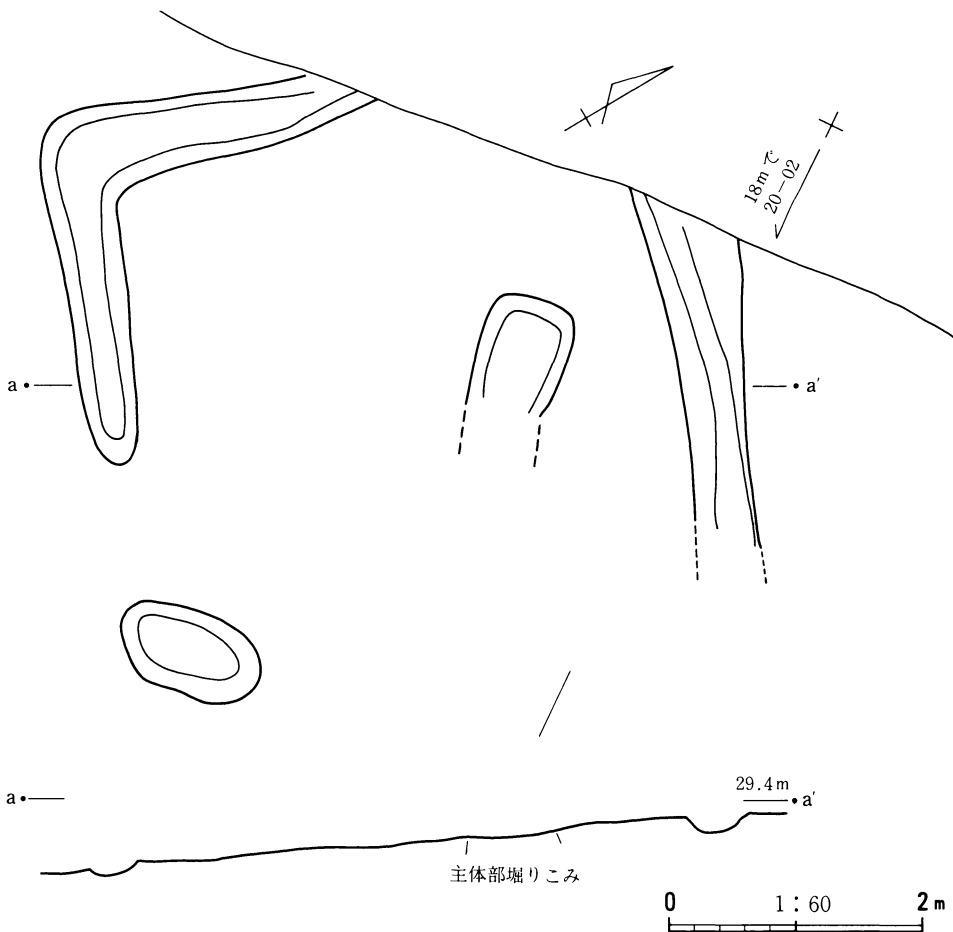
平面形は南北径、東西径ともに6.5 m ほどの整った正方形である。主軸は北-13°-東を示している。溝は全周しており、幅は0.6～0.8 m で南側で若干乱れるが、他はほぼ一定である。検出面から溝の底面までの深さは10 cm～30 cm ほどで南側ほど浅い。覆土は自然埋没土と思われローム粒を含む軟質の黒色土が主体をしめる。底面近くには漸移層と思われる、ローム粒を多く含んだ褐色土があり、さらに黒色土との間にはローム粒を含む暗褐色土があって、これらの2層は比較的しまっている。

区画の内側、溝内には盛土、埋葬施設等の痕跡を発見することはできなかった。

時期を決定できる遺物は一つもなかった。



第50图 9(004)号迹实测图



第51図 10(005)号跡実測図

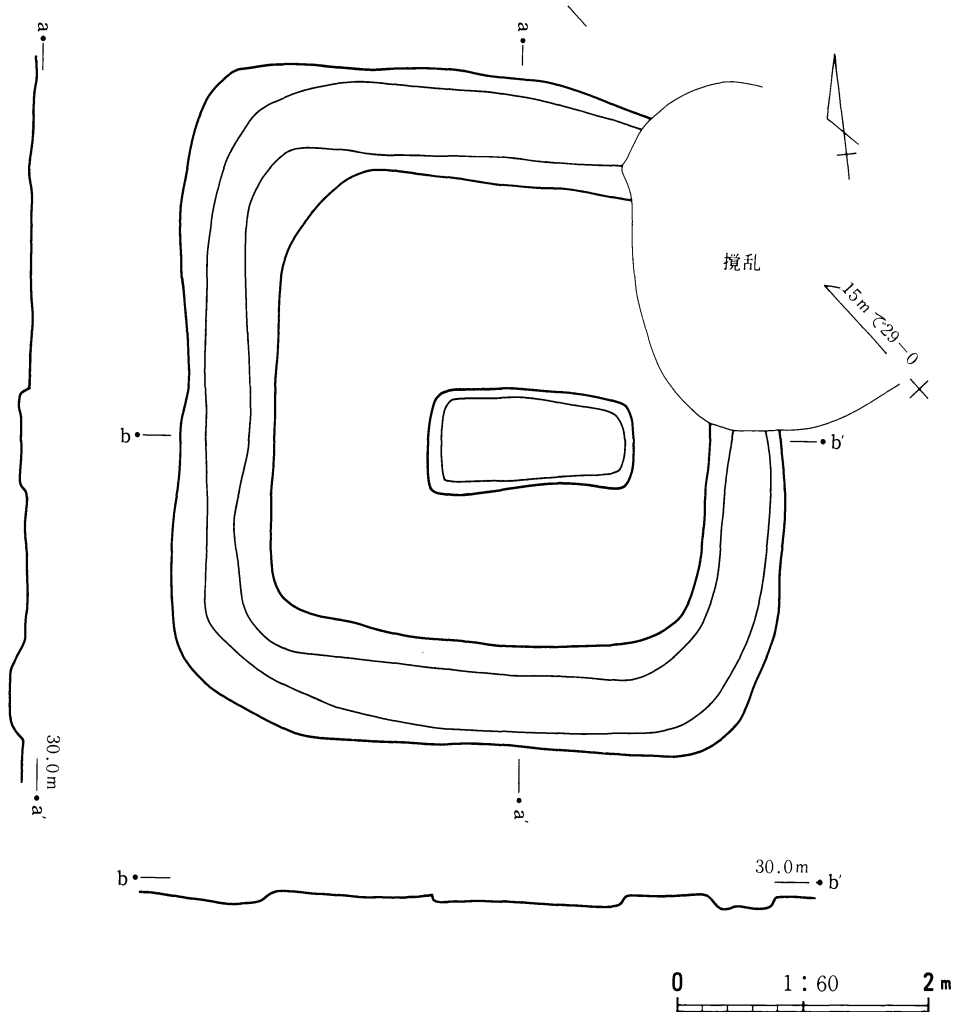
10 (005) 号跡 (第51図, 図版25)

方形周溝状遺構である。調査区域の西側、センター杭20-2より北へ15 m ほどの位置で検出された。遺構確認面の標高は、およそ28.6~28.8 m で北西側が低い。

本遺構は北側の隅の部分が調査区域外にあり、東側は攪乱がひどく原形をとどめていない。

平面形は南北径が5.2 m, 東西径は南側の土壌をコーナー部の掘りこみと考えれば、推定で5 m 前後と思われる。形状は正方形に近いものとなろう。推定される主軸方向は北-67°-西前後である。周溝は東側が切れているが、これが原形とは考えがたく、おそらくは全周するものと思われる。残っている部分についてみれば50~80 cm, 検出面から溝底面までの深さは5~20 cm ほどで南側の方が浅い。

区画の内側から主体部と思われる土壌が、1基発見されている。長径は不明(現在残っている部分は80 cmほど)短径は70 cmほどで長方形、ないしは長円形になるものと考えられる。長軸方向は北-40°-西前後を示している。検出面から底面までの深さは浅く5 cmほどしかない。遺物や埋葬施設の痕跡等は発見されなかったが、この土壌が主体部と仮定すれば、木棺直葬であった可能性が高い。周溝及び、区画内から時期を決定できる遺物は発見できなかった。



第52図 11(009)号跡実測図

11 (009) 号跡 (第52図, 図版25)

方形周溝状遺構である。

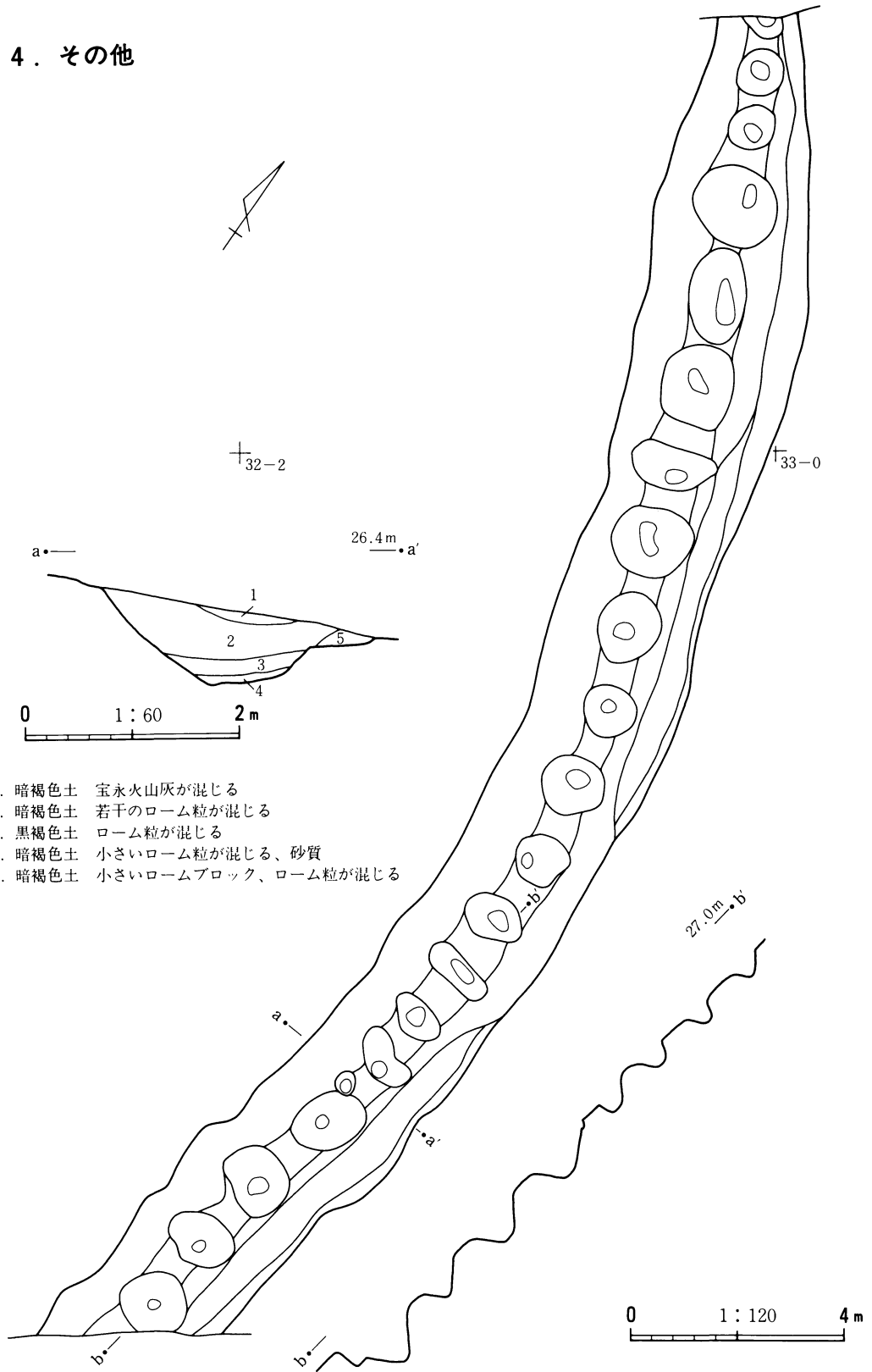
調査区域の中央やや東寄り, センター杭29-0から南へ13 m ほどの所に位置している。検出面の標高は30.0 m 前後, ほぼ平らである。

平面形は南北5.2 m, 東西4.8 m 前後の正方形で, 本遺跡の他の方形周溝状遺構と比べるとやや小形で四隅が丸味を持っている。主軸方向は北-78°-西前後を示している。北東部分が攪乱によって失われているが周溝は全周するものと思われる。溝の幅は70~100 cm ほどで周溝各辺の中央部がやや狭くなっている。検出面から底溝面までは5~10 cm ほどである。

周溝で区画された内側には主体部と思われる土壌が一基発見された。長径が1.6 m, 短径が0.7~0.8 m の方形の土壌で長軸をほぼ南北の周溝に平行するような形で, 周溝区画内の中央やや南東寄りに位置している。検出面からの深さは5~10 cm と浅かった。

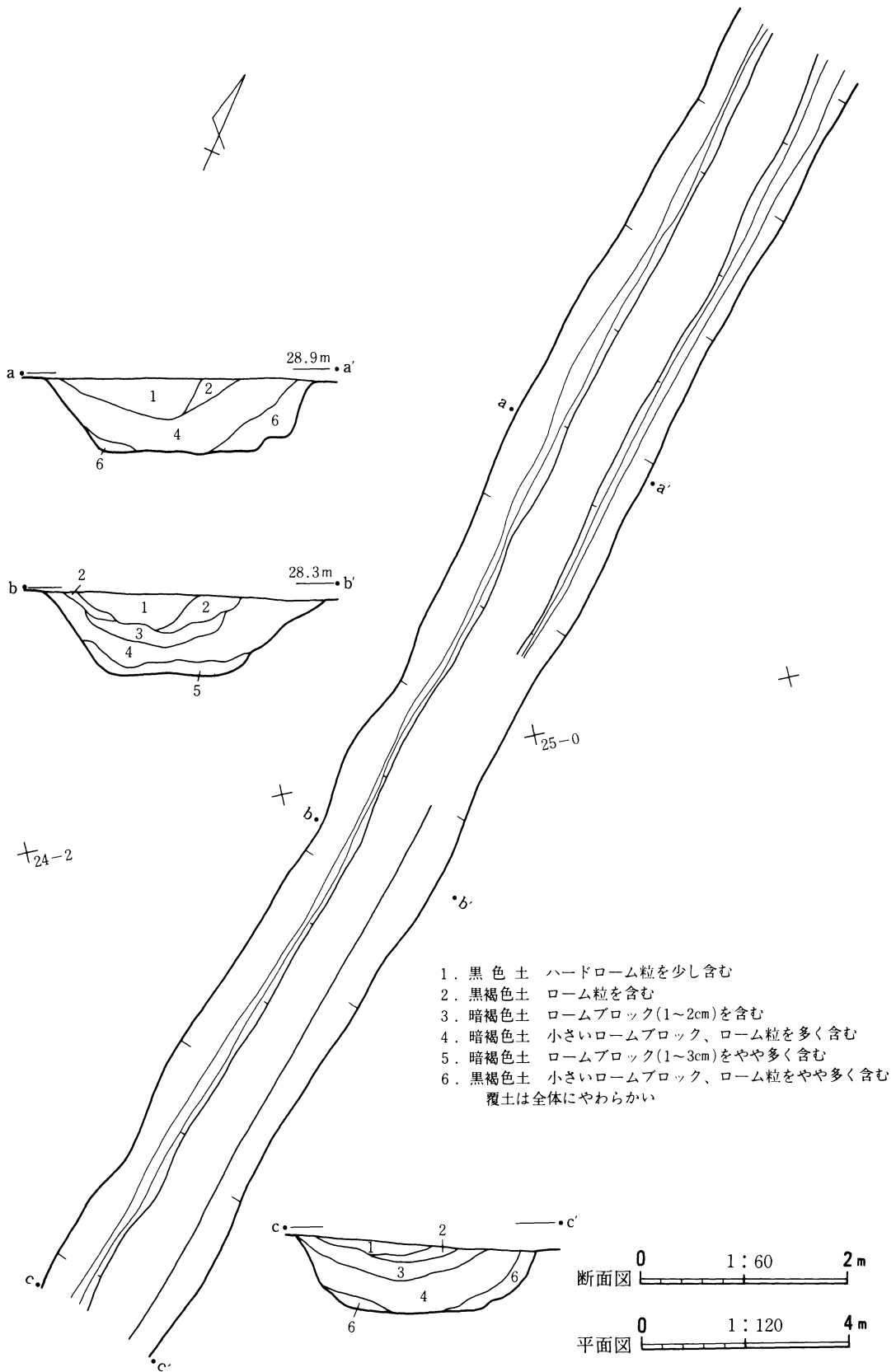
周溝, 土壌内から時期の決定できる遺物や埋葬施設の痕跡を発見することはできなかった。

4. その他



1. 暗褐色土 宝永火山灰が混じる
2. 暗褐色土 若干のローム粒が混じる
3. 黒褐色土 ローム粒が混じる
4. 暗褐色土 小さいローム粒が混じる、砂質
5. 暗褐色土 小さいロームブロック、ローム粒が混じる

第53図 12(006)号跡実測図



第54図 13(007)号跡実測図

12 (006) 号跡 (第53図, 図版26)

溝状遺構である。

調査区域の東端, 道路センターを直交するような形で検出された。遺構確認面の標高は25.9~27.2 m ほどで北側ほど低い傾向がある。

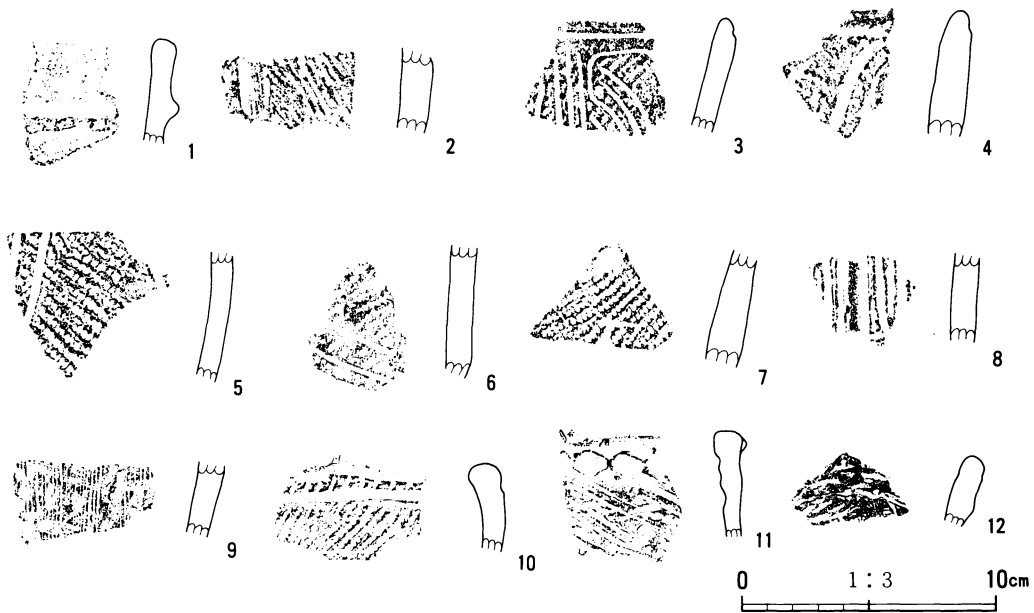
本遺構は南端・北端がともに調査区域外に延びており, 今回の調査で検出されたのは30 m 弱で全長は不明で溝の幅は1.6~2.8 m ほどで北側に行くに従って狭くなるが平均して2.5 m ぐらいである。

13 (007) 号跡 (第54, 55図, 図版26, 27)

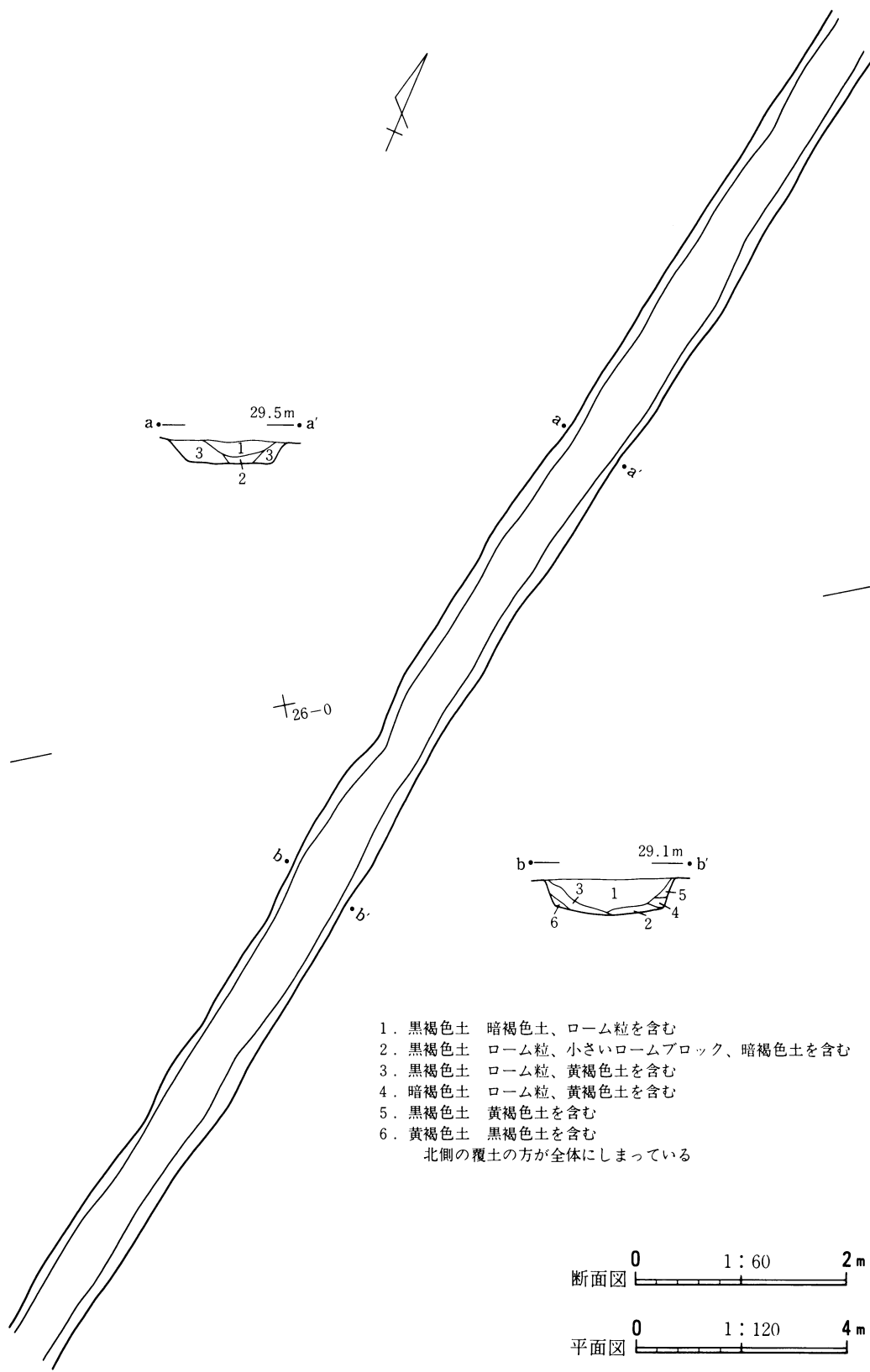
溝状遺構である。

調査区域のほぼ中央を南北に横切っている。後述する14 (010) 号跡と平行する位置にある。確認面の標高は北端が29.4 m, 中央部28.5 m 前後, 南端は27.3 m ほどで北側ほど高い。また溝の東側の方が西側より高い。

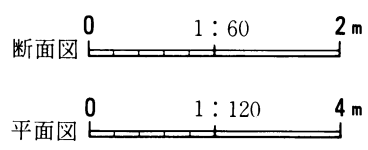
今回の調査による本遺構の検出部分は約29 m だが南端, 北端はともに調査区域外に延びており全長は不明である。溝はだいたい南北方向にほぼ直線的に走っている。溝の幅は2.5~2.7 m ほどで一定している。確認面から溝の底面までの深さは60~90 cmで確認面との関係から溝の東側の方が深い。また, 北端と南端では南端が低く, その比高差は1.9 m にもなる。溝は西側の底面近くに段がついたような掘り込み方となっている。東側にも北寄りの部分で同様の段が確認された。溝の断面は逆台形に近い形を示し立ち上がりも明確で全体としては, しっかりと掘られた印象を受ける。覆土は全体に柔らかい。



第55図 13(007)号跡出土遺物



- 1. 黒褐色土 暗褐色土、ローム粒を含む
 - 2. 黒褐色土 ローム粒、小さいロームブロック、暗褐色土を含む
 - 3. 黒褐色土 ローム粒、黄褐色土を含む
 - 4. 暗褐色土 ローム粒、黄褐色土を含む
 - 5. 黒褐色土 黄褐色土を含む
 - 6. 黄褐色土 黒褐色土を含む
- 北側の覆土の方が全体にしまっている



第56図 14(010)号跡実測図

遺物は縄文土器が多かった。本遺構と直接は関係ないと考えられるが、主な物を図示しておく。

14 (010) 号跡 (第56, 57図, 図版28)

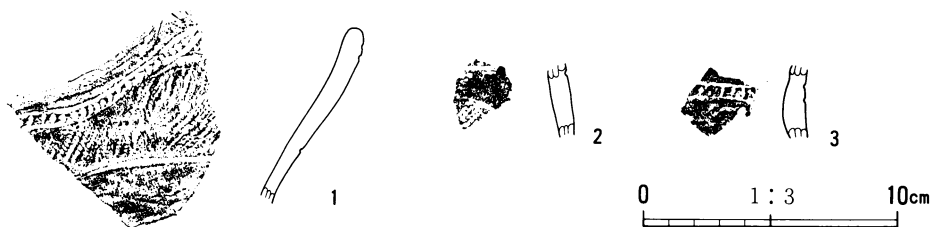
溝状遺構である。

調査区域の中央をほぼ南北に横切っている。

9 (004) 号方形周溝状遺溝のすぐ西に位置する。確認面の標高は北端が最も高く29.7 m, 中央部は29 m 前後, 最も低い両端は28.1 m ほどである。

本遺構の南端, 北端はとともに調査区域外にあると考えられ, 全長は不明である。(今回の調査による検出分は約31 m である。)溝はほぼ南北方向に一直線に走っている。溝の幅は1.0~1.4 m, 確認面から溝底までの深さは平均して20 cm前後, 確認面と同じように北端が高く, 南端が低い。(その比高差は約1.6 m)。溝の断面は, 底面が明確でなくゆるやかに立ち上がる浅いすり鉢状の部分と, 比較的しっかりと角度をもって立ち上がる部分とがある。

決め手となる遺物は発見されず, 時期, 性格は不明である。

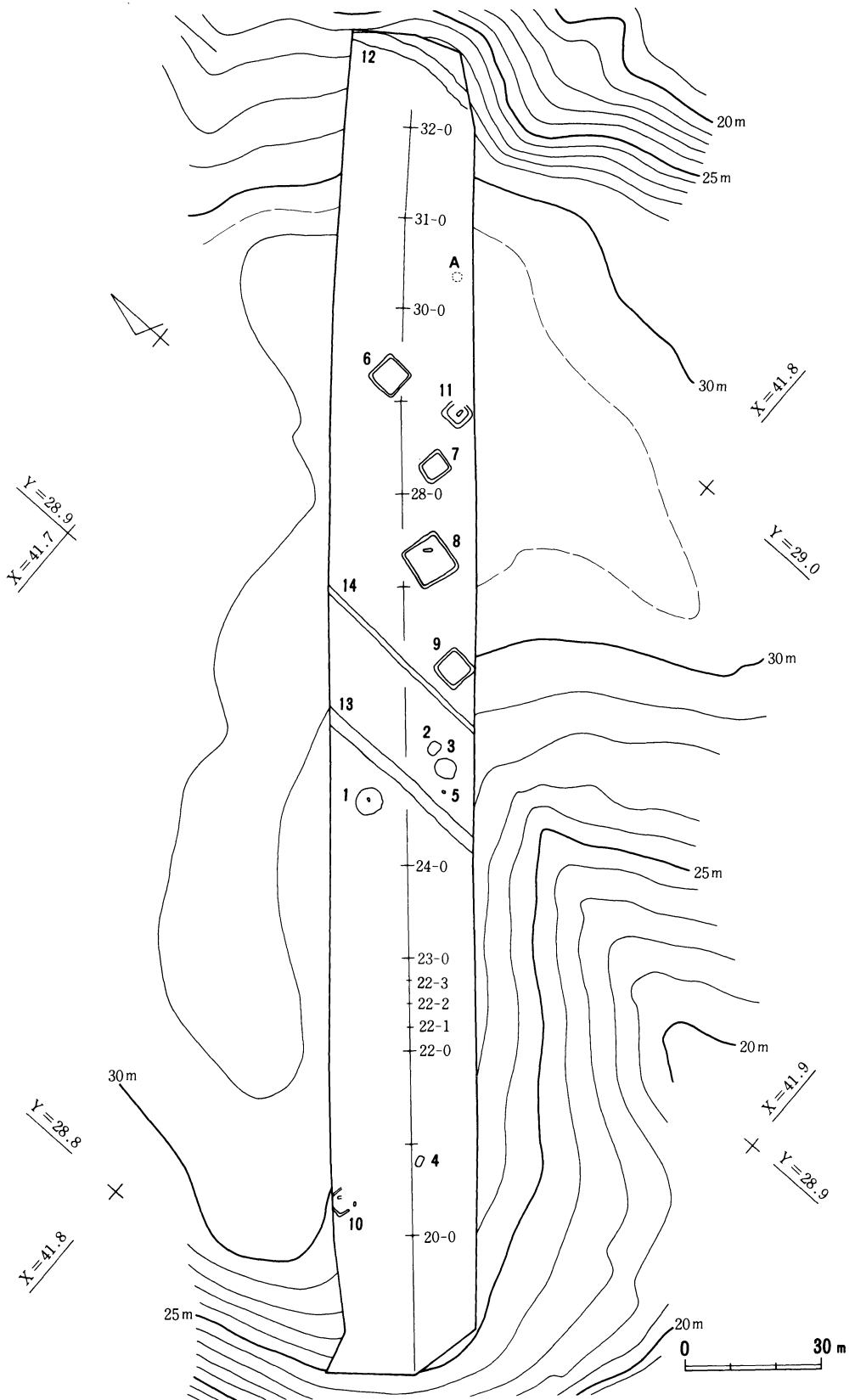


第57図 14(010)号跡出土遺物

5. まとめ

谷津上遺跡から検出された遺構は, 礫群が1地点, 竪穴住居跡が2軒, 小竪穴が1基, 埋甕が1基, 土壙が1基, 方形周溝状遺構が6基, 溝が3条の計15遺構であった。

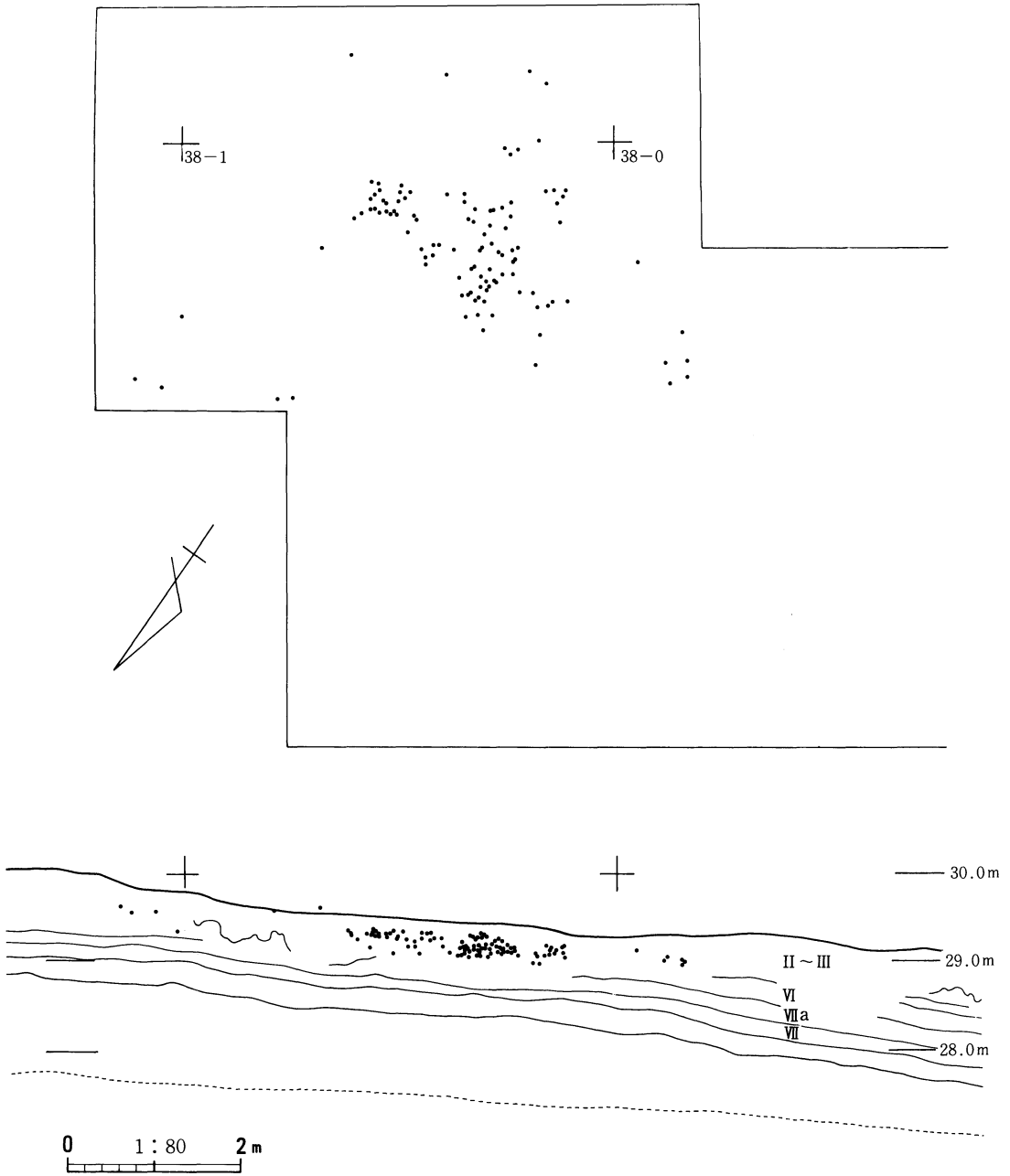
このうち礫群は関東ローム層のⅢ層を中心に検出された。比較的, 原形を保っているものが多く, 接合関係の検出も多かった。この礫群はその出土層位から, 先土器時代のものと考えられる。竪穴住居跡2軒は, 縄文時代中期の加曾利EⅡ式に属する3(014)号跡と後期の堀之内Ⅰ式と思われる1(008)号跡である。この2軒を含め, 縄文時代の遺構は調査区の中央に集中しているが, 集落がどのように広がっていくのかは, はっきりしなかった。方形周溝状遺構は10(005)号跡を除いて調査区の中央東側にまとまっている。しかし群の構成は調査区域外も含めてなされているものと推定される。



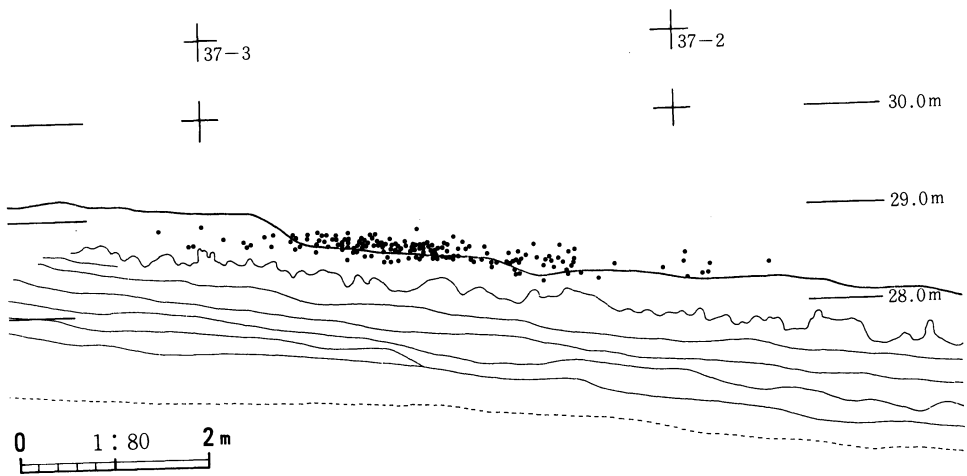
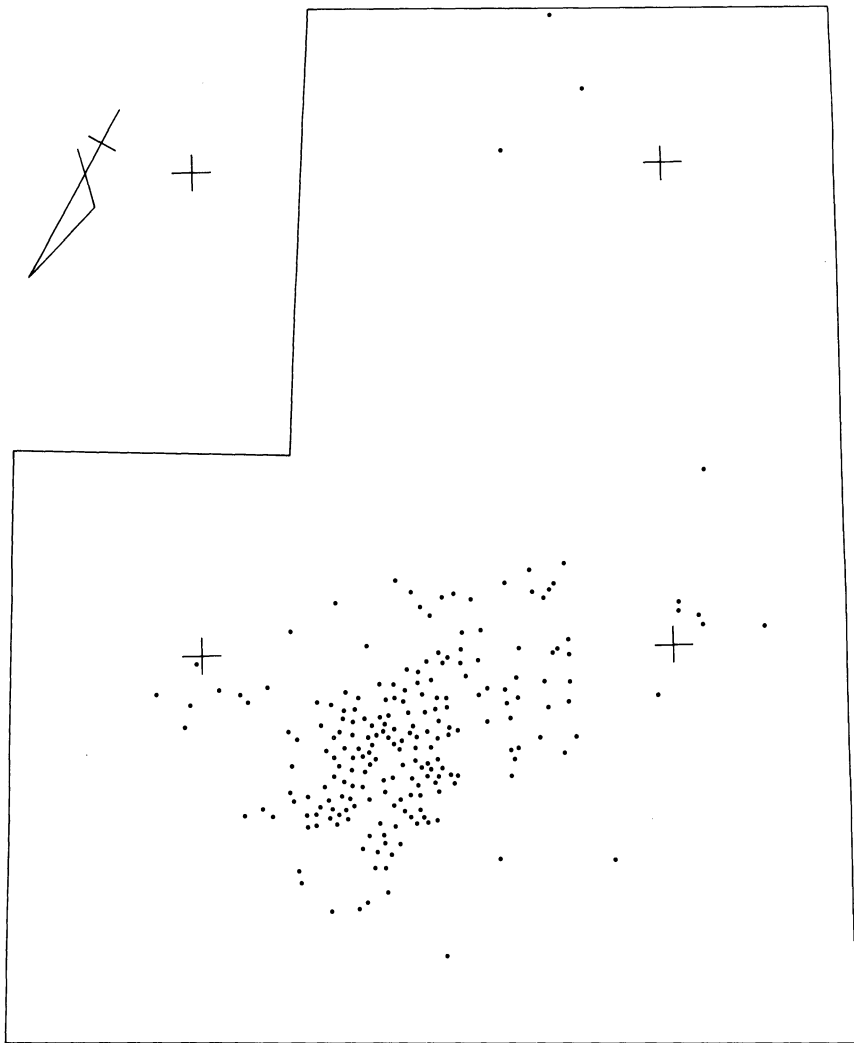
第58図 遺構配置図

III章 須^す摩^ま堀^{ほり}遺跡

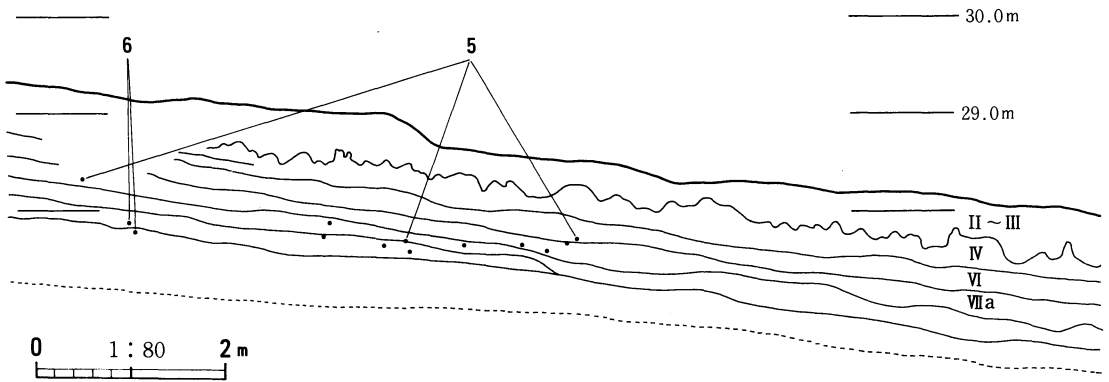
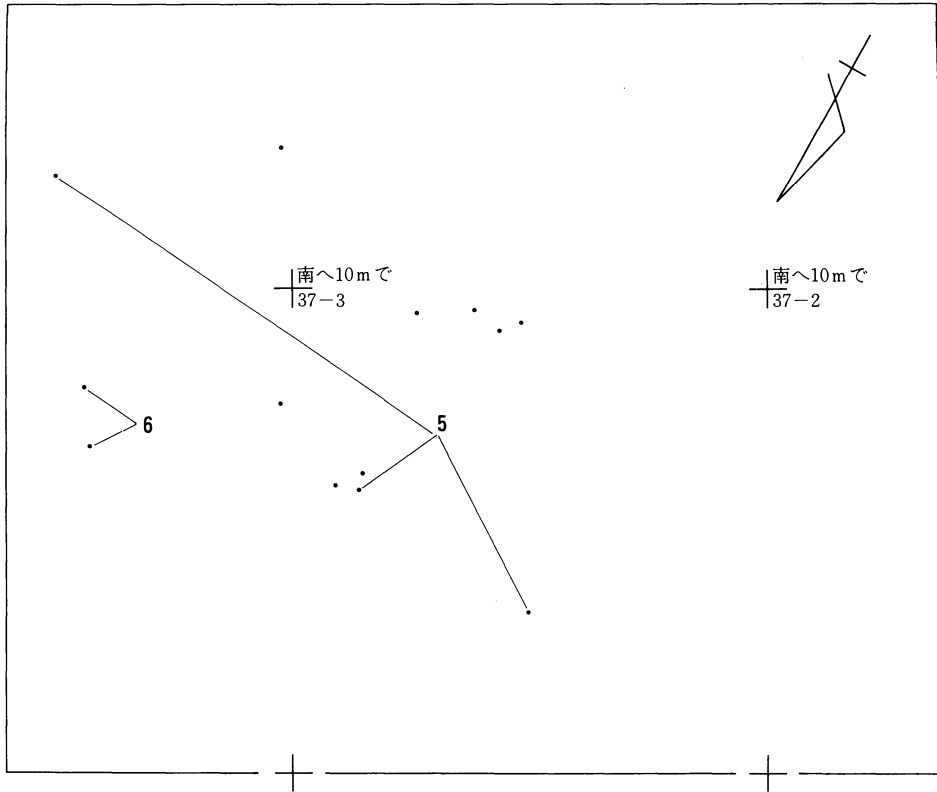
1. 先土器時代



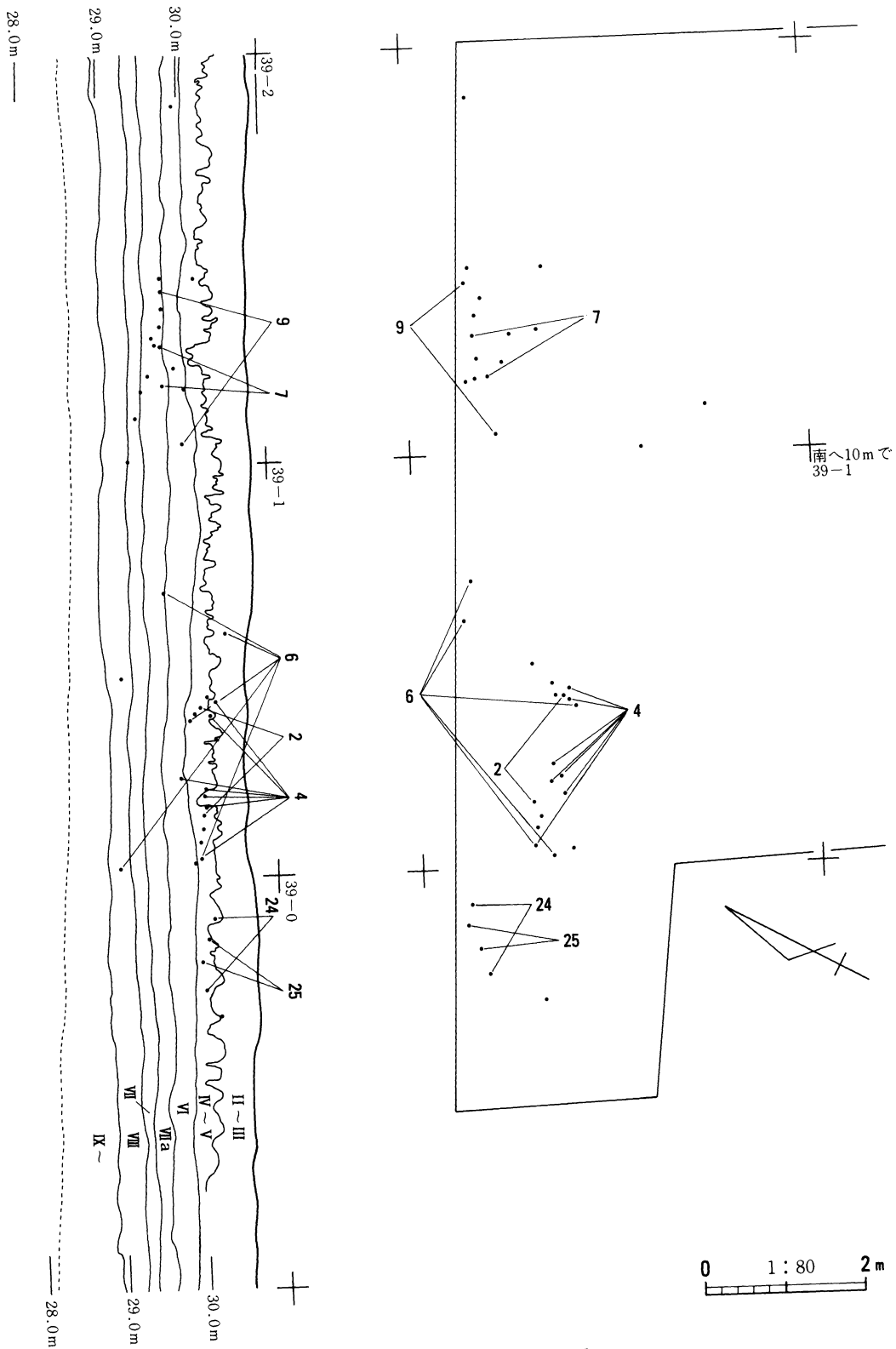
第59図 Aブロック遺物分布図



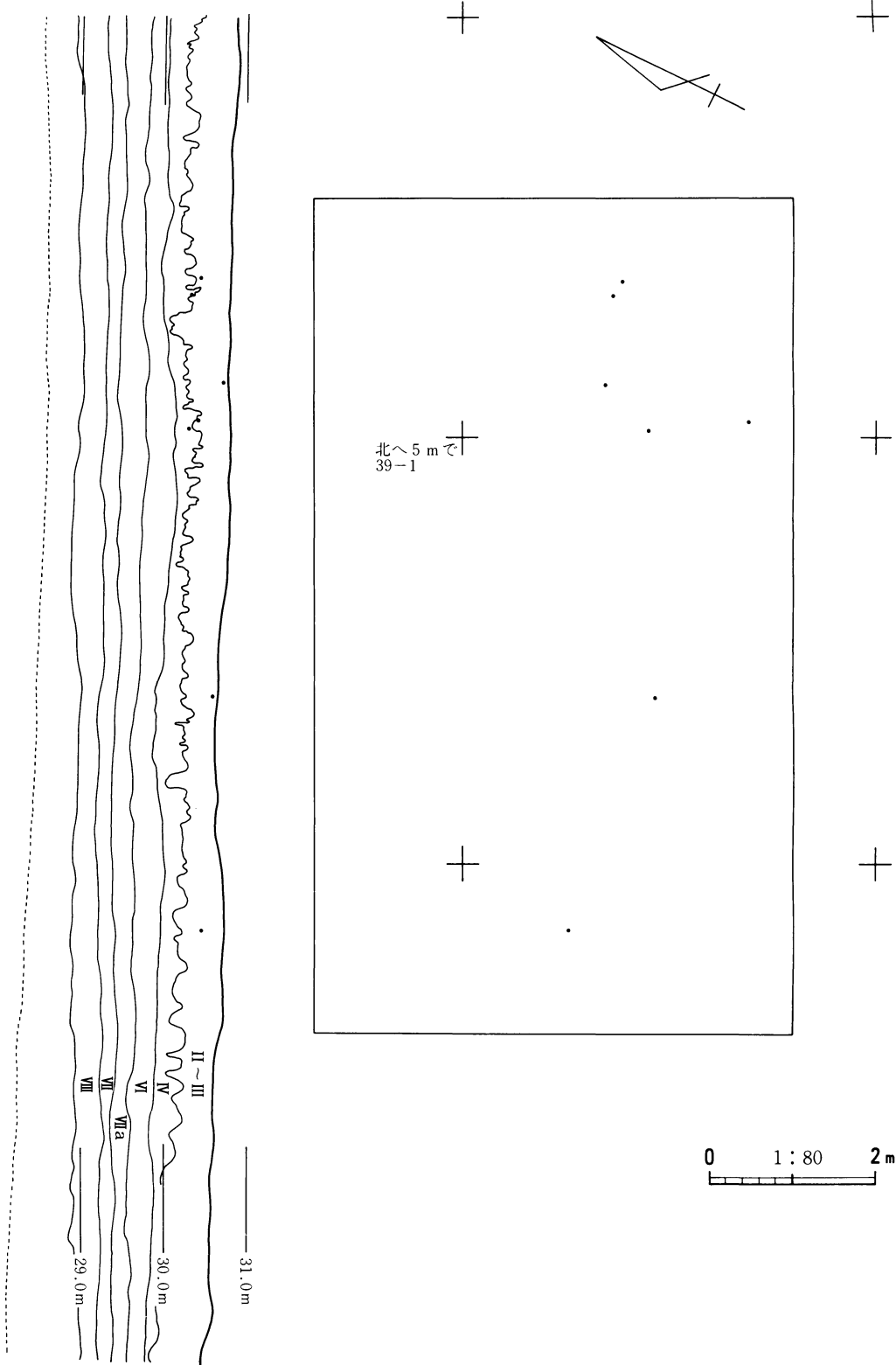
第60図 Bブロック遺物分布図



第61図 Cブロック遺物分布図



第62図 Dブロック遺物分布図



第63図 Eブロック遺物分布図

Aブロック (第59図, 図版29, 34, 35)

調査区域西側で検出された。遺物の分布は8 m×4 mほどの範囲に及ぶが、中心の3 m×3 mは特に集中している。出土層位はII～V層に及んでいるが、その中心はIII層の上面からIV層にかけてと考えられる。接合資料は23例抽出したが、このうち4例はBブロックと接合している。

Bブロック (第60図, 図版29, 35, 36, 37)

調査区域の最も南側のゆるやかな斜面上で検出された。6 m×4 mほどの範囲に集中している。出土層位はII層からIV層に及ぶが、その中心はIII層と考えられる。遺物の総数は230点ほどで、そのほとんどが礫と礫片である。接合資料は38例で2点から6点の接合である。

Cブロック (第61図, 図版30, 37)

調査区域の北西側で検出された。遺物の分布は5 m×5 mほどの範囲に及ぶが散漫な分布である。出土層位は一見VII層中であるかのように見えるが、これは自然地形が北西に向かって傾斜しているためで、調査時の観察によればIII～IV層中である。接合資料は2例が抽出された。2点と3点の接合である。

Dブロック (第62図, 図版30, 38)

調査区域の北側、台地平坦部の縁の部分から検出された。遺物は東西9 m、南北3 mの範囲に分布している。ただし北側は区域外へも延びている可能性が強く、さらに広がるものと思われる。また本ブロックは2～3の小ブロックに分けられると考えられるが便宜的に1つのブロックとして扱うこととする。出土層位は東側の部分はVII層、西側部分はIV～V層に分布するものが多い傾向がある。しかし、レベル差が大きく中心となる層位を確定することはできなかった。接合資料は7例が抽出された。東側は2例で2点の接合、西側は5例で2～7点の接合である。東西間の接合は認められない。

Eブロック (第63図, 図版31, 38)

調査区域の南東側、台地平坦部で検出された。建物は8 m×2 mほどの範囲に極めて散漫に分布する。しいて言えば東側の部分に集中する傾向がある。出土層位はII層からIV層の上面にかけて分布している。

第4表 礫群構成礫一覧

Aブロック(1)

No	遺物番号	法 量			石 質	遺存状態				焼 ス ス	備 考
		長径	短径	重量		A	B	C	D		
1	1	3.4	2.7	16.1	チャート			○		○	
2	3+29+54+79+113	4.9	4.9	56.1	チャート			○		○	
3	4	4.0	2.3	18.4	砂 岩			○		—	
4	5	3.3	2.2	6.9	砂 岩				○	○	
5	6+103+109+110+120	7.7	4.8	126.6	砂 岩		○			○	
6	7	4.3	2.3	19.4	砂 岩			○		○	
7	8+12	4.6	2.7	19.4	泥 岩			○		○	
8	9+10+52+B34+B44	8.2	4.7	90.2	ホルンフェルス			○		○	Bブロックと接合
9	11	2.4	1.4	3.9	チャート				○	—	
10	13+33+86	7.6	3.5	69.1	砂 岩		○			○	
11	14+76	3.6	2.5	8.4	チャート			○		○	
12	15+20	5.4	4.1	72.6	砂 岩			○		○	
13	16	4.7	3.9	33.3	砂 岩			○		○	
14	17	3.5	1.9	11.8	チャート				○	—	
15	18+87	4.3	3.2	24.3	凝 灰 岩			○		○	
16	19	7.1	6.0	206.4	泥 岩	○				○	
17	21+51+83	6.2	4.3	66.2	凝 灰 岩			○		○	
18	22	2.5	2.4	9.0	砂 岩				○	○	
19	23	3.3	1.4	10.9	チャート				○	○	
20	24	3.8	2.8	15.1	チャート				○	○	
21	25+78	3.5	2.8	20.6	チャート			○		○	
22	26+37+50+62+104	5.1	4.4	57.3	砂 岩		○			○	破片によって色が違う
23	27+75	3.6	3.0	23.3	チャート			○		○	
24	28+B193	5.5	2.6	47.2	チャート			○		○	Bブロックと接合
25	30+34+70+88+121	6.2	4.9	83.7	砂 岩			○		○	
26	31	8.9	6.3	150.3	砂 岩			○		○	
27	32	2.2	1.5	4.2	チャート				○	○	
28	35+84	5.6	3.9	44.2	石英斑岩			○		○	
29	36+39+74+B13+B91	7.8	5.1	125.4	砂 岩		○			○	Bブロックと接合
30	38	6.4	3.6	66.2	礫 岩	○				○	
31	40	1.6	1.1	1.5	チャート				○	○	
32	41+114+B81	5.4	4.1	69.6	砂 岩		○			○	
33	42+61	6.6	4.5	76.0	泥 岩		○			—	
34	43+85	5.7	3.5	45.5	ホルンフェルス		○			○	
35	44	2.7	2.3	9.2	砂 岩				○	○	
36	45	3.5	2.5	12.0	砂 岩				○	○	
37	46	3.3	2.4	13.8	砂 岩				○	○	
38	47	3.9	3.7	42.7	チャート			○		○	2片接合
39	48	3.3	2.0	6.6	砂 岩				○	○	
40	49+57+73+96+117	5.9	5.1	64.8	チャート		○			○	

Aブロック(2)

No	遺物番号	法 量			石 質	遺存状態				焼 礫	ス ス	備 考
		長径	短径	重量		A	B	C	D			
41	53	3.5	2.0	9.6	ホルンフェルス				○	○		
42	55	3.6	2.6	11.9	砂 岩				○	○		
43	56	1.2	1.0	0.3	頁 岩				○	×		
44	58	1.4	1.0	0.4	頁 岩				○	×		
45	59	3.5	3.0	12.6	砂 岩				○	○		
46	60	3.9	2.2	13.1	チャート				○	○		
47	63+B137	5.3	3.1	58.6	砂 岩		○			○		Bブロックと接合
48	64	1.8	1.2	0.5	頁 岩				○	×		
49	65	4.7	4.7	81.2	礫 岩	○				○		
50	66	—	—	5.0	軟質砂岩				○	○		細片で計測不能
51	67	4.6	3.5	54.1	砂 岩			○		○	○	
52	68	2.6	1.6	3.0	ホルンフェルス				○	—		
53	69	4.9	3.5	42.5	泥 岩			○		○		
54	71	3.4	2.5	13.2	チャート				○	○		
55	72	2.4	1.7	5.4	チャート				○	○		
56	77	2.1	1.6	1.9	砂 岩				○	○		
57	79	0.9	0.8	0.5	砂 岩				○	×		
58	80	2.4	1.8	6.1	チャート				○	○		
59	81	1.8	1.6	3.8	チャート				○	○		
60	82	1.4	1.3	1.0	チャート				○	○		
61	89+112	5.5	4.1	39.8	砂 岩			○		○		
62	90	2.8	2.4	17.6	チャート				○	○		
63	91	1.9	1.1	1.0	砂 岩				○	×		
64	92	1.5	1.1	1.3	チャート				○	○		
65	93	1.3	0.9	0.3	泥 岩				○	○		
66	94	8.1	5.3	130.1	ホルンフェルス		○			○		
67	97	3.0	2.3	7.1	砂 岩				○	○		
68	98	2.9	0.5	1.0	チャート				○	○		
69	99	1.0	0.8	0.7	チャート				○	○		
70	100	2.4	2.1	7.8	砂 岩				○	○		
71	101	6.7	6.1	119.3	凝 灰 岩		○			○		
72	102	3.2	2.3	7.1	ホルンフェルス				○	—		
73	105	1.4	1.2	1.6	チャート				○	○		
74	106	2.8	2.0	5.0	頁 岩				○	×		
75	107	2.9	1.7	6.4	チャート				○	○		
76	108+111	2.7	2.0	7.4	チャート				○	○		
77	115	5.6	4.0	61.0	凝 灰 岩			○		○	○	
78	116	1.3	1.2	1.1	砂 岩				○	○		
79	118	1.6	1.3	1.8	チャート				○	○		
80	119	2.0	1.1	0.8	砂 岩				○	○		

Bブロック(1)

No	遺物番号	法 量			石 質	遺存状態				焼 燼	ス ス	備 考
		長径	短径	重量		A	B	C	D			
1	1	2.4	1.2	1.3	チャート				○	○		
2	2+16+148	4.7	3.9	46.7	砂 岩			○		○		
3	3+35+66+138+142+173	9.1	4.8	(97.3)	ホルンフェルス		○			-		
4	4+27+85+112+200	6.1	5.1	99.0	砂 岩		○			○		
5	5	5.1	4.1	41.8	砂 岩			○		-		
6	6	5.6	4.1	135.4	砂 岩	○				-		
7	7	3.9	3.1	63.5	砂 岩	○				×		
8	8	1.8	1.1	2.3	チャート				○	○		
9	9	2.3	1.7	3.8	チャート				○	○		
10	10	3.3	2.4	13.8	頁 岩			○		×		
11	11	4.5	2.9	16.3	石英斑岩			○		○		
12	12+159	6.3	4.8	43.7	砂 岩			○		○		
13	14	6.1	5.2	154.8	石英斑岩	○				×		
14	15+38+221	4.5	2.3	28.8	泥 岩			○		○		
15	17+43+115+143+154+177	5.1	4.5	73.6	砂 岩		○			○		
16	18+52+56	2.6	2.5	12.5	砂 岩			○		○		
17	19+20	2.2	2.0	5.1	チャート				○	○		
18	21+23+177+190	4.2	1.8	13.9	チャート			○		-		
19	22	4.2	1.9	12.9	チャート			○		○		
20	24	2.0	1.6	3.1	石英斑岩				○	○		
21	25	1.2	1.1	1.1	砂 岩				○	-		
22	26	2.2	1.8	5.0	石英斑岩				○	-		
23	28	5.2	4.7	65.4	砂 岩		○			-		
24	29	1.8	1.1	1.9	チャート				○	-		
25	30+92	3.4	1.5	4.6	チャート				○	×		
26	31+108	2.9	2.3	7.4	砂 岩			○		○		
27	32+54+76+119+181	7.8	4.0	31.7	チャート			○		○		
28	33+48+226	3.6	2.5	25.2	砂 岩			○		○		
29	34	2.0	1.8	7.2	砂 岩				○	○		
30	36+109	2.7	2.3	9.3	チャート				○	○		
31	37	1.1	0.8	0.7	チャート				○	-		
32	40	3.0	2.1	20.5	砂 岩			○		○		
33	41	1.4	1.0	0.8	砂 岩				○	○		
34	42	6.5	5.3	60.2	ホルンフェルス		○			○		2片接合
35	46	1.6	1.2	0.8	頁 岩				○	×		
36	47+95	2.2	1.7	3.8	チャート				○	○		
37	49	1.1	0.8	0.2	頁 岩				○	×		
38	50	2.2	1.6	4.9	チャート				○	○		
39	51+110+111	2.7	2.6	9.1	チャート				○	○		

Bブロック(2)

No	遺物番号	法 量			石 質	遺存状態				焼 窯	ス ス	備 考
		長径	短径	重量		A	B	C	D			
40	53	3.1	1.9	6.7	チャート				○	-		
41	55+88	4.2	3.9	27.8	砂 岩			○		○		
42	57+126	4.4	3.0	35.3	ホルンフェルス			○		×		
43	58	2.2	2.2	6.4	石英斑岩				○	○		
44	59	2.3	1.6	3.9	石英斑岩				○	○		
45	60	3.0	1.5	5.2	泥 岩				○	○		
46	61	4.6	3.0	31.8	石英斑岩			○		-		
47	62	1.3	1.2	0.8	泥 岩				○	○		
48	63	2.1	2.0	4.2	チャート				○	○		
49	64	1.5	1.1	1.2	チャート				○	○		
50	65+211	3.2	2.7	5.9	頁 岩			○		×		
51	67	1.3	0.9	1.3	石英斑岩				○	○		
52	68	1.7	1.3	1.3	泥 岩				○	×		
53	69	3.0	1.6	4.8	チャート				○	○		
54	70	1.6	0.7	0.6	チャート				○	○		
55	71	1.5	0.8	0.4	砂 岩				○	○		
56	72	1.2	0.7	0.4	チャート				○	○		
57	73+172+205	4.7	3.5	52.1	砂 岩		○			○		
58	74	2.0	1.6	4.5	石英斑岩			○		○		
59	75	2.3	1.2	2.9	砂 岩				○	○		
60	77	1.9	1.3	3.1	砂 岩				○	○		
61	78+128	3.5	3.2	13.3	チャート			○		○		3片接合
62	79	2.7	2.2	6.0	泥 岩				○	○		
63	82	2.2	1.1	2.5	石英斑岩				○	○		
64	83	4.5	3.7	32.6	砂 岩			○		○		
65	84	2.3	1.1	1.6	砂 岩				○	○		
66	86+207	4.1	3.7	35.2	チャート			○		○		
67	87	3.7	1.9	6.1	砂 岩				○	×		
68	89+118	3.8	3.2	42.3	砂 岩		○			○		
69	90	3.2	2.5	17.6	砂 岩			○		○		
70	93+150+152+182+203	4.5	4.3	35.9	砂 岩		○			○		
71	94	2.4	2.0	6.0	チャート				○	○		
72	96	5.5	3.4	37.8	ホルンフェルス	○				○		
73	97	3.0	2.0	2.4	泥 岩				○	×		
74	98+105	5.0	4.2	66.5	砂 岩		○			○		
75	99	2.0	1.7	3.7	砂 岩				○	○		
76	100	3.0	1.6	6.6	チャート			○		○		
77	101	2.7	3.6	6.0	泥 岩				○	×		
78	102	2.1	1.9	1.2	頁 岩				○	-		
79	103	2.1	1.8	3.2	黒 曜 石				○	×		

Bブロック(3)

No	遺物番号	法 量			石 質	遺存状態				焼 燻	ス ス	備 考
		長径	短径	重量		A	B	C	D			
80	104	1.5	1.2	1.1	泥 岩				○	○		
81	106	3.0	2.4	7.8	泥 岩			○		×		
82	107+147+174+196	6.1	2.4	14.9	ホルンフェルス			○		×		
83	114	1.0	0.8	0.5	チャート				○	-		
84	116	4.3	2.6	12.2	砂 岩				○	○		
85	120	2.1	2.0	5.3	石英斑岩				○	○		
86	121	1.9	1.7	3.2	砂 岩				○	○		
87	122	2.5	1.3	2.8	石英斑岩				○	○		
88	123+125+185	4.4	2.4	11.6	砂 岩			○		○		
89	124	1.9	1.7	2.4	チャート				○	○		
90	127	4.4	2.7	15.8	砂 岩			○		○		
91	129	1.4	0.8	0.3	砂 岩				○	○		
92	130	2.5	1.8	4.4	砂 岩				○	○		
93	131	2.7	2.0	2.2	チャート				○	○		
94	132	1.2	0.9	0.7	チャート				○	-		
95	133	2.4	2.1	2.8	砂 岩				○	×		
96	134	0.9	0.8	0.2	頁 岩				○	×		
97	135	2.6	2.5	9.9	石英斑岩				○	-		
98	136	1.3	1.2	0.5	石英斑岩				○	-		
99	139	1.1	0.5	0.2	チャート				○	-		
100	140	2.8	2.4	5.4	砂 岩				○	○		
101	141	3.5	2.4	5.7	頁 岩				○	×		
102	144	4.2	3.6	14.8	頁 岩				○	×		
103	145	1.6	1.2	1.6	砂 岩				○	○		
104	146+206	3.1	2.5	4.8	チャート				○	○		3片接合
104	206	1.6	1.0	1.0	砂 岩				○	○		
105	149	2.6	1.7	3.2	石英斑岩				○	○		
106	151	1.4	1.0	1.0	砂 岩				○	×		
107	155	3.3	2.4	5.6	砂 岩				○	○		
108	156	2.4	2.4	5.8	チャート				○	○		
109	158+219+220	3.7	3.0	20.2	砂 岩			○		○	○	
110	160	0.9	0.6	0.1	チャート				○	-		
111	161	2.6	1.6	7.2	チャート				○	○		
112	162+197+213	3.1	2.3	12.0	砂 岩			○		○		
113	163	2.7	2.5	7.3	砂 岩			○		○		
114	164	1.8	1.7	2.2	砂 岩				○	○		
115	165	2.5	2.5	7.6	砂 岩				○	○		
116	166	5.4	3.1	36.5	石英斑岩			○		○	○	
117	167	2.0	1.4	3.7	石英斑岩				○	○		
118	168	3.1	1.4	6.2	チャート				○	○		

Bブロック(4)

No	遺物番号	法 量			石 質	遺存状態				焼 ス ス	備 考
		長径	短径	重量		A	B	C	D		
119	169+191	6.2	2.9	31.5	チャート			○		○	
120	169	2.0	1.3	1.3	チャート				○	○	
121	170+199	3.6	2.1	6.4	チャート			○		○	
122	175	3.3	2.7	9.7	チャート				○	○	
123	178	1.6	1.1	1.0	チャート				○	○	
124	179	1.1	0.9	1.2	泥 岩				○	×	
125	180	2.4	2.3	4.7	チャート				○	-	
126	183	2.2	2.2	4.7	チャート				○	○	
127	184	1.6	1.2	1.1	チャート				○	○	
128	186	3.7	2.5	18.0	頁 岩			○		×	
129	187+188	3.9	2.7	14.7	砂 岩			○		○	
130	192	5.2	3.7	41.7	砂 岩		○			○	
131	194	1.8	1.3	2.1	砂 岩				○	○	
132	195	3.3	1.7	3.4	ホルンフェルス				○	×	
133	198	2.9	2.3	8.3	チャート		○			○	
134	201+202	4.6	2.6	17.0	砂 岩				○	○	
135	204	1.5	1.0	1.2	砂 岩				○	○	
136	208	4.0	2.8	30.7	砂 岩				○	○	
137	209	3.5	2.9	8.4	石英斑岩			○		○	
138	210	2.9	1.4	3.0	砂 岩				○	○	
139	212	1.9	1.4	1.2	砂 岩		○			○	
140	214	1.9	1.4	2.5	砂 岩				○	×	
141	215	2.8	1.8	3.8	チャート				○	○	
142	216	1.3	1.2	0.7	砂 岩				○	-	
143	217	1.2	0.9	0.8	砂 岩				○	○	
144	218	1.5	1.0	0.4	泥 岩				○	×	
145	223	1.4	1.0	1.0	砂 岩				○	-	
146	224	1.7	1.1	1.9	砂 岩				○	○	
147	227	1.6	1.3	1.3	砂 岩				○	○	
148	228	0.7	0.4	0.2	頁 岩				○	×	
149	229	1.0	0.7	0.3	砂 岩				○	○	
150	230	-	-	-	砂 岩				○		復元不能

Cブロック

No	遺物番号	法 量			石 質	遺存状態				焼 ス ス	備 考
		長径	短径	重量		A	B	C	D		
1	1	2.2	1.7	4.0	凝 灰 岩				○	○	
2	2	2.6	2.0	5.5	泥 岩				○	×	
3	3	4.7	3.0	50.6	チャート	○				○	
4	4	2.9	1.5	2.1	砂 岩				○	×	

No	遺物番号	法量			石質	遺存状態				焼 磔	ス ス	備 考
		長径	短径	重量		A	B	C	D			
5	6 + 11 + 13	4.8	3.8	67.9	チャート	○				-		
6	7 + 8	4.7	3.1	26.4	チャート			○		○		
7	9	4.5	2.9	22.2	チャート			○		-		
8	10	2.8	2.1	4.0	砂 岩				○	×		
9	12	1.6	0.8	0.5	砂 岩				○	×		

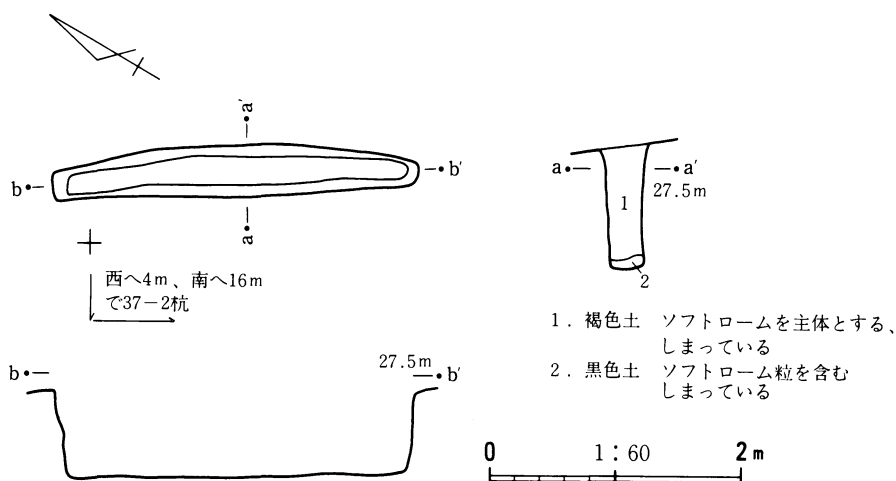
Dブロック

No	遺物番号	法量			石質	遺存状態				焼 磔	ス ス	備 考
		長径	短径	重量		A	B	C	D			
1	1											
2	2 + 37	6.4	4.4	67.2	頁 岩			○		○		
3	3	6.8	3.6	49.7	石英閃緑岩			○		○		
4	4 + 5 + 6 + 7 + 8 + 30 + 35	8.3	6.8	140.9	ホルンフェルス		○			-		
5	9	4.5	3.4	19.7	砂 岩			○		○		
6	10 + 11 + 30 + 36 + 29	6.2	5.6	133.1	頁 岩		○			○		
7	12 + 16	1.8	1.1	0.3	頁 岩				○	×		
8	13	1.3	0.6	0.3	泥 岩				○	×		
9	14 + 41	3.8	3.3	7.7	頁 岩				○	×		
10	15	2.0	1.0	0.8	頁 岩				○	×		
11	16	1.0	0.6	0.2	頁 岩				○	×		
12	17	4.7	2.7	140	頁 岩			○		×		
13	18	3.2	2.5	16.3	砂 岩				○	○		
14	19	2.5	2.0	1.3	泥 岩				○	×		
15	20	1.6	1.0	0.3	チャート				○	×		
16	21	3.2	2.4	3.1	チャート				○	×		
17	22	1.3	0.7	0.3	頁 岩				○	×		
18	23	4.3	2.3	5.9	頁 岩				○	×		
19	24	6.5	4.2	46.9	チャート			○		×		
20	25	1.5	1.4	0.4	泥 岩				○	×		
21	26	4.1	2.5	13.5	玄武岩				○	×		
22	27	3.6	2.7	12.2	玄武岩				○	×		
23	28	6.1	3.9	113.1	砂 岩			○		○		
24	31 + 34	5.2	4.1	49.2	流紋岩			○		○	○	
25	32 + 33	8.3	5.0	76.3	砂 岩			○		○		
26	38	3.3	3.1	17.4	頁 岩			○		○		3片接合
27	39	2.1	1.1	0.8	頁 岩				○	×		
28	40	2.6	1.3	2.3	頁 岩				○	×		
29	45	2.5	1.7	2.0	チャート				○	-		

Eブロック

No	遺物番号	法量			石質	遺存状態				焼 燄	ス ス	備 考
		長径	短径	重量		A	B	C	D			
1	1	2.7	1.6	2.7	玄武岩				○	×		
2	2	5.5	3.9	25.9	玄武岩			○		×		
3	3	3.3	2.7	6.0	砂岩			○		×		
4	4	3.0	2.2	3.9	砂岩				○	×		
5	5	3.1	1.5	3.8	頁岩				○	○		
6	6	2.7	2.3	3.2	ホルンフェルス				○	×		
7	7	2.0	1.5	2.1	ホルンフェルス				○	×		

2. 縄文時代



第64図 1(005)号跡実測図

1 (005) 号跡 (第64図, 図版31)

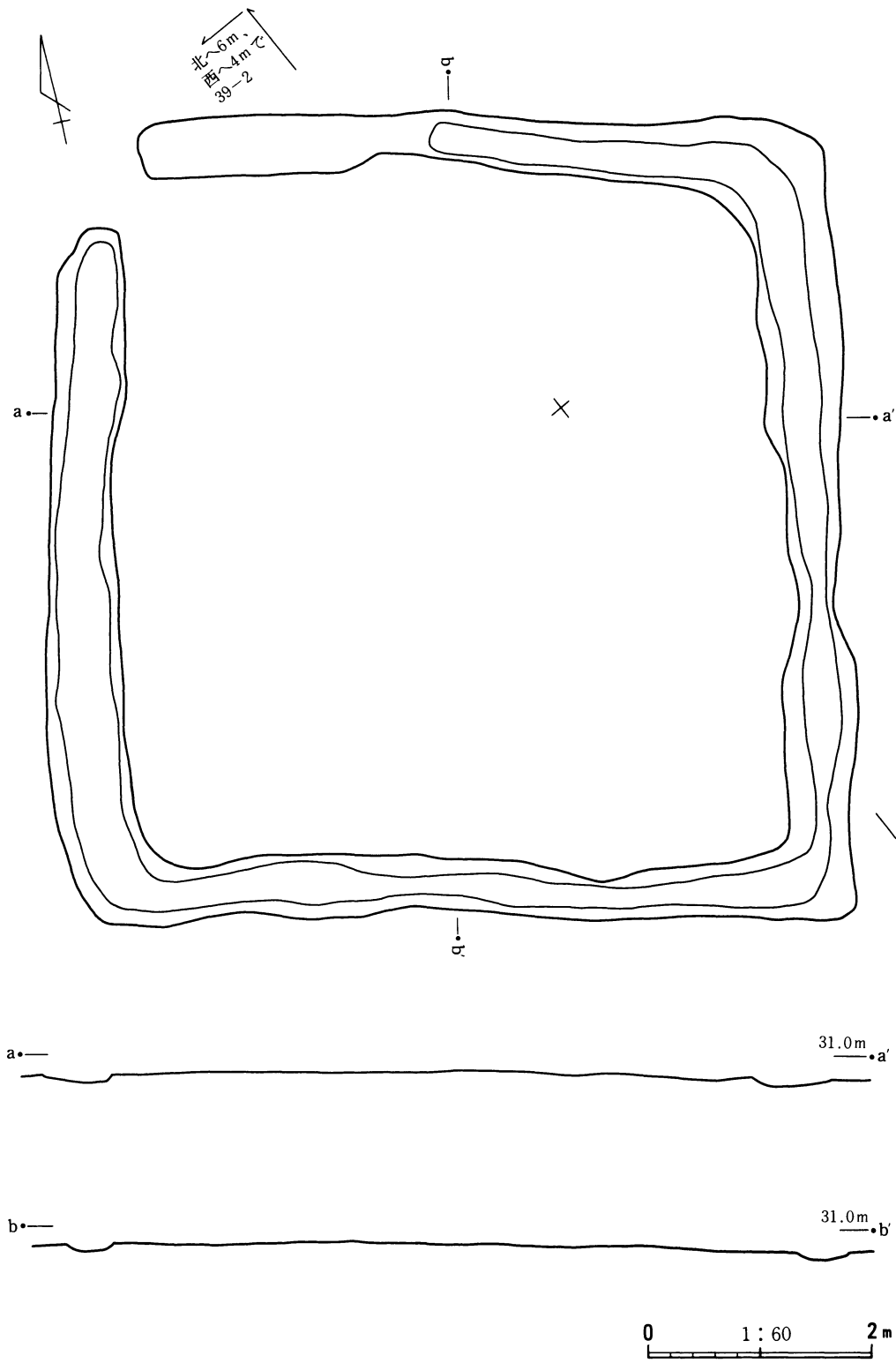
調査区域の南西寄りセンター杭37-3の西側約15mのところのゆるやかな斜面上に位置する。遺構検出面の標高は27.3m前後である。形態は長軸約2.8m, 短軸約0.4mのやや中央部のふくらむ, 細い長円形で長軸は北-31°-西を向いている。検出面から遺構底面までの深さは55~80cmで両側が若干浅くなっている。底面から検出面への立ち上がりは急で, ほとんど垂直になっている。覆土はソフトローム主体の土がたまっていた。

時期を明確にできる遺物は一つ発見できなかったが, 遺構の形状からみて縄文早期のいわゆる「落とし穴」と呼ばれているものと思われる。

3. 奈良・平安時代

2 (001) 号跡 (第65図, 図版32, 33)

方形周溝状遺構である。遺構検出面の標高は, およそ29.7mである。調査区域の北東端近くセンター杭39-2, 39-3の東側で検出された。平面形は南北約7.0m, 東西約7.0~7.3mの

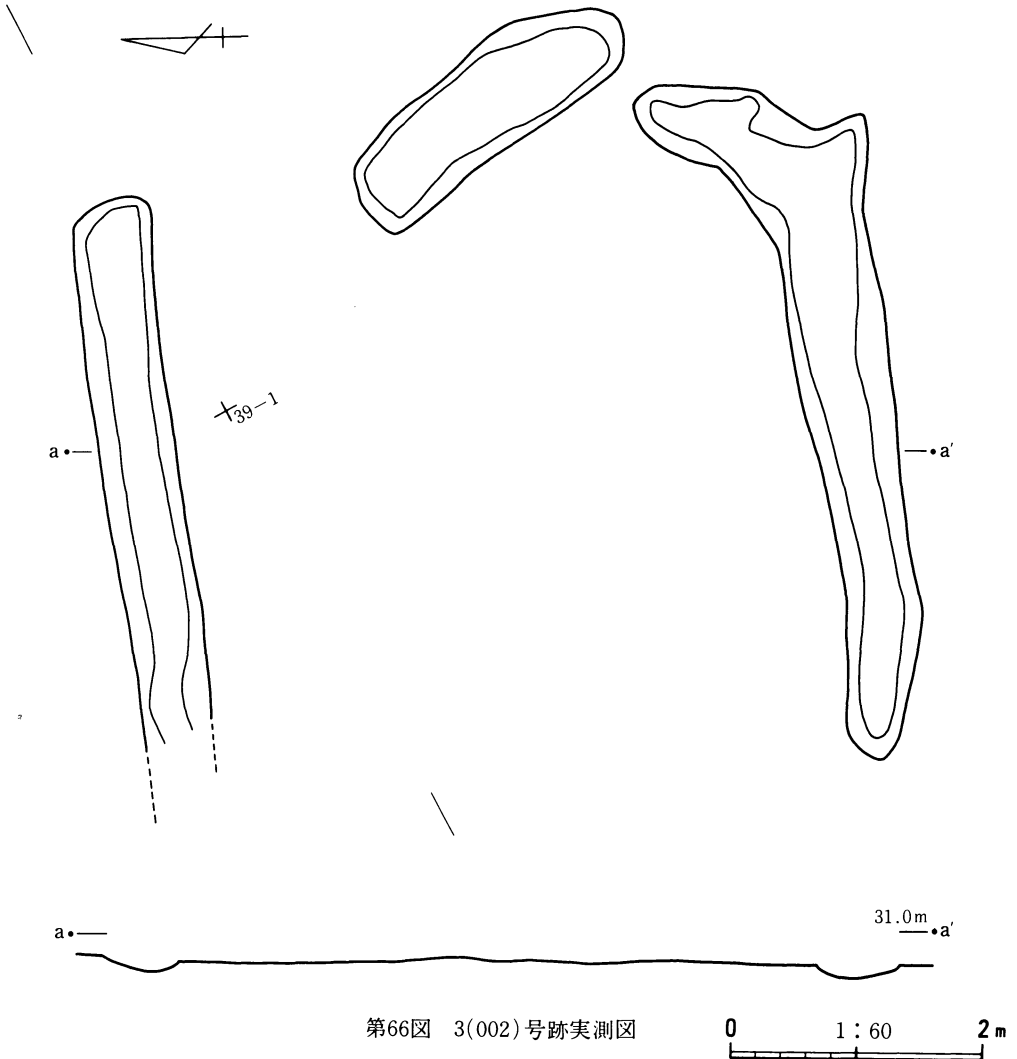


第65図 2(001)号跡実測図

ほぼ正方形に近い。主軸は北-14°-東前後と推定される。

遺構検出面から溝底面までの深さは非常に浅く、平均3～5cmにすぎない。溝は北東の隅が切れる形となっているが原形において、この状態であったかどうかは確認できない。幅は30～80cm東側中央部でやや細くなる以外は、比較的一定である。

遺物 本遺構の時代を明確にできるもの、図示できるものは1点も発見されなかった。主体部は検出できなかった。



第66図 3(002)号跡実測図

3 (002) 号跡 (第66図, 図版32, 33)

方形周溝状遺構である。調査区域の北東側、2号(001)跡のすぐ西側(約3m)のところで検出された。遺構検出面の標高は、およそ29.7mで2(001)号跡とほぼ同じである。

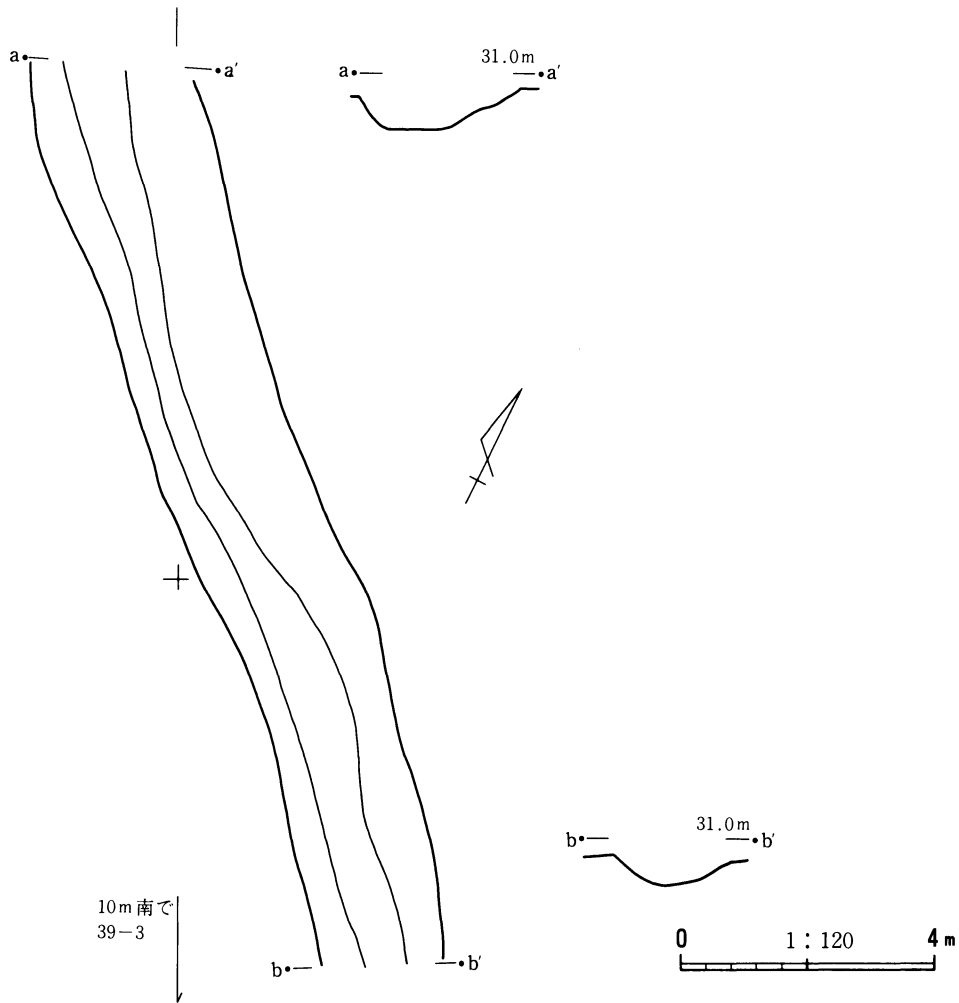
平面形は確定し得ないが、2(001)号跡と同じ正方形に近いものと推定される。南北は約6.3m、東西は西側部分が攪乱を受けており不明である。主軸は北-6°-西(もしくはこれに直交)前

後、検出面から溝底面までの深さは浅くて、平均7cm前後である。検出された溝は北東隅と東側の溝の一部分が切れる形となっている。溝の幅は60cmほどで東側を除いてほぼ一定である。

時代を決定できる遺物は発見されなかった。

区域の内側に主体部を確認することはできなかった。

4. その他



第67図 4(003)号跡実測図

4 (003) 号跡 (第67図, 図版33)

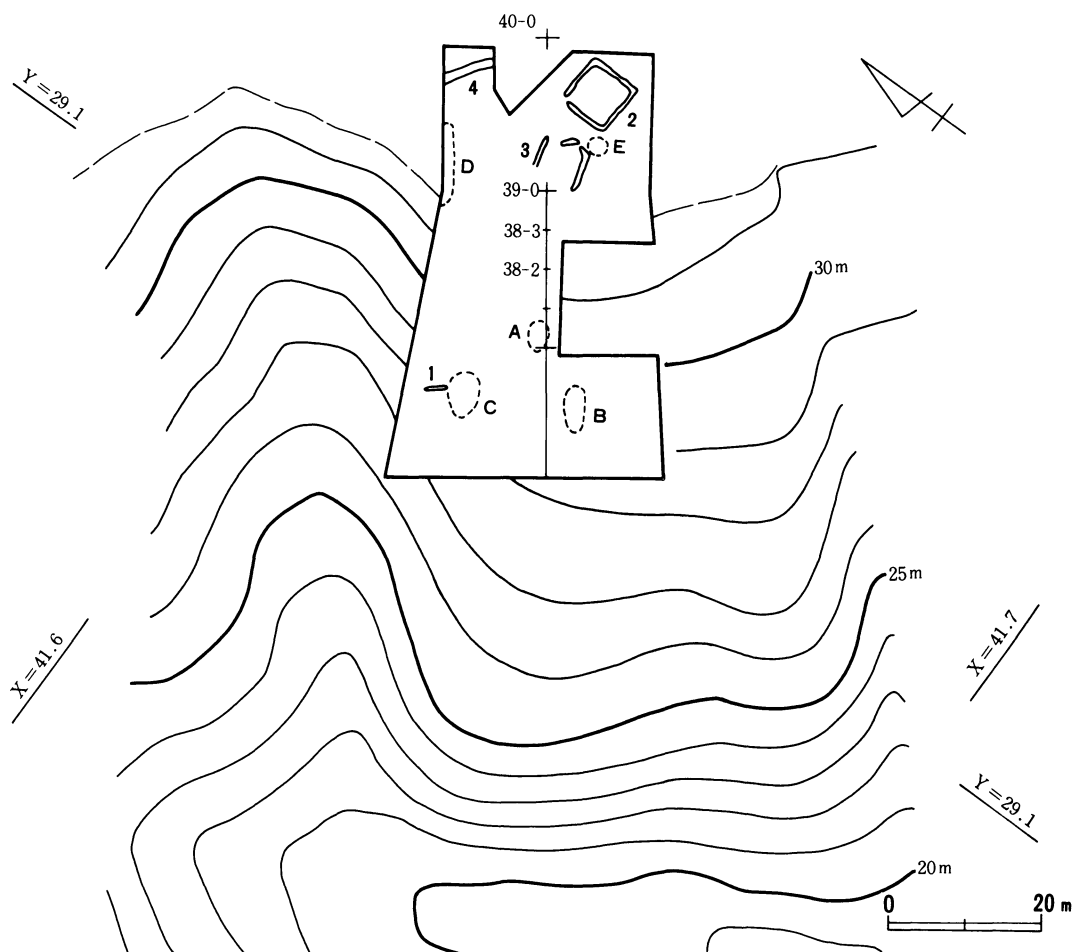
溝状遺構である。調査区域の北端、センター杭39-3の西側で検出された。遺構検出面の標高はおもそ29.8mである。

ほぼ東西に走る溝の一部で両端とも調査区域外へと続いており、長さは不明である。溝の幅は、2.0~2.4 m でほぼ一定している。掘りこみは余り深くなく、10~25 cm。底面はさほど明確ではない。立ち上がりはゆるやかで断面は U 字状、あるいは崩れた逆台形状を呈す。覆土は黒

色土の単一層で、若干のソフトロームを含んでいる。全体に軟質である。

本遺構の時代及び性格を明確にできる遺物は発見されていない。

5. まとめ



第68図 遺構配置図

須摩堀遺跡から発見された遺構をまとめると、礫群が5地点、落とし穴状の土壇が1基、方形周溝状遺構が2基、溝が1条となる。

このうち礫群は関東ローム層のⅢ～Ⅳ層を中心に検出された。原形を保っているものは少なく、熱を受けて破砕しているものが中心となっている。また、AブロックとBブロックに接合関係がみられ、同時存在の可能性が考えられる。これらの礫群は出土層位から先土器時代に属するものと推定される。土壇には遺物が伴わなかったが形状から縄文時代早期の落とし穴である可能性が高い。また方形周溝状遺構においても、その時期なり性格を明らかにする遺物は検出できなかったが、奈良時代の遺構と考えて大きな誤りはないと思われる。溝は今回の調査だけでは時期・性格とも不明である。

写 真 图 版



遺跡周辺の地形(1) <縮尺 約 1 : 10,000, 1967年 3 月撮影>



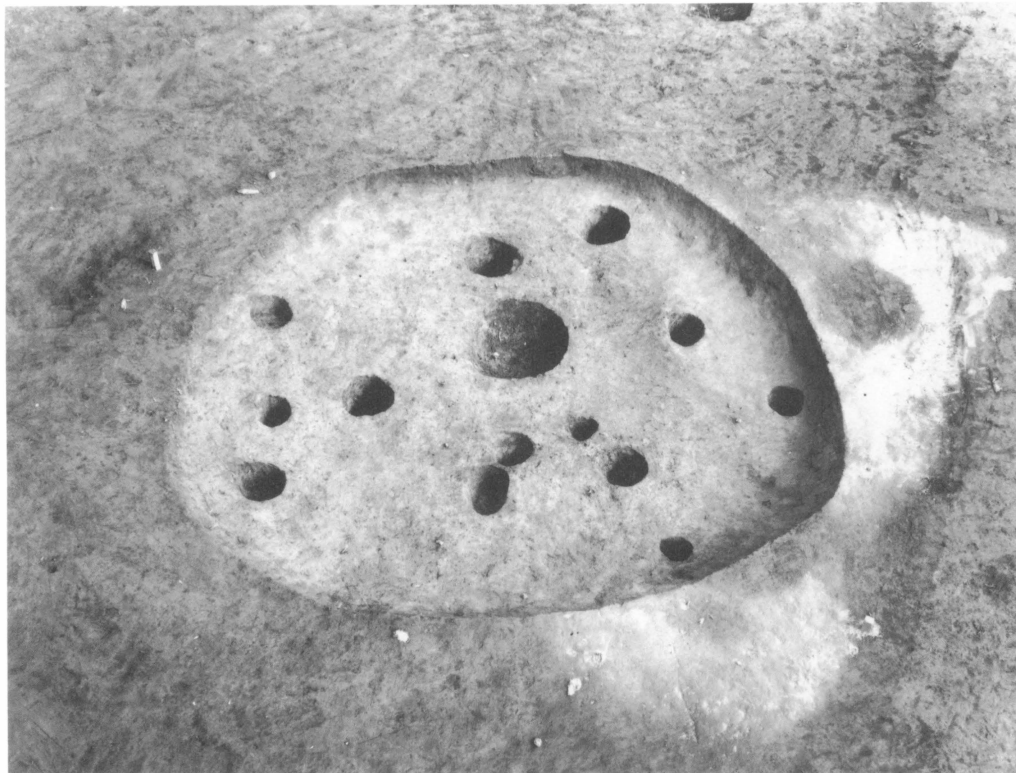
遺跡周辺の地形(2)〈縮尺 約1:10,000, 1985年1月撮影〉



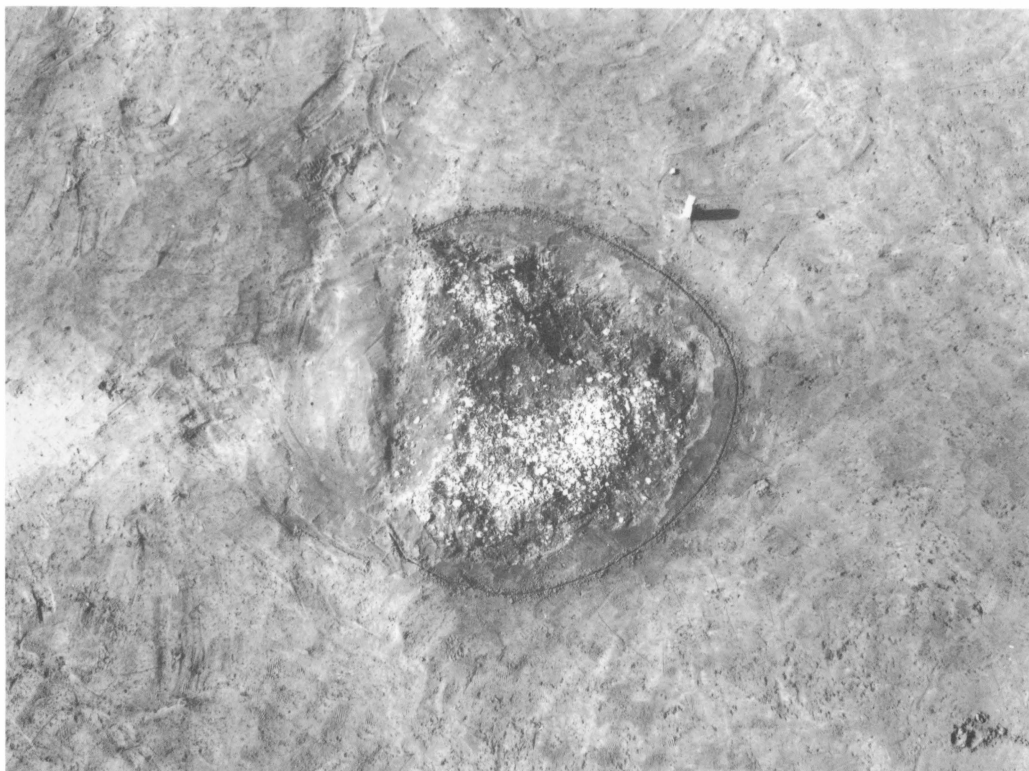
遺跡遠景



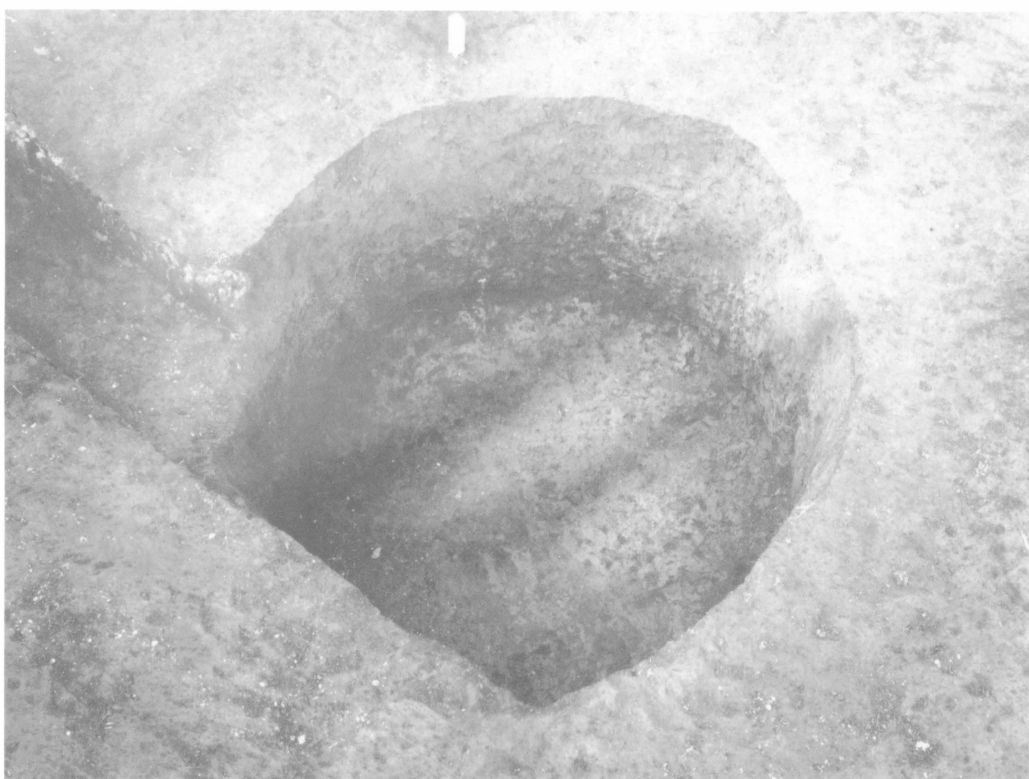
1 (006)号跡<左>・2 (204)号跡<右>



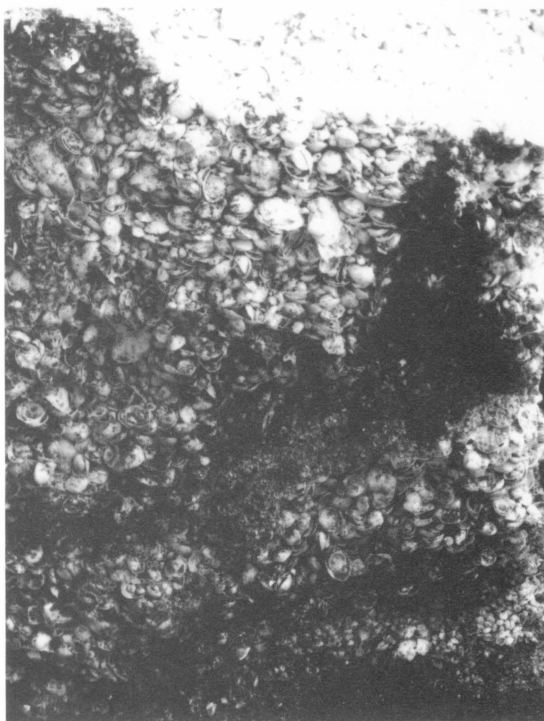
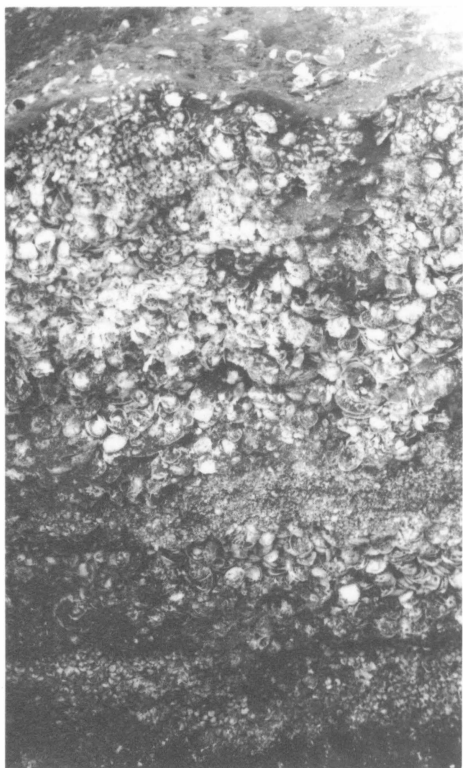
3 (009)号跡 南西から



4(201)号跡 検出状況



4(201)号跡 完掘後



4 (201)号跡 sec.a-a' (st.B南面)〈左〉・sec.b-b' (st.B東面)〈右〉



5 (202)号跡



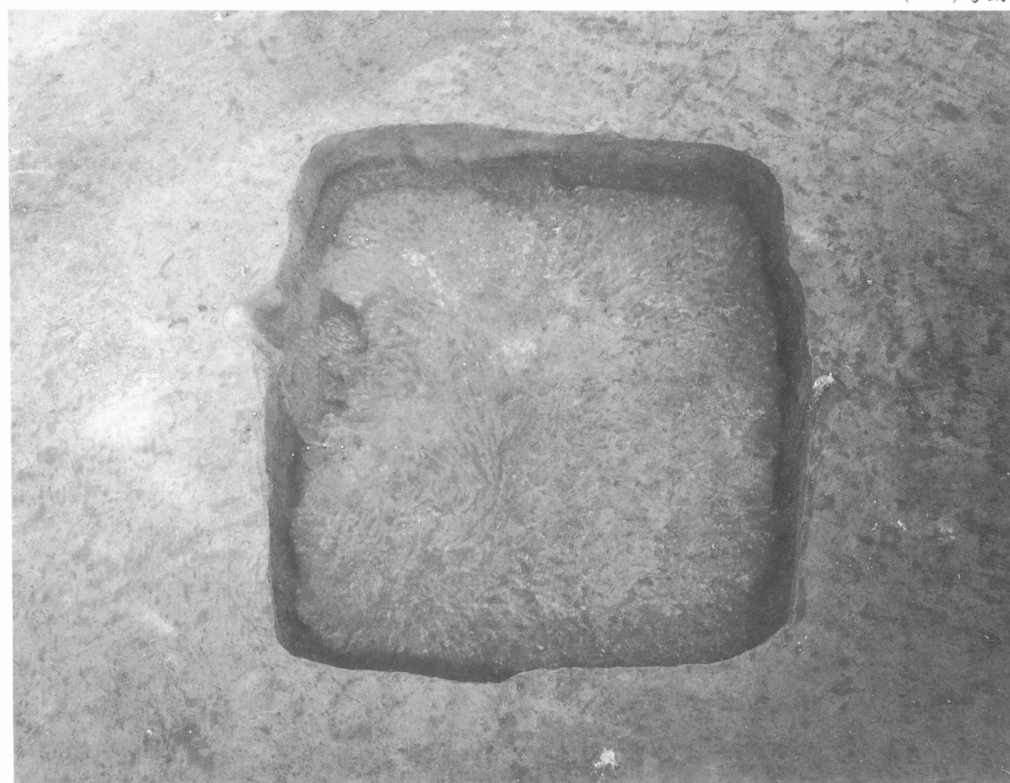
6(203)号跡 南西から



7(206)号跡



8 (001)号跡



9 (002)号跡



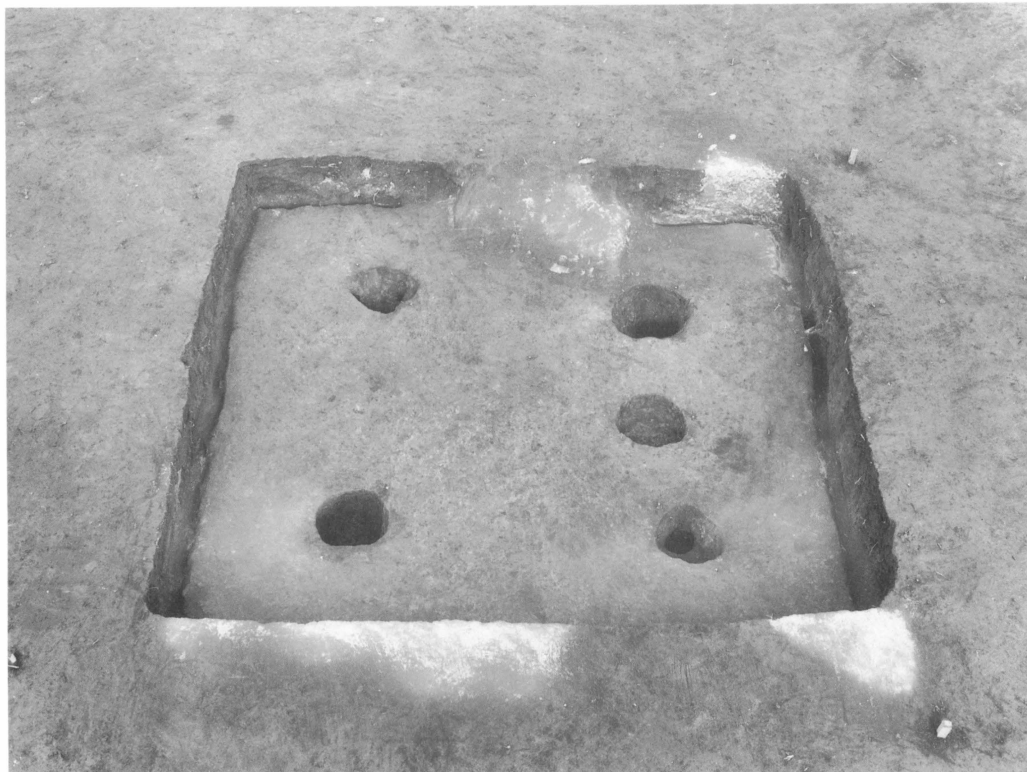
10(003)号跡<手前>・11(004)号跡<奥>



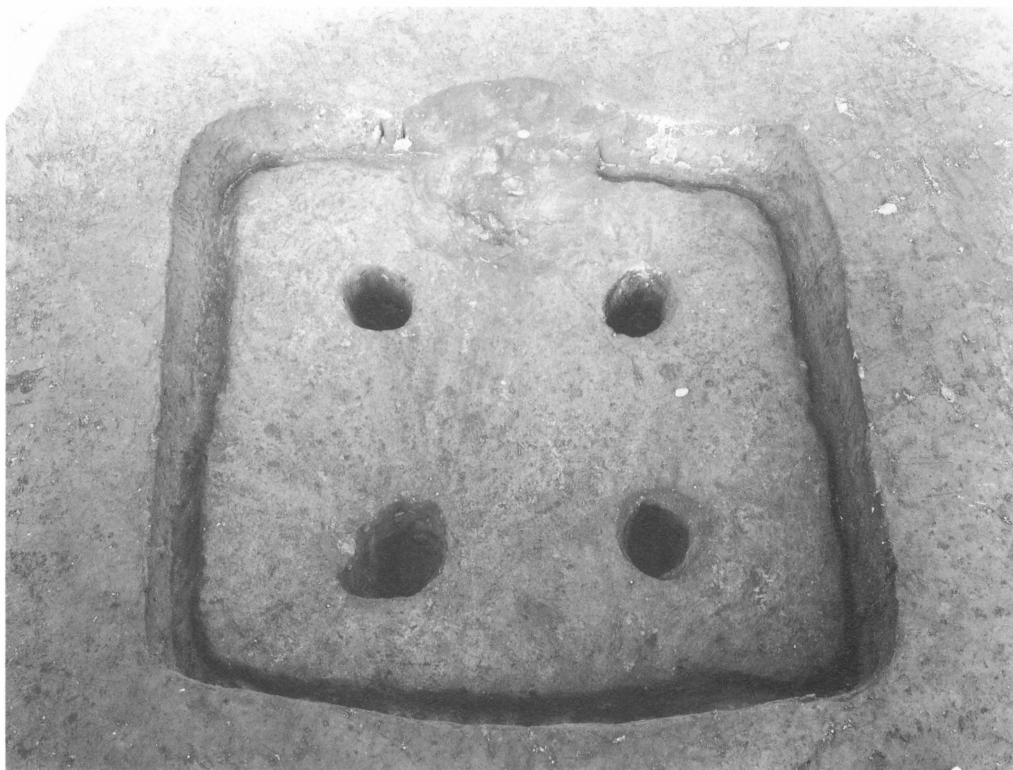
10(003)号跡<手前>・7(206)号跡<中>・11(004)号跡<奥>



12(005)号跡



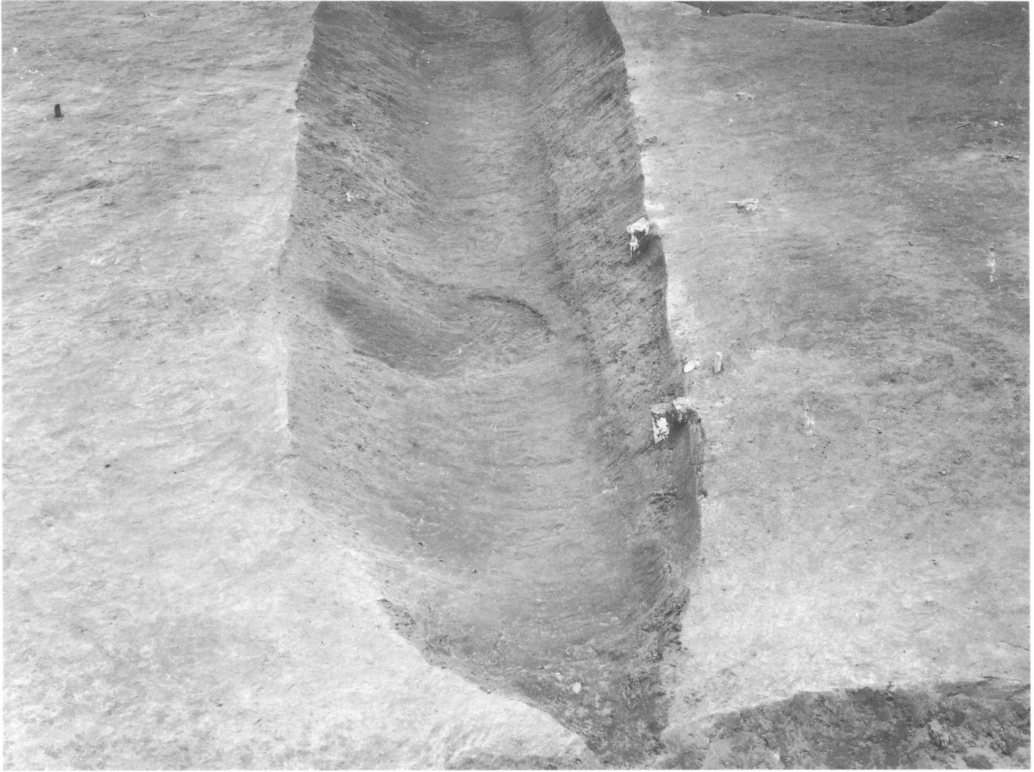
13(007)号跡



14(008)号跡



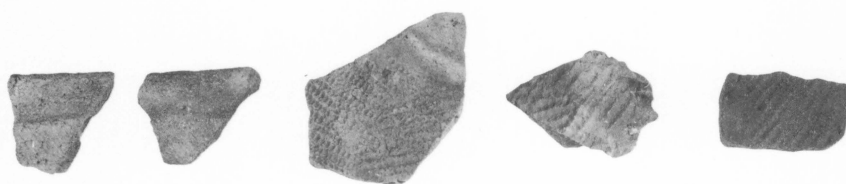
15(101)号跡 南から



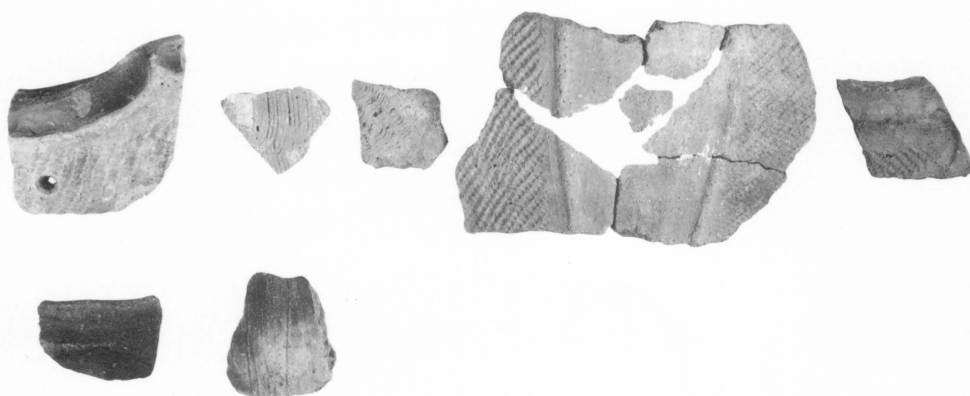
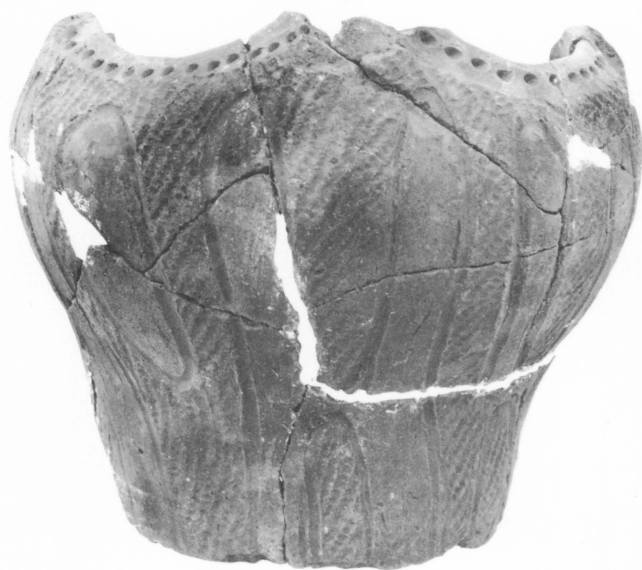
16(102)号跡 西から



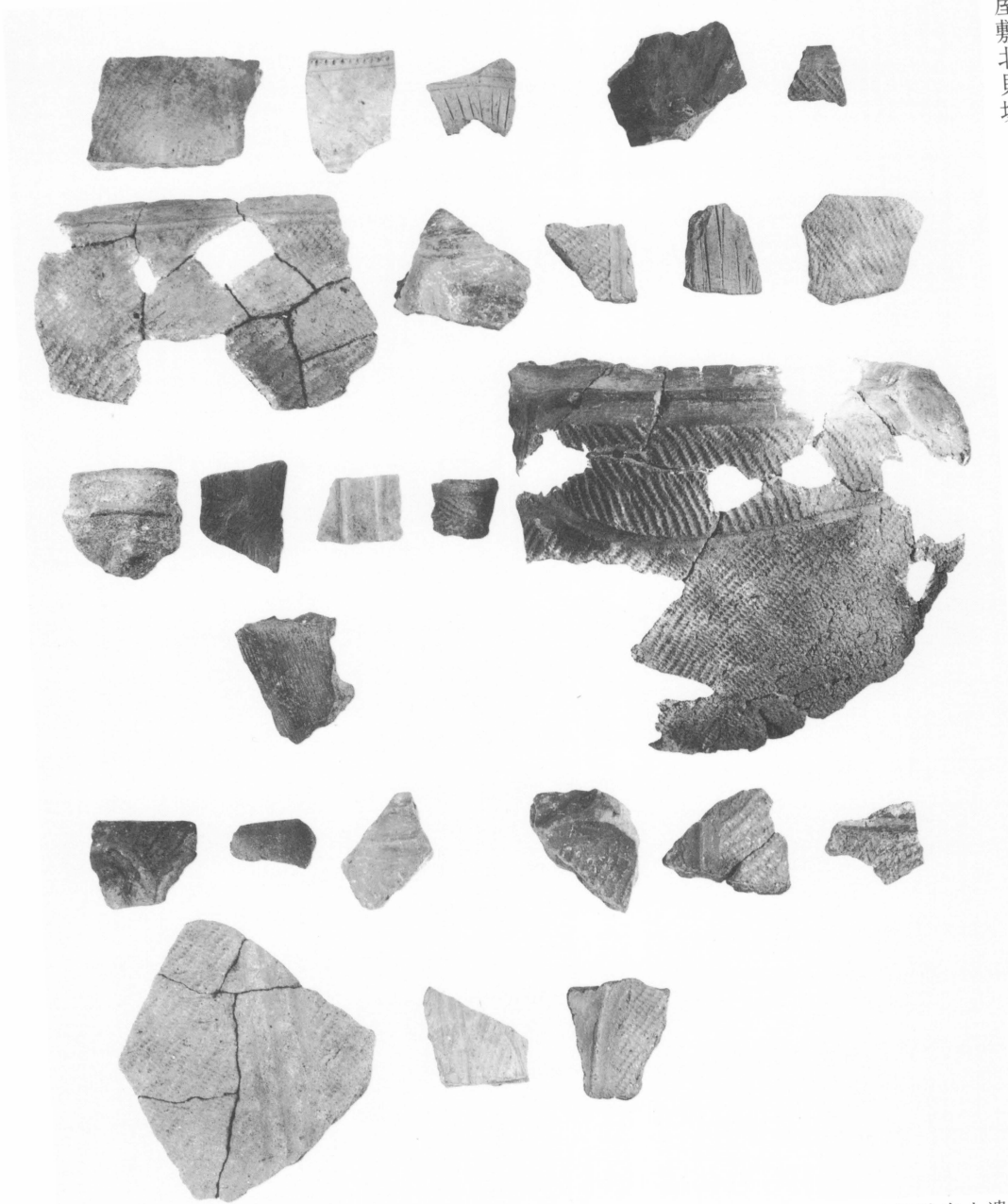
17(205)号跡 北から



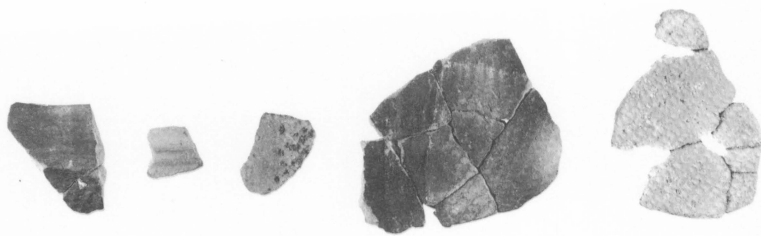
1 (006)号跡出土遺物



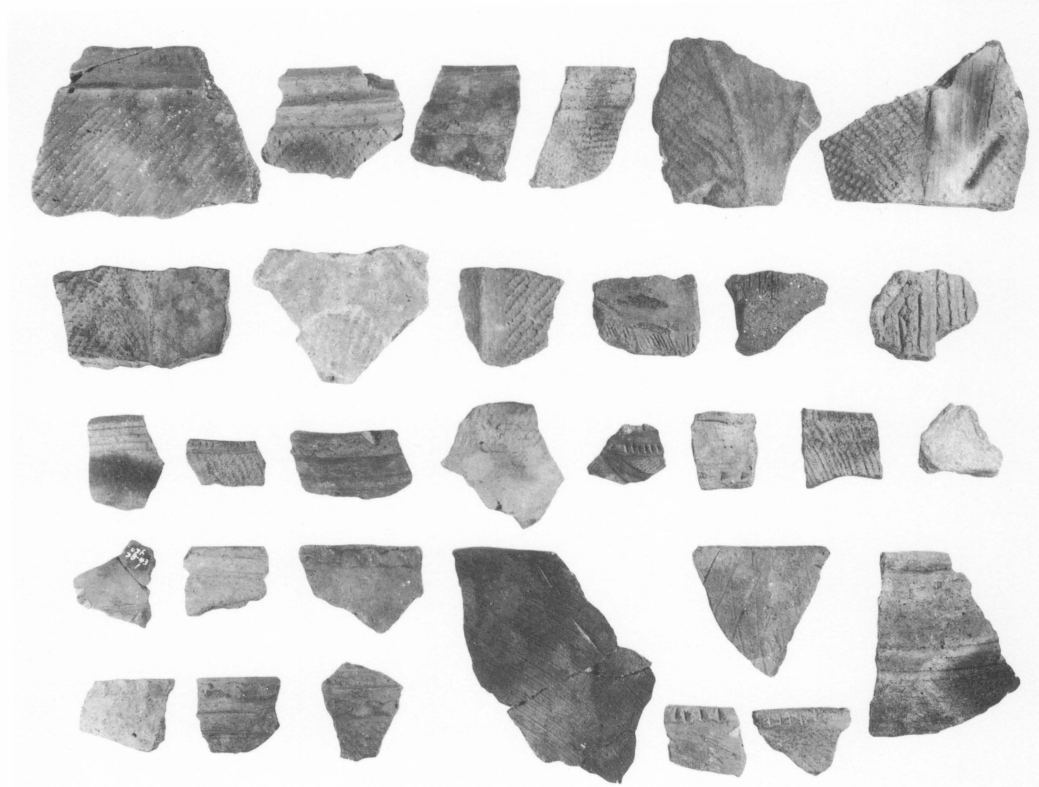
3 (009)号跡出土遺物



4(201)号跡出土遺物



5(202)号跡出土遺物



グリッド出土遺物



10(003)号跡出土遺物 2 (↑)

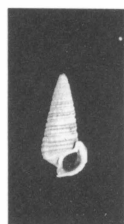
10(003)号跡出土遺物 3 (↙)

13(007)号跡出土遺物 4 (→)





スガイ



ヘナタリ



ウミニナ



ウミニナ科



ツメタガイ



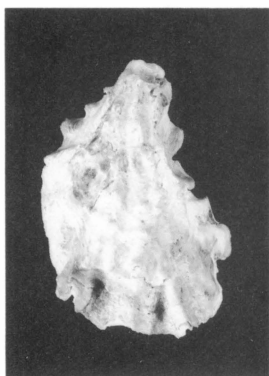
アカニシ



イボニシ



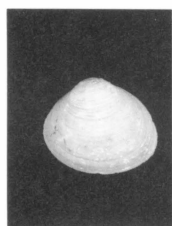
ハイガイ



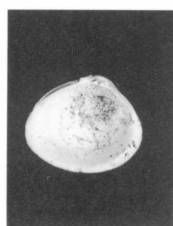
マガキ(左)



マガキ(右)

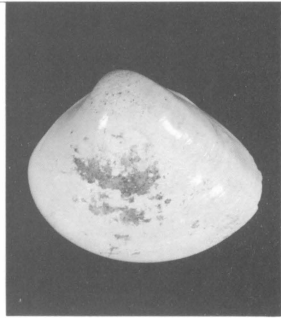
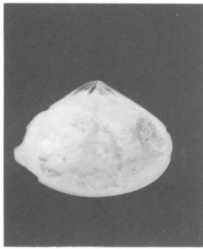


ヤマトシジミ



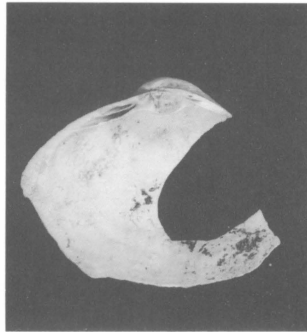
アサリ



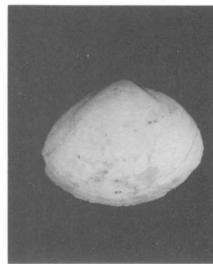
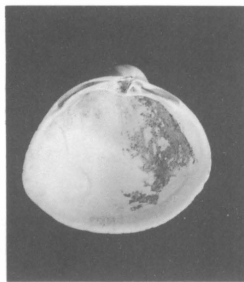
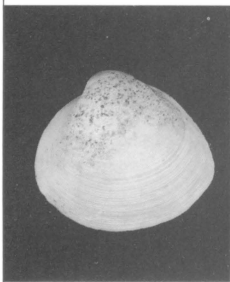


オキアサリ

ハマグリ

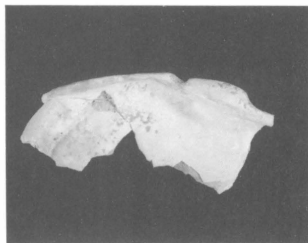
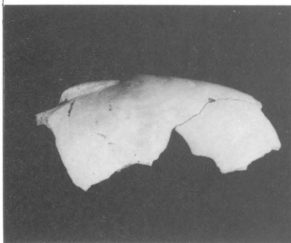


バカガイ

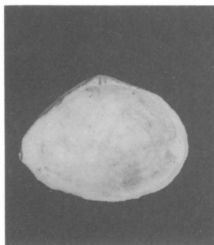
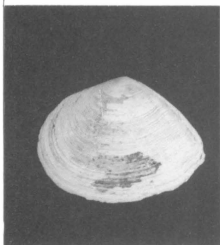


シオフキ

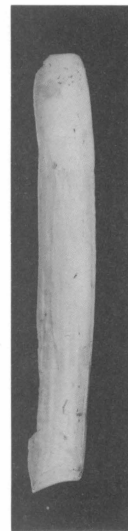
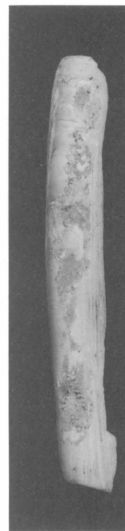
ベニハマグリ



ムラサキガイ



サラガイ



マテガイ



Aブロック出土状況



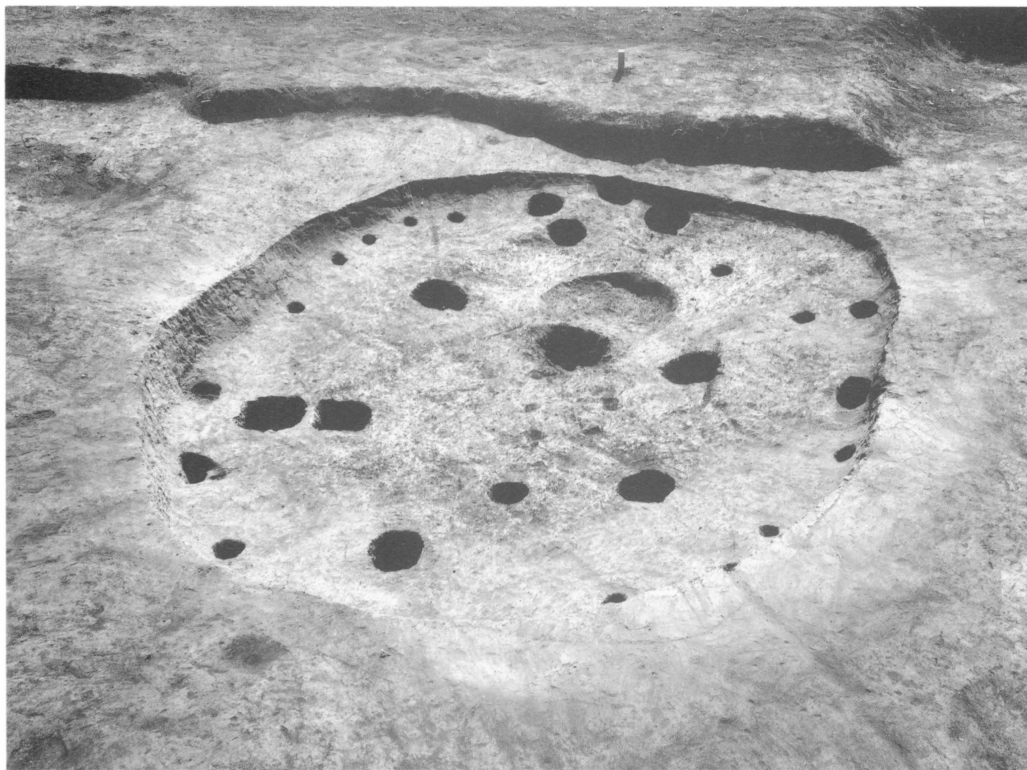
1(008)号跡 南西から



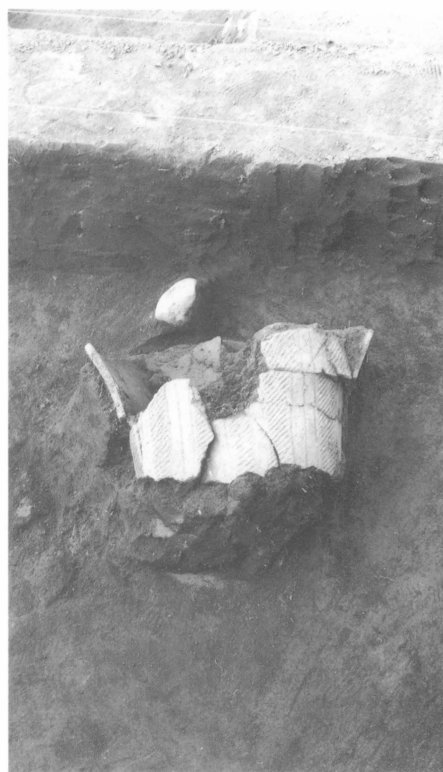
1 (008)号跡 sec.g-g' (↑)
sec.f-f' (↗)
炉跡 南から (→)



2 (013)号跡



3(014)号跡 北西から



3(014)号跡 炉跡 南から<左>・遺物出土状況<右>



4 (011)号跡



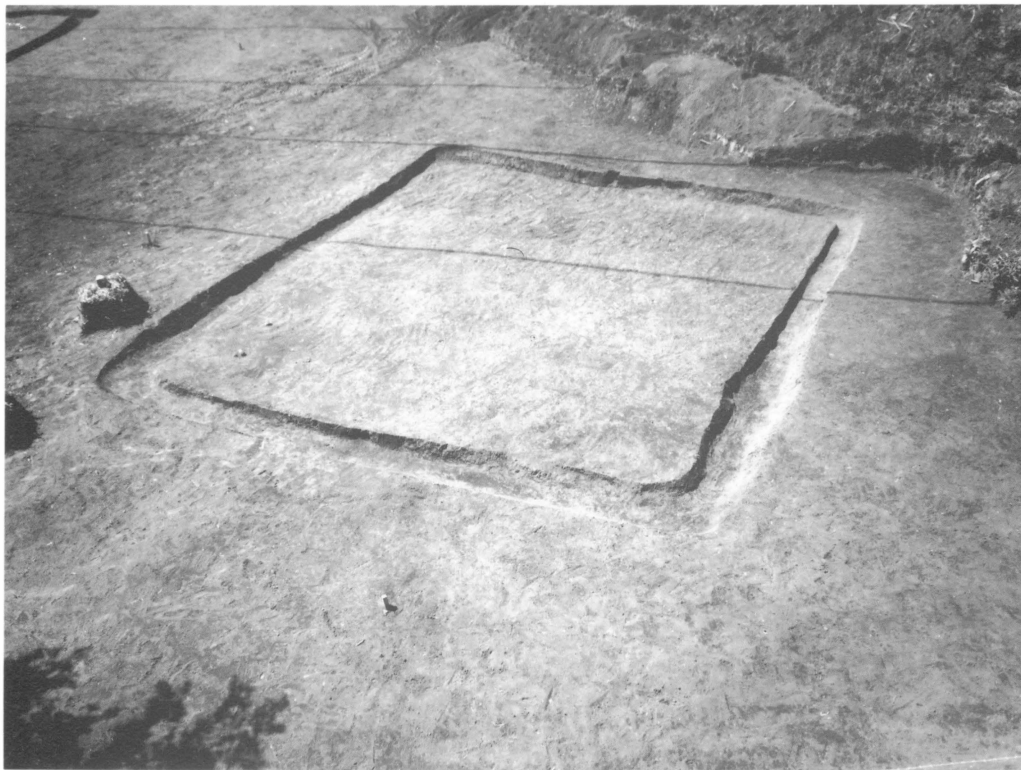
5 (015)号跡
遺物出土状況<左>・掘り上がり<上>



6 (001)号跡



7 (002)号跡



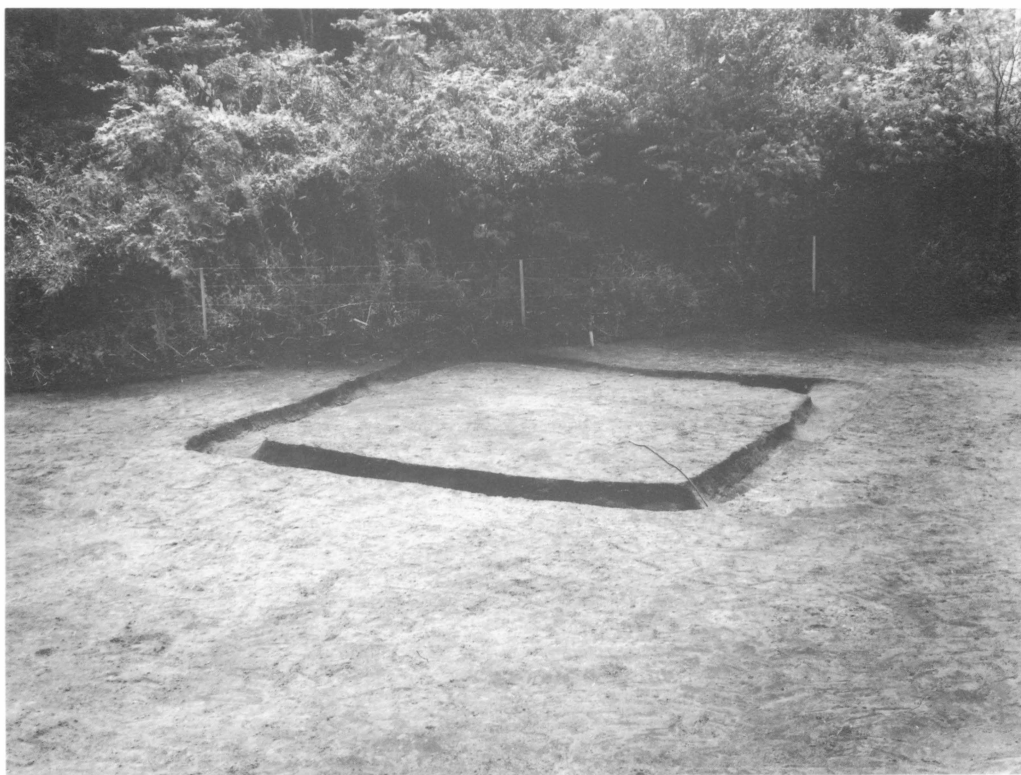
8(003)号跡



8(003)号跡 主体部



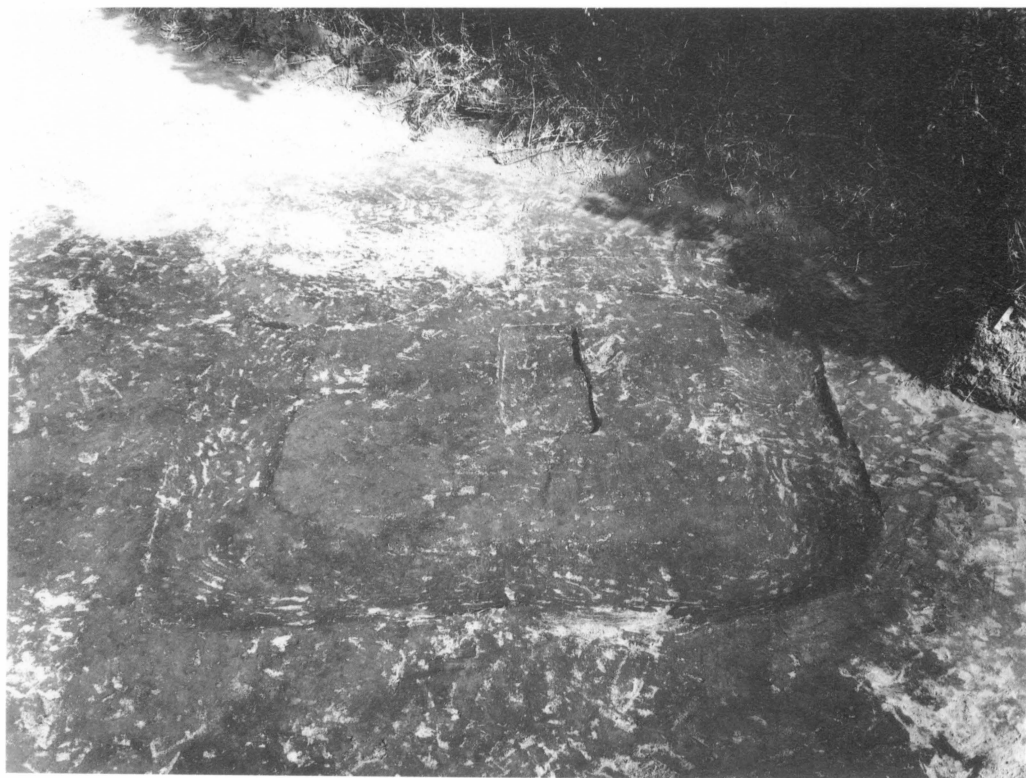
8 (003)号跡 北東から



9 (004)号跡



10(005)号跡



11(009)号跡 北西から



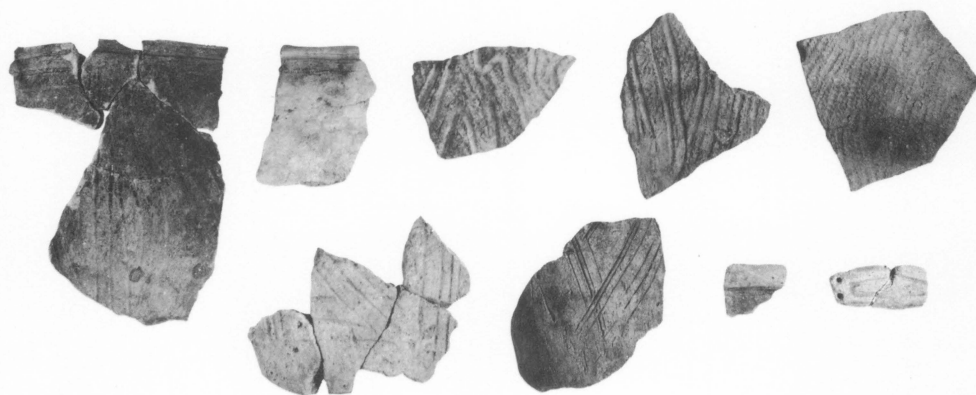
12(006)号跡



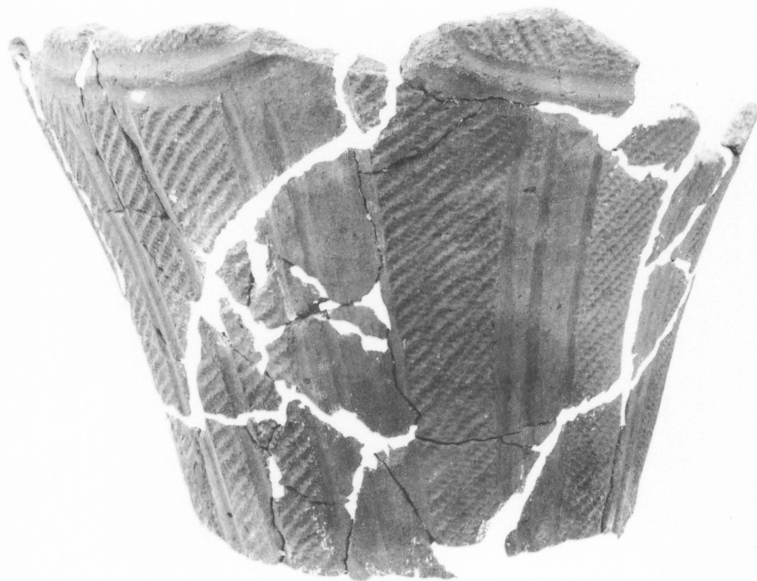
13(007)号跡



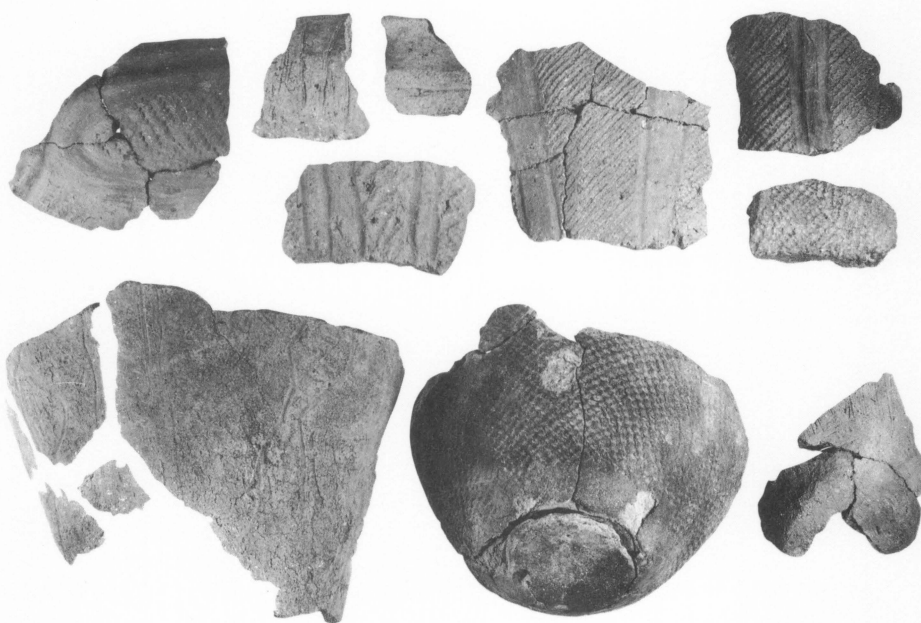
13(007)号跡出土遺物



1(008)号跡出土遺物



3(014)号跡出土遺物(1)



3 (014)号跡出土遺物 (2)



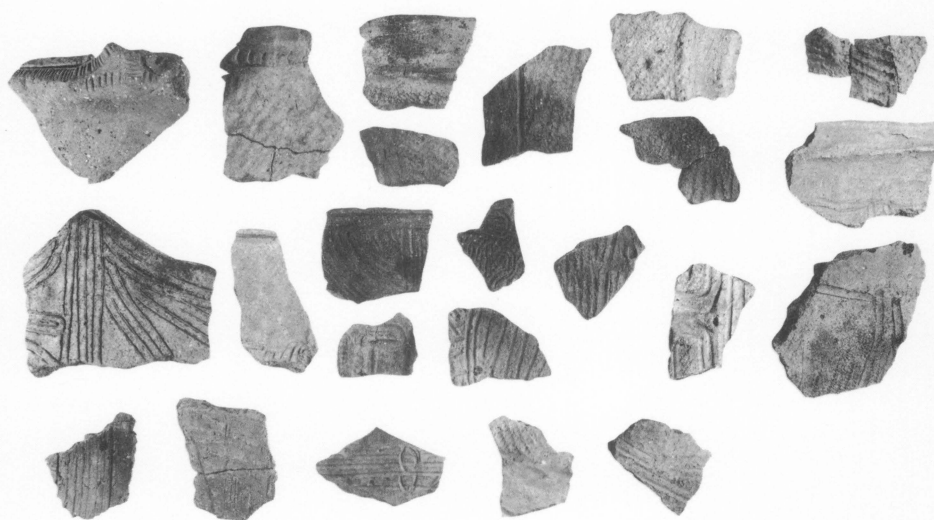
14(010)号跡出土遺物



2 (013)号跡出土遺物



5 (015)号跡出土遺物



グリッド出土遺物



Aブロック出土状況 南西から



Bブロック出土状況 南西から



Cブロック出土状況 南西から



Dブロック出土状況 南西から



Eブロック出土状況 南西から



1(005)号跡



2 (001)号跡



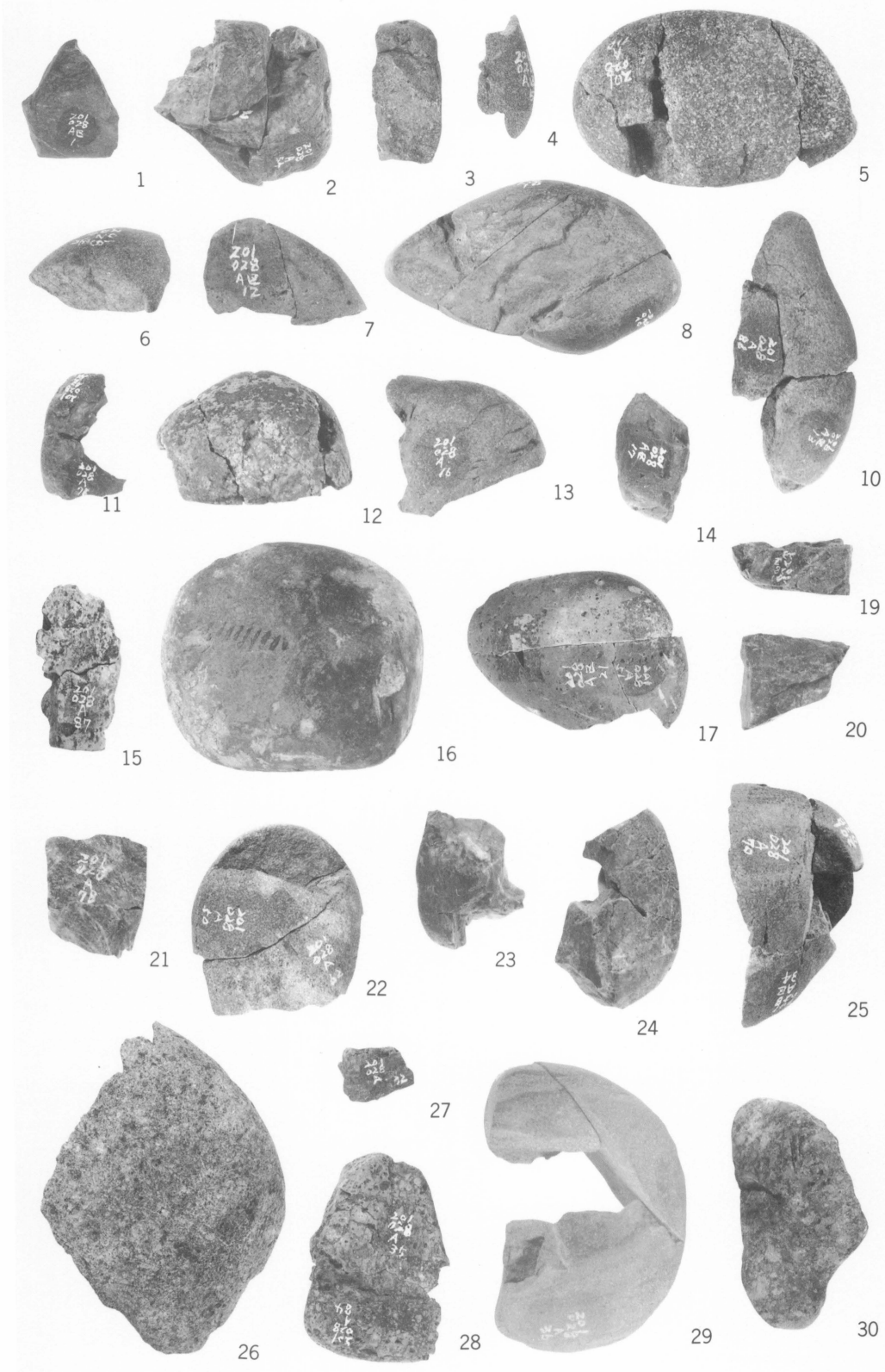
3 (002)号跡



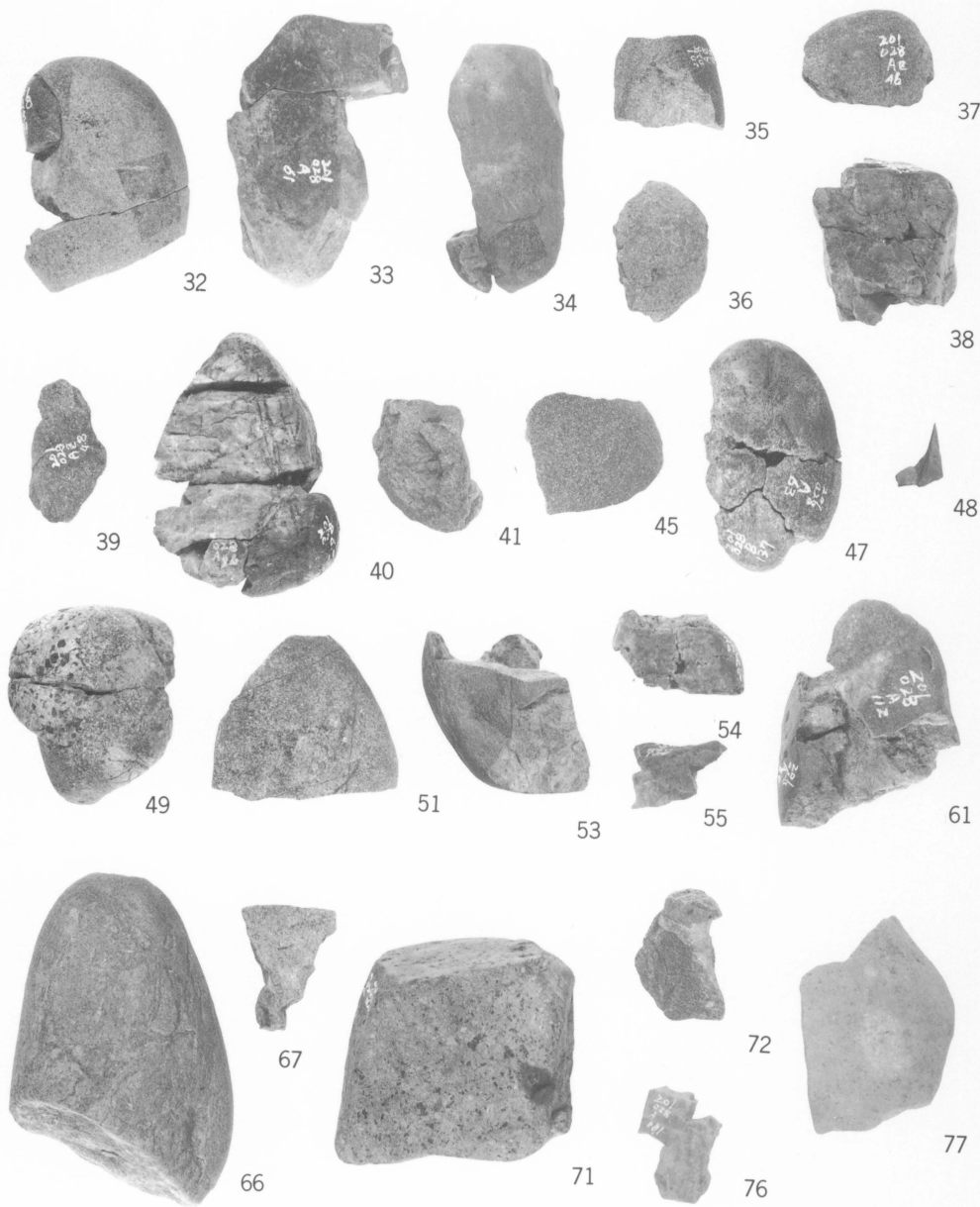
2 (001)号跡<奥>・3 (002)号跡<手前>



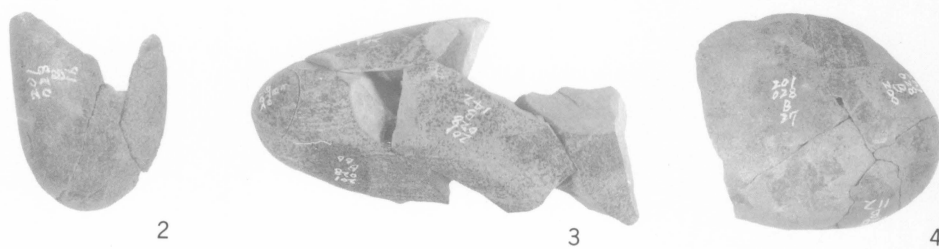
4 (003)号跡



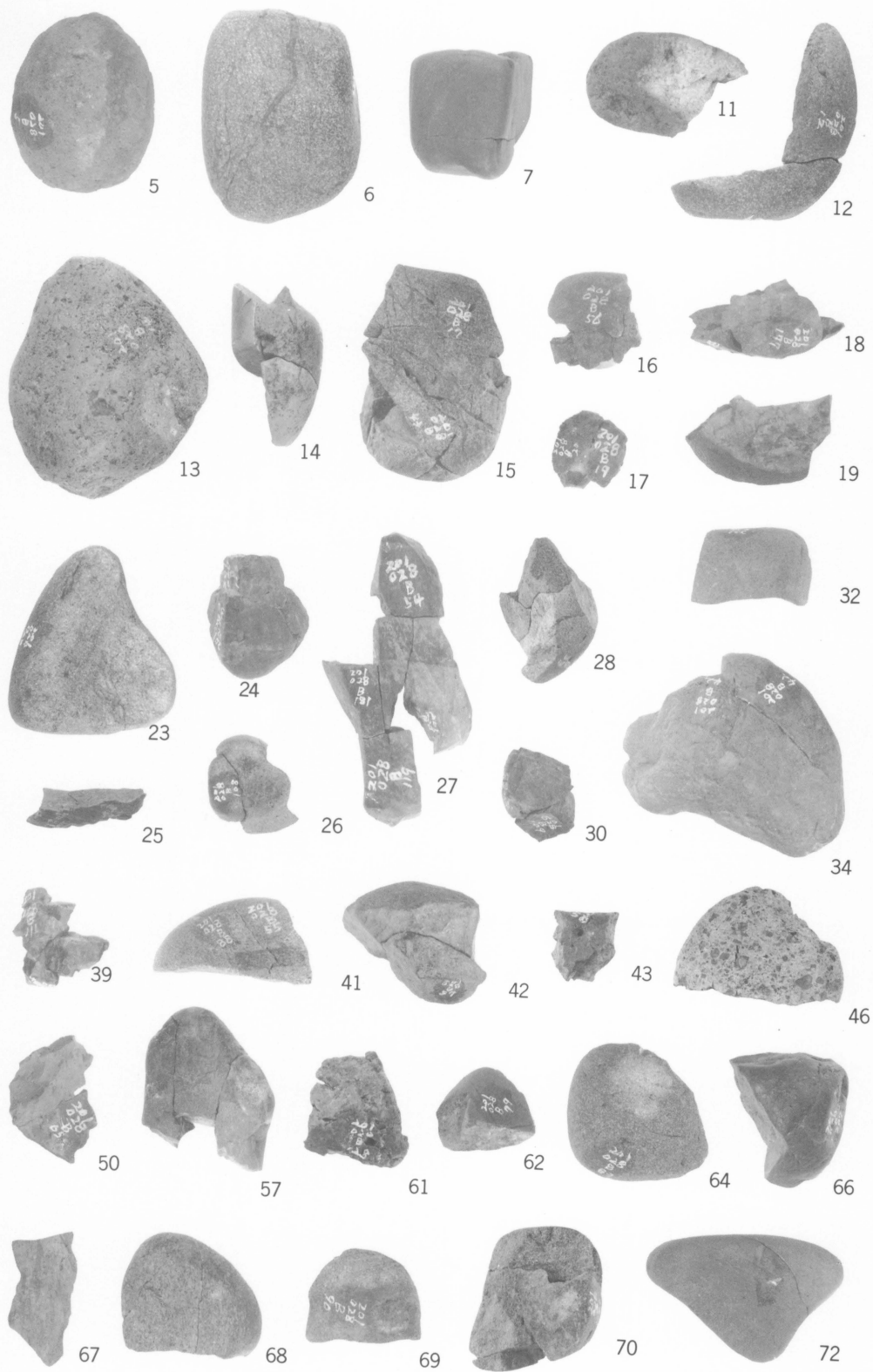
Aブロック出土遺物(1)

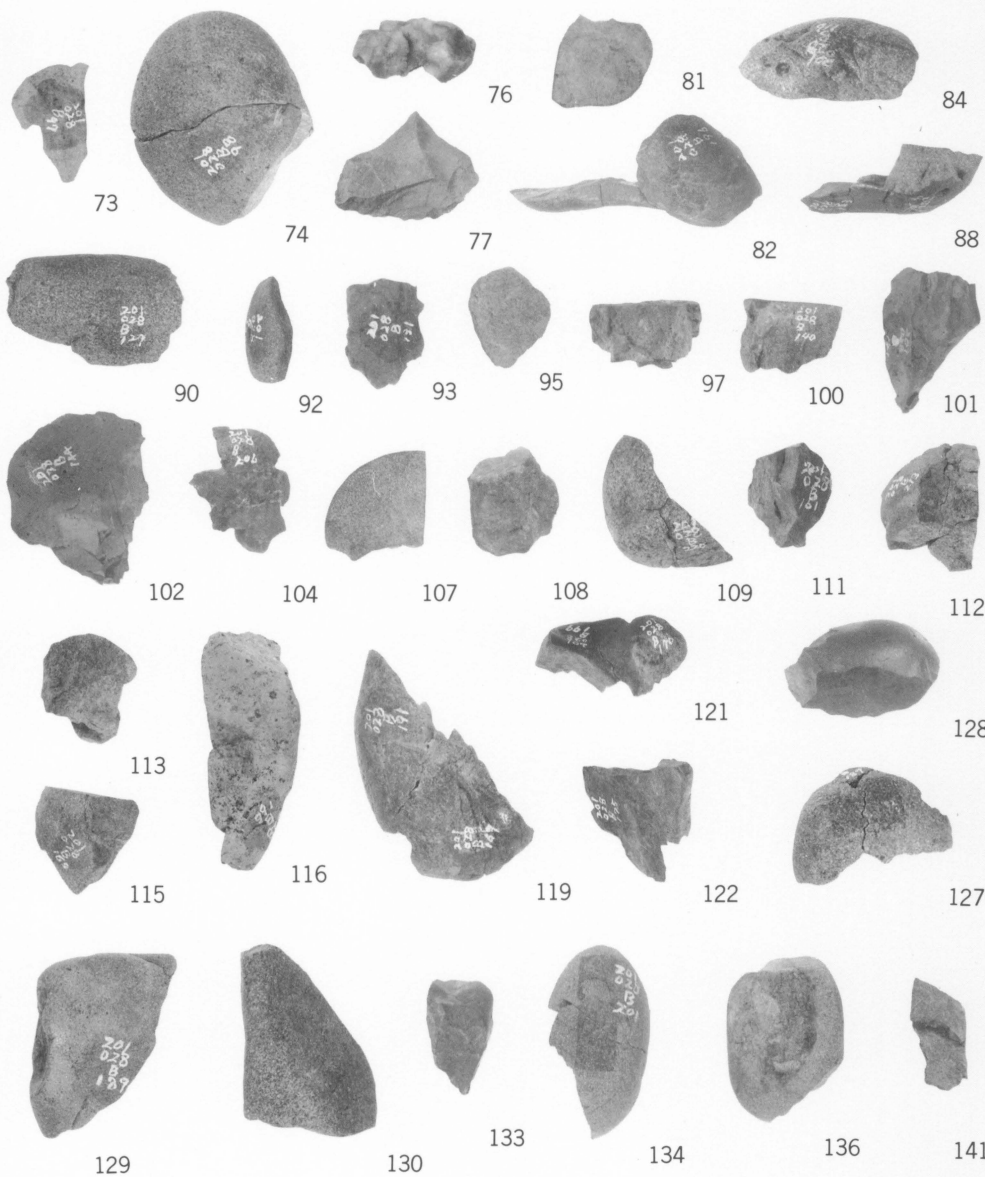


Aブロック出土遺物 (2)

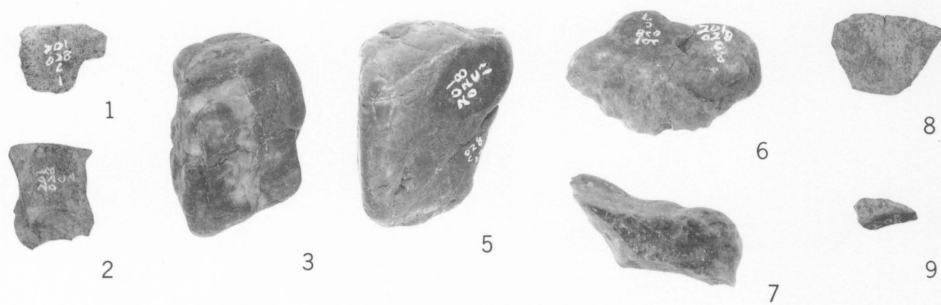


Bブロック出土遺物 (1)

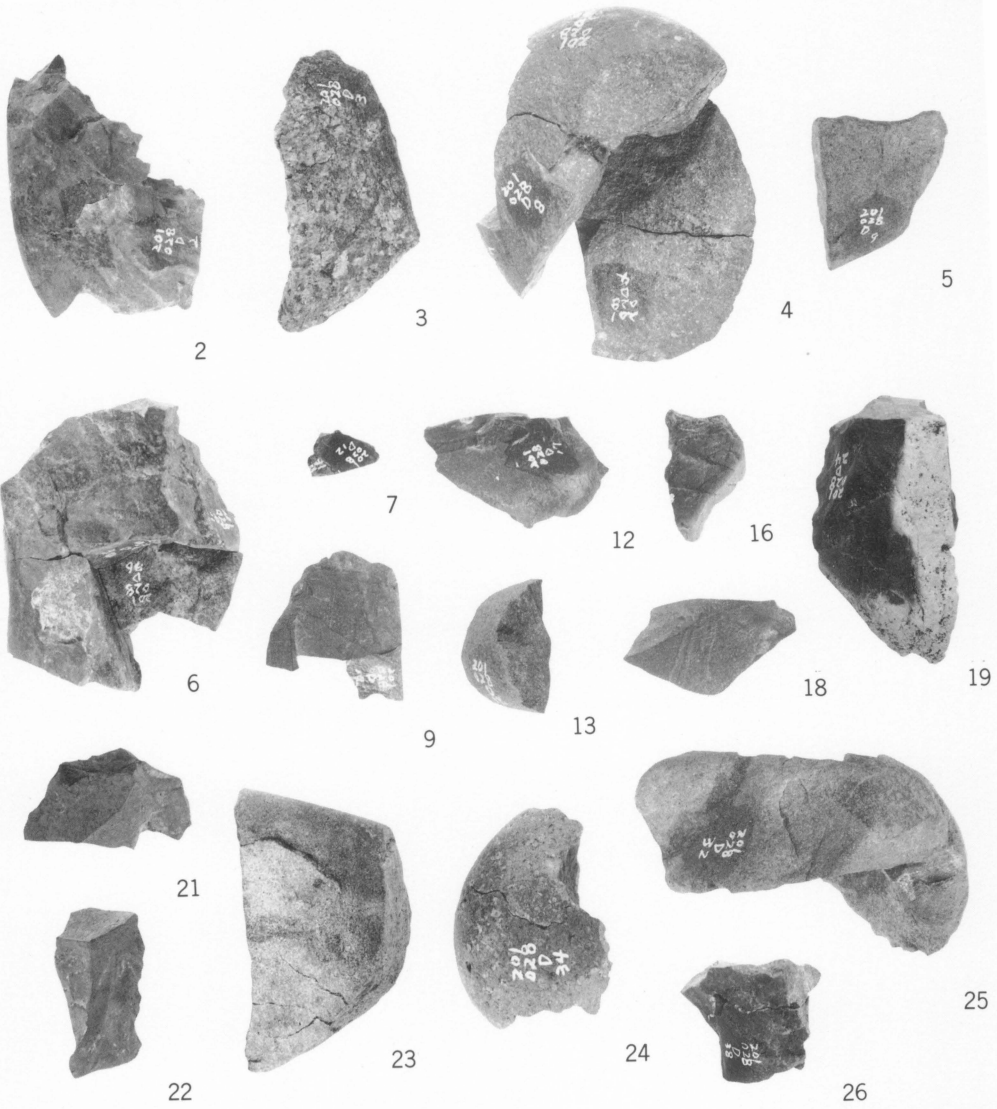




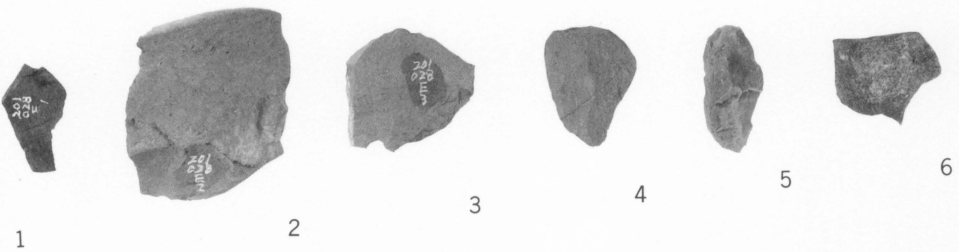
Bブロック出土遺物 (3)



Cブロック出土遺物



Dブロック出土遺物



Eブロック出土遺物

千葉市荒屋敷北貝塚・谷津上・須摩堀遺跡

一般国道51号(北千葉バイパス)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月29日 発行

発行 建設省関東地方建設局千葉国道工事事務所
財団法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2-10-1

印刷 有限会社 正文社
千葉市都町2-5-5

千葉市荒屋敷北貝塚・谷津上・須摩堀遺跡

正 誤 表

ページ	箇所	誤	正
3	25行目	南側へ強り出した	南側へ張り出した
88	表見出し	Cブロック	Cブロック(i)
89	〃		Cブロック(2)
92	7行目	2号(001)跡の	2(001)号跡の
92	10行目	攪乱を受けて	攪乱を受けて
93	8行目	はおもそ29.8m	はおよそ29.8m